鴻臚館跡11

－平成11年度発掘調査報告書－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第695集

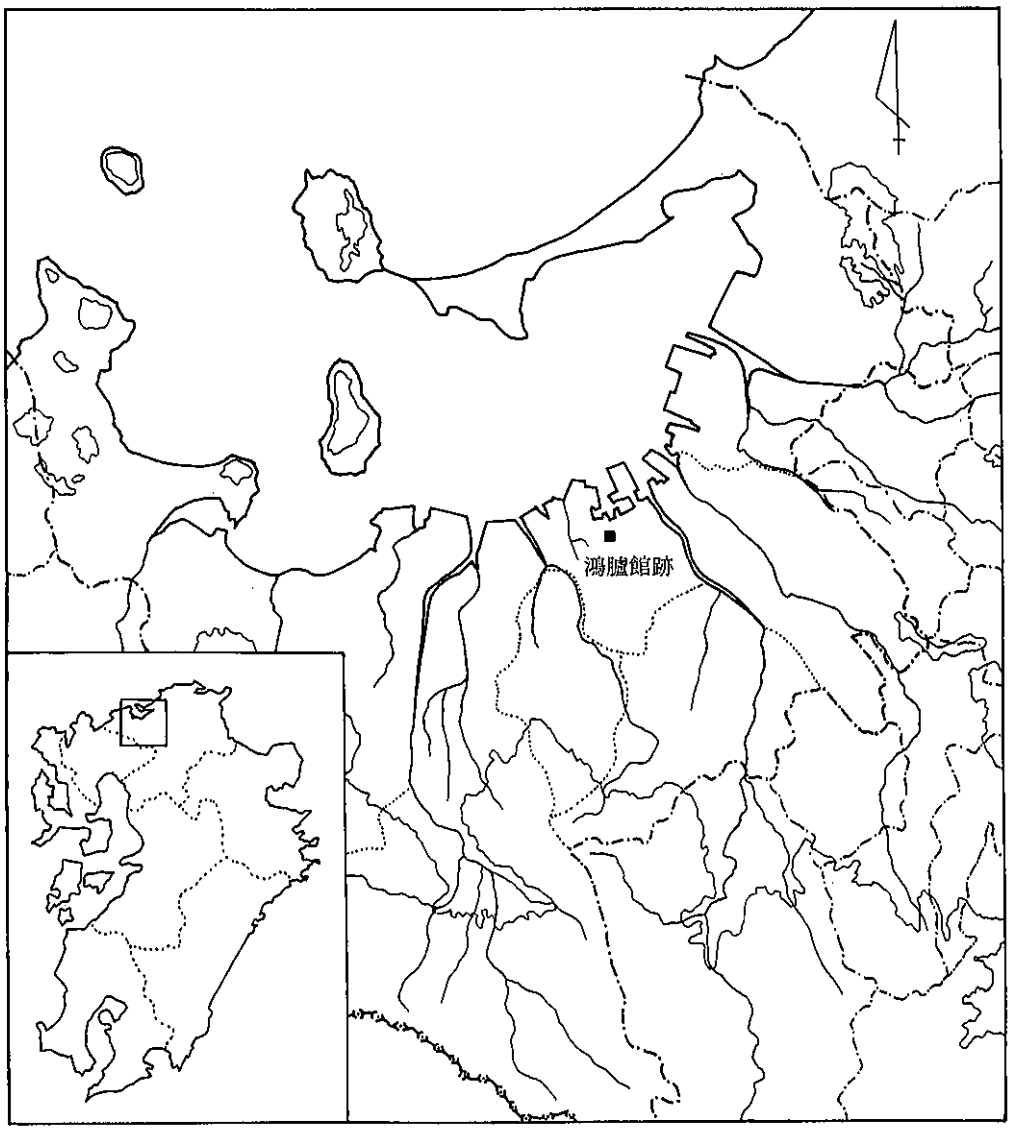
2001

福岡市教育委員会

鴻臚館跡11

平成１１年度発掘調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第６９５集



９９１０＜ＦＵＥ-４３＞

２００１

福岡市教育委員会



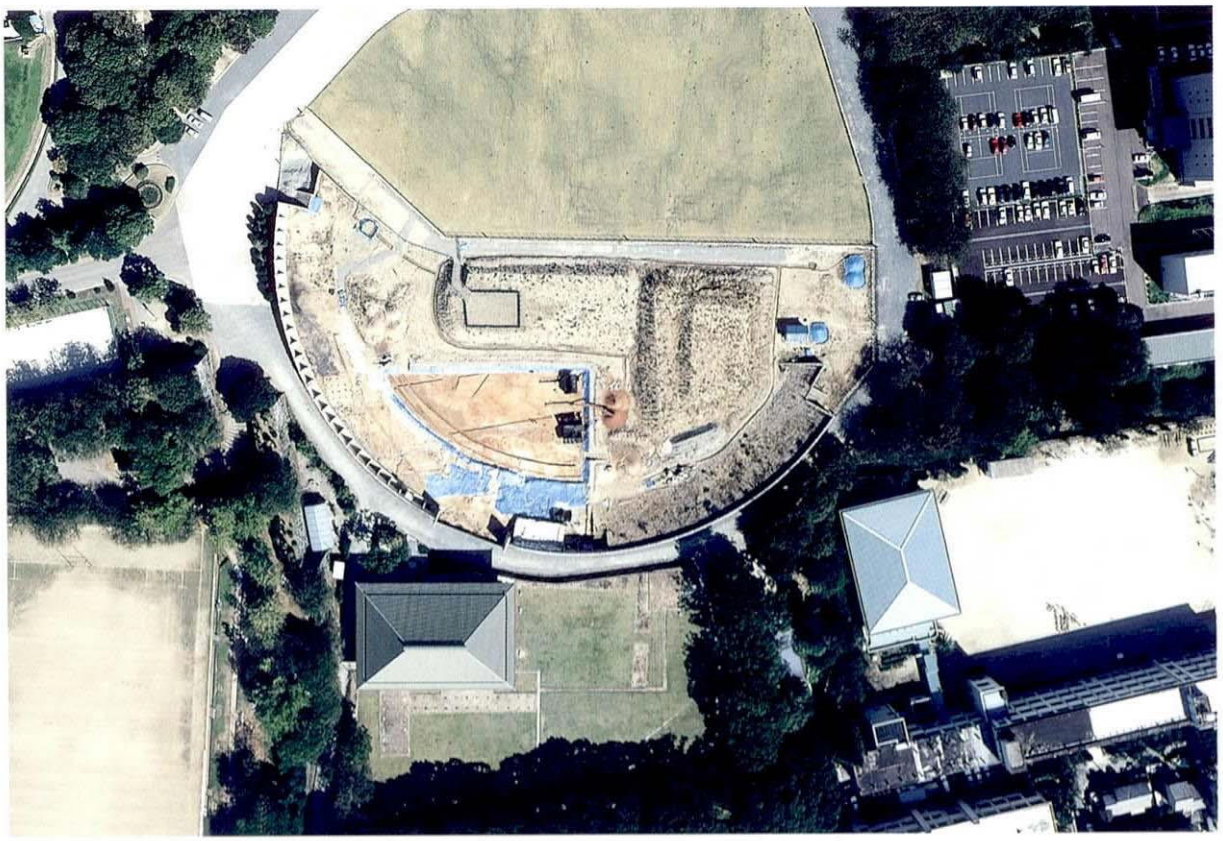
1．史跡福岡城跡と平和台野球場跡地の現況（南東から）



２．平成11年度調査区上部検出遺構



３．平成11年度調査区下部検出遺構



４．鴻臚館展示館側遺構と平成11年度調査区



５．平成12年度調査区、第Ⅱ期北側建物区画（北から）

序

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末、福岡市中央区の国史跡福岡城跡内にある平和台野球場外野席スタンド改修工事の際の発見を契機として、翌63年から本格的に開始いたしました。

本市では、鴻臚館跡の全容解明を目的として、昭和63年度に鴻臚館跡調査研究指導委員会を設置し、そのご指導の下で、発掘調査と関連資料の収集等を継続して推進しております。

これまでの調査で鴻臚館の遺構が広がると予想されておりました平和台野球場は、平成10年度に解体撤去工事が行われ、平成11年度からいよいよ平和台野球場跡地の本格的な発掘調査に着手いたしました。

平成11年度の調査では、これまで見つかっていた鴻臚館建物の北側にも、さらに別区画の建物が存在していたことを示す谷を埋め立てた堀状の遺構や、多量の瓦や陶磁器を検出するなどの新しい発見があり、今後の調査が大いに期待されるところであります。

本書は、平成11年度に実施した、平和台野球場跡地の初年次の発掘調査成果を内容とする報告書です。本報告書が、鴻臚館跡をはじめ本市の埋蔵文化財に対するご理解とご認識の一助となれば幸いであります。

発掘調査から本報告書の刊行にいたるまで、ご理解とご協力をいただいた大蔵省福岡財務支局、福岡市都市整備局、また、温かくご指導いただいた鴻臚館跡調査研究指導委員会の各先生方、文化庁、福岡県教育庁の皆様方には深甚なる謝意を表します。

平成13年３月31日

福岡市教育委員会
教育長 生田征生

例言

1．本書は、平成11年度に実施した鴻臚館跡発掘調査報告書である。

平成11年度調査区は、平成12年度も継続して調査を実施しており、本書で取り上げられなかった下層の遺構・遺物、瓦類については、平成12年度調査の報告書に掲載する予定である。

2．本書で用いた地図は、Fig.１が国土地理院発行五万分の一地形図「福岡」、Fig.２が福岡市都市計画図No.60.61.71.72である。

3．本書で用いた方位は、平面直角座標系第Ⅱ座標系に拠っており、真北方位より０°19′西偏する。

4．調査区はこの座標の基づき、10mのグリッドに区画した。便宜上、Ｘ軸64,790を始点に北側10m毎にａ，ｂ，ｃ…、Ｙ軸は西側10m毎に-56,790台を790、-56,800台を800と呼称した。

5．遺構番号は４桁とし、平成11年度調査区をしめす10の後に通し番号をつけ、遺構性格を示すアルファベットを前に付した。

例　塀・柵列：ＳＡ１０〇〇　　建物：ＳＢ　　溝状遺構・堀：ＳＤ　　道・通路：ＳＦ

池：ＳＧ　　土壙：ＳＫ　　埋立遺構：ＳＭ　　性格不明の遺構・その他：ＳＸ

6．本書の執筆は、第１章を塩屋勝利、第２章を池崎譲二が担当した。編集は塩屋の協力を得て池崎が行った。

7．編集に当たっては、整理調査員　宮園登美枝、整理作業員　寺村チカ子、堀一恵、金石邦子、冨永静子の補助を受けた。

8．遺物実測は、黄建秋（九州大学、現南京大学）、ゴチョウ・メネス（九州大学）、中村渉（専修大学）、宮園、池崎がおこなった。

トレースは宮園、尹善暎（漢陽大学）、メネス、池崎がおこなった。

9．平成11年度の調査は以下の方々の参加で実施されました。記して感謝の意を表します。

［発掘作業］

家村冨基郎、礒村博男、伊藤美知子、牛尾成正、梅崎　元、大橋善平、嘉藤栄志、清原ユリ子
齋藤善弘、坂本ハツ子、佐藤テル子、芝　三郎、島津明男、進藤広倫、杉村文子、高田甚一郎
谷　吉美、堤　篤史、土斐崎初栄、永井鈴子、中尾　亨、仲野正徳、二宮幸司、能美須賀子
原　幸子、脇坂レイコ
中村渉（専修大学）、久保朋子（九州大学）、中原三栄子（福岡大学）、中西真央（福岡大学）

［整理作業］

整理調査員　宮園登美枝、黄建秋（九州大学、現南京大学）
整理作業員　金石邦子、寺村チカ子、冨永静子、堀一恵、山口玲子

鴻臚館跡11—平成11年度発掘調査報告書— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第695集 正誤表

頁	行	誤	正
14	38	SK1024同様	SK1029同様
17	12	(Fig.35-5のⅠ～Ⅲ層)	(Fig.34-5のⅠ～Ⅲ層)
17	32	e区＝南側斜面できる。	e区＝南側斜面に区分できる。
21	3	15～26鴻臚館関連遺物…	15～26は鴻臚館関連遺物…
27	21	SK1015(Fig.25、Pl.10-1)	SK1016(Fig.25、Pl.10-2)
28	4	SK1016(Fig.25、Pl.10-2)	SK1015(Fig.25、Pl.10-1)
35	21	八脚門持つ…	八脚門を持つ…
35	30	底面にさら深さ15cm…	底面にさらに深さ15cm…
43	13	大宰府鴻臚館は11世紀後半までは…	大宰府鴻臚館の廃絶は11世紀後半までは…

本文目次

第１章　序　説 …… 1
１、調査計画 …… 1

２、既往の調査 …… 3

３、平成１１年度の調査事業概要 …… 6
（１）発掘調査の組織 …… 6
（２）調査事業の概要 …… 6

第２章　平成１１年度発掘調査報告 …… 7

１、発掘調査の経過 …… 7

２、時期別検出遺構と出土遺物 …… 9
（１）戦後構築物 …… 9
（２）旧陸軍２４連隊関係遺構 …… 9
（３）福岡城関係遺構 …… 14
（４）鴻臚館廃絶後から福岡城築城間の遺構 …… 17
（５）鴻臚館・筑紫館関係遺構 …… 27
土壙・柱穴・瓦溜まり …… 27
堀立柱建物・塀遺構 …… 35
谷・埋立事業・堀・池 …… 37

３、平成１１年度調査のまとめ …… 42

挿図目次

Fig.1　鴻臚館跡の位置と周辺遺跡分布図（1／50,000）……2
Fig.2　福岡城内既往発掘調査区位置図（1／5,000）……4
Fig.3　調査着手前の状況（北から）……7
Fig.4　スタンド盛り土移動状況（北から）……7
Fig.5　盛り土除去後の状況（北から）……7
Fig.6　外野スタンド盛り土等出土遺物……10
Fig.7　近・現代遺構全体平面図（1／250）……折り込み
Fig.8　旧陸軍24連隊関係遺構出土遺物……12
Fig.9　SK1043出土遺物……13
Fig.10　SK1043瓦溜まり平面図……13
Fig.11　SM1047出土遺物……14
Fig.12　SK1029出土遺物……15
Fig.13　SK1038出土遺物……16
Fig.14　SG1046平面図とSM1047土層図……18
Fig.15　下層遺構全体平面図（1／250）……折り込み
Fig.16　SG1046、f790出土遺物……19
Fig.17　SG1046、f800出土遺物……20
Fig.18　SG1046、f810出土遺物……21
Fig.19　SG1046、e790出土遺物……22
Fig.20　SG1046、e800出土遺物（1）……23
Fig.21　SG1046、e800出土遺物（2）……24
Fig.22　SG1046、e810出土遺物……24
Fig.23　SX1037出土遺物……26
Fig.24　岩盤部分遺構分布平面図（1／250）……27
Fig.25　SK1015、1016、1034実測図とSK1015出土遺物……28
Fig.26　SK1041実測図……29
Fig.27　SK1041出土遺物（1）……30
Fig.28　SK1041出土遺物（2）……31
Fig.29　SK1042出土遺物……31
Fig.30　SK1069出土遺物……31
Fig.31　SK1042実測図……32
Fig.32　SK1058、1069実測図……33
Fig.33　SK1071、1075、1076、1079実測図……34
Fig.34　1．平成11、12年度調査区南北断面図（1／200）……折り込み
　　2．SD1045・陸橋状埋立東西断面図（1／80）
　　3．X＝64,840付近土層断面図（1／80）
　　4．X＝64,830付近土層断面図（1／80）

５．ＳＤ１０４５南北土層東壁断面図（１／80）
６．ＳＤ１０４５東西土層南壁断面図（１／80）
７．ＳＤ１０４５南北土層西壁断面図（１／80）
Fig.35　ＳＡ１０５９、ＳＢ１０７０実測図（１／125）……３６
Fig.36　ＳＸ１０７８実測図……３８
Fig.37　ＳＤ１０４５出土遺物（１）……３９
Fig.38　ＳＤ１０４５出土遺物（２）……４０
Fig.39　ＳＦ１０５５出土遺物……４１
Fig.40　既往調査区遺構と平成11、12年度調査区遺構との位置関係図……４４

写真図版目次

巻頭図版１　史跡福岡城跡と平和台野球場跡地の現況（南東から）
２　平成11年度調査区上部検出遺構
３　平成11年度調査区下部検出遺構
４　鴻臚館展示館側遺構と平成11年度調査区
５　平成12年度調査区、第Ⅱ期建物区画（北から）
Pl.１　１．平和台野球場解体後の状況　２．平成11年度調査区遠景　３．戦災焦土検出状況
４．盛り土利用の見学台　５．野球場建設によるグランド削平状況　６．グランド盛り土除去後の状況
Pl.２　１．グランド内地層変換線確認状況　２．ライトスタンド側上部遺構検出状況
３．グランド内土層変換線
Pl.３　１．ＳＢ１０１８全景　２．戦災焦土、薬莢・有刺鉄線出土状況　３．ＳＢ１０１８基礎断面　４．ＳＢ１０１７全景　５．ＳＢ１０１７全景　６．ＳＢ１０１７基礎断面
Pl.４　１．ＳＢ１０２８全景　２．ＳＢ１０２８全景　３．ＳＢ１０２８北側庇部分整地
４．ＳＢ１０２８と瓦溜まり
Pl.５　１．岩盤部分遺構検出状況　２．ＳＸ１０３７全景　３．ＳＫ１０５２全景
４．ＳＫ１０４３全景　５．ＳＫ１０４３全景　６．ＳＫ１０４３遺物出土状況
Pl.６　１．ＳＧ１０４６全景　２．ＳＧ１０４６全景
Pl.７　１．ＳＧ１０４６全景　２．ＳＧ１０４６とＳＭ１０４７（福岡城埋立）
Pl.８　ＳＧ１０４６瓦出土状況　１．ｆ７９０区　２．ｆ８００区　３．ｆ８１０区
４．ｆ８２０区　５．ｆ８２０区鬼瓦出土状況
Pl.９　ＳＧ１０４６瓦出土状況　１．ｅ７９０区　２．ｅ７９０区調査風景
３．ｆ８１０区明代青磁出土状況
Pl.10　１．ＳＫ１０１５全景　２．ＳＫ１０１６全景　３．ＳＫ１０４１遺物出土状況
４．ＳＫ１０４１全景　５．ＳＫ１０３４全景
Pl.11　１．ＳＫ１０４２全景　２．ＳＫ１０６９全景　３．ＳＫ１０７１全景
４．ＳＫ１０７５全景　５．ＳＫ１０７６全景　６．ＳＫ１０７９全景
Pl.12　１．ＳＡ１０５９布掘り検出状況　２．ＳＡ１０５９柱抜き穴検出状況
３．ＳＡ１０５９柱抜き穴検出状況　４．ＳＢ１０７０全景

Pl.13　ＳＡ１０５９柱抜き穴断面　１．柱抜き穴０　２．柱抜き穴５　３．柱抜き穴８
　　４．柱抜き穴６　５．柱抜き穴11　６．柱抜き穴12
Pl.14　１．下部遺構全景　２．ＳＭ１０４４、陸橋状築堤　３．ＳＤ１０４５堀西端部
Pl.15　１．ＳＤ１０４５南北土層断面　２．ＳＤ１０４５東西土層断面
　　３．ＳＭ１０４４南北土層断面　Y=-56,828ライン
Pl.16　１．ＳＤ１０４５、４層上部焼土層白磁出土状況
　　２．ＳＤ１０４５、４層上部焼土層白磁出土状況近景
　　３．ＳＤ１０４５、４層上部焼土層「綱」銘墨書白磁出土状況
Pl.17　１．ＳＤ１０４５とＳＸ１０７８の位置関係　２．ＳＸ１０７８全景
　　３．ＳＸ１０７８全景
Pl.18　出土遺物（１）
Pl.19　出土遺物（２）
Pl.20　出土遺物（３）

表目次

Tab.１　鴻臚館跡調査中期計画表……１
Tab.２　福岡城跡・鴻臚館関係調査一覧……３
Tab.３　福岡城跡・鴻臚館関係調査報告書・文献一覧……５
Tab.４　平成１１年度調査検出遺構一覧……８

第1章　序　説

1、調査計画

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末の平和台野球場外野席における関連遺構と遺物の発見を契機とする。昭和63年度には鴻臚館跡調査研究指導委員会が組織され、全容解明のための本格的な発掘調査が開始された。発掘調査は下表の「鴻臚館跡調査中期計画」の下で実施している。

中期計画は、鴻臚館跡推定地が国史跡福岡城跡内に立地しているために、文化庁をはじめとする関係各機関と協議の上、「舞鶴城址将来構想」の下で進められている城内各施設の移転事業計画を参考にしながら策定し、平成５年度第２回指導委員会で了承を受けた。Tab.１にその概要を示した。

第Ⅰ期調査は平和台野球場外周南側部分を対象に、昭和63年度～平成４年度にかけて調査を実施。この地区では、奈良時代から平安時代までの建物遺構群と中国産陶磁器をはじめとする大量の遺物が出土し、鴻臚館跡の可能性が高いことが確認された。またこの地区は、５年度から７年度にかけて、平和台野球場撤去後の本格的整備までの当面の仮整備という位置づけで第Ⅰ期整備を実施した。

第Ⅱ期調査は、５年度と６年度に福岡城三の丸西郭にある「舞鶴公園西広場」を調査対象地として、福岡城跡西辺部における鴻臚館関連遺構と遺物の有無確認、および旧地形復元を目的に調査を実施した。その結果、福岡城西北域における築城当時の地業の状況と当時の海岸線の復元が可能となった。

第Ⅲ期調査は、第Ⅱ期調査区南側の福岡城土塁部分を対象に平成７～９年度に実施し、平成10年度には平和台野球場解体工事に伴う立会調査と解体後の試掘調査を実施した。

平和台野球場跡地部分の本格的発掘調査は、面積が広大なため南半部と北半部に分けて実施することにし、南半部を第Ⅳ期調査として平成11年度～14年度、北半部を第Ⅴ期調査として平成15～19年度までの９ヶ年を見込んでいる。またこの間の調査結果を勘案しつつ、整備に向けての基本構想等の検討を行う計画である。

第Ⅵ期調査は、鴻臚館跡の全容解明にとって必要と思われる地点について調査を行うもので、第Ⅳ期調査以降の成果およびその進捗状況をみながら、調査地点等は検討して行く予定である。

Tab. 1　**鴻臚館跡調査中期計画表**（平成11年12月２日現在）　※網かけ部分は本報告の対象とする事業年度

		対象地区	昭62～平4	平5～6年	7年	8年	9年	10年	11～14年	15～19年	20～25年	備　考
発掘調査	緊急調査	平和台野球場外野席	―									鴻臚館の発見
	第Ⅰ期調査	旧テニスコート	――									指導委員会の設置 本格的調査の開始 第Ⅰ期整備対象他
	第Ⅱ期調査	西広場		――								範囲確認調査 旧地形の復元
	第Ⅲ期調査	野球場外周南側土塁他野球場跡地			――							範囲確認調査 野球場解体立会調査 野球場跡地試掘調査
	第Ⅳ期調査	野球場南区							――			平成11年から調査着手（４カ年計画）
	第Ⅴ期調査	野球場北区								――		平成15年から調査着手（５カ年計画）予定
	第Ⅵ期調査	舞鶴球技場等重要地点									――	
整備	第Ⅰ期整備	旧テニスコート		――								平成７年８月10日完成
	第Ⅱ期整備	野球場跡地								――	――	第Ⅳ期調査の結果を検討のうえ計画

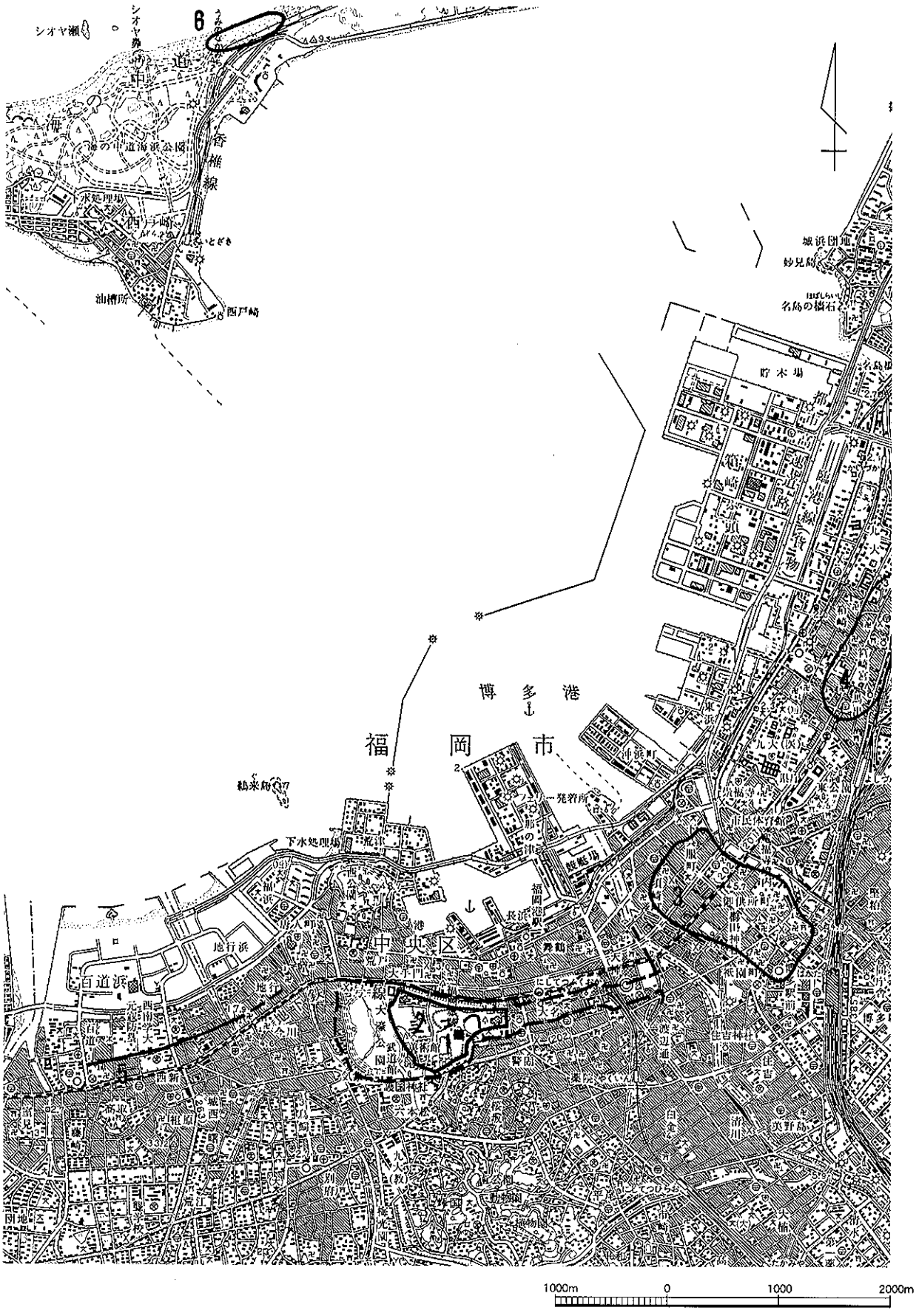


Fig. 1　鴻臚館跡と周辺遺跡分布図（1/50000）

1．鴻臚館跡
2．福岡城跡（国指定史跡）
3．博多遺跡群
4．箱崎遺跡群
5．元寇防塁跡（国指定史跡）
6．海の中道遺跡

2、既往の調査

福岡城跡の調査は、史跡指定範囲の内外において、平成10年度末までに42地点について調査が実施されている。そのうち鴻臚館跡発掘調査事業として実施されたのは17次19地点である。Tab.2にその内訳を示した。文献番号は次頁の参考文献一覧に対応する。なお、本年度の調査は福岡城跡関係第43次調査にあたり、鴻臚館跡関連調査では17次調査となる。

Tab.2 福岡城跡・鴻臚館関係調査一覧 （平成１１年度現在）

調査番号	次数	地　区	史跡内外区分	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者	文　献	備　考
——	A	三の丸中央部	史跡内	ﾃﾆｽｺｰﾄ建設		510800～３日間	九州文化総合研究所		鴻臚館１次
——	B		史跡内	国病院建設		590626～590702	文部省.文化財保護委員会		
6301	1	三の丸東郭	史跡内	裁判所建設	596	631007～631105 640327～640331	福岡県教育委員会		鴻臚館２次
7605	2	内堀内壁	史跡外	地下鉄建設	14.900	761201～771008	折尾学.池崎譲二 浜石哲也.山崎龍雄	4	
7728	3	薬院新川	史跡外	地下鉄建設	500	780301～780630	折尾学.池崎譲二	4	
7948	4	御鷹屋敷跡	史跡内	史跡整備	2.200	790719～790811	飛高憲雄.力武卓治	3・8	
8134	5	赤坂門北側内堀	史跡外	ビル建設	70	820317～820326	田中壽夫	4	
8343	6	祈念櫓跡	史跡内	史跡整備	36	840201～840612	井沢洋一		
8449	7	肥前堀東端部	史跡外	県公園建設	580	840601～840612	福岡県教育委員会		
8533	8	肥前堀東部	史跡外	市庁舎建設	150	850700～850800	折尾学.山崎純男	9	
8747	9	三の丸中央部	史跡内	野球場改修	650	871225～880120	山崎純男・吉武学	11・14	鴻臚館３次
8829	10	三の丸中央部	史跡内	確認調査	856	880727～881210	山崎純男.吉武学	11・22	鴻臚館４次
8865	11	西～南縁土塁	史跡内	公園整備	500	880727～881210	山崎純男.吉武学	10	
8840	12	肥前堀東部	史跡外	ビル建設	650	881107～881126	柳沢一男	12	
8910	13	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1.200	890420～891207	山崎純男.吉武学	11・22	鴻臚館５次
8950	14	肥前堀東部	史跡外	市庁舎建設	700	891011～891021	菅波正人	13	
9005	15	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1.300	900409～910131	山崎純男.吉武学	11・22	鴻臚館６次
9065	16	月見櫓跡	史跡内	確認調査	190	910301～910331	山崎純男.吉武学	15	
9130	17	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1.000	910501～920331	山崎純男.瀧本正志	16・22	鴻臚館７次
9146	18	時櫓跡	史跡内	確認調査	250	920301～920331	瀧本正志		
9218	19	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1.670	920615～921030	山崎純男.瀧本正志	17	鴻臚館８次
9236	20	三の丸中央部	史跡内	確認調査	430	920910～930331	山崎純男.瀧本正志	17・22	鴻臚館９次
9262	21	花見櫓跡	史跡内	確認調査	200	930301～930331	瀧本正志		
9326	22	三の丸西部郭	史跡内	確認調査	450	930816～940228	田中壽夫.瀧本正志	19	鴻臚館10次
9345	23	追廻門南側堀	史跡外	公園整備	220.3	931213～940228	井沢洋一	18	
9353	24	本丸西縁部	史跡内	公園整備	80	931211～931221	田中壽夫.瀧本正志		
9363	25	潮見櫓跡石垣	史跡内	史跡整備	65	940301～940328	田中壽夫.瀧本正志		
9412	26	赤坂門石垣	史跡外	変電所建設	430	940525～940806	吉武学		
9420	27	三の丸中央部	史跡内	史跡整備	50	940606～940731	田中壽夫.瀧本正志	21	鴻臚館11次
9432	28	三の丸西部郭	史跡内	確認調査	850	940801～950320	田中壽夫.瀧本正志	21	鴻臚館11次
9451	29	三の丸東部郭	史跡内	施設建替	1024	941101～950130	力武卓治	25	
9463	30	三の丸南側土塁	史跡内	確認調査	60	950201～950217	田中壽夫.瀧本正志	21	鴻臚館11次
9537	31	三の丸中央部	史跡内	確認調査	300	951101～960329	田中壽夫	24	鴻臚館12次
9546	32	中堀	史跡外	共同住宅建設	154	951211～960329	瀧本正志	23	
9561	33	三の丸西北郭土塁	史跡内	公園整備	500	960301～960329	力武卓治		
9617	34	三の丸西南郭土塁	史跡内	駐車場整備	32	960621～960702	田中壽夫		
9620	35	三ノ丸中央郭	史跡内	確認調査	450	960704～961204	田中壽夫	24	鴻臚館13次
9630	36	肥前堀	史跡外	共同住宅建設	46	960823～960823	池田佑次		
9639	37	赤坂門外壁	史跡外	事務所建設	10	960912～960912	池田佑次		
9671	38	潮見櫓跡基壇	史跡内	史跡整備	300	970220～970318	田中壽夫		
9736	39	三ノ丸中央郭	史跡内	確認調査	204	970818～980131	田中壽夫	26	鴻臚館14次
9751	40	追廻門南側内堀内壁	史跡内	確認調査	135	971027～971107	田中壽夫		
9807	41	平和台球場解体	史跡内	公園整備	230	980410～980416	田中壽夫.池崎譲二	27	鴻臚館15次
9831	42	平和台球場跡地	史跡内	試掘調査	930	980922～990120	塩屋勝利.池崎譲二	27	鴻臚館16次
9910	43	平和台球場跡地	史跡内	確認調査	3,500	990422～000315	塩屋勝利.池崎譲二	28	鴻臚館17次

凡例　・太字箇所は本報告掲載分
・確認調査：福岡城跡・鴻臚館跡の調査
・史跡整備：教育委員会所管事業に伴う調査
・公園整備：都市整備局所管事業に伴う調査
・工事名のある調査：開発に伴う緊急調査

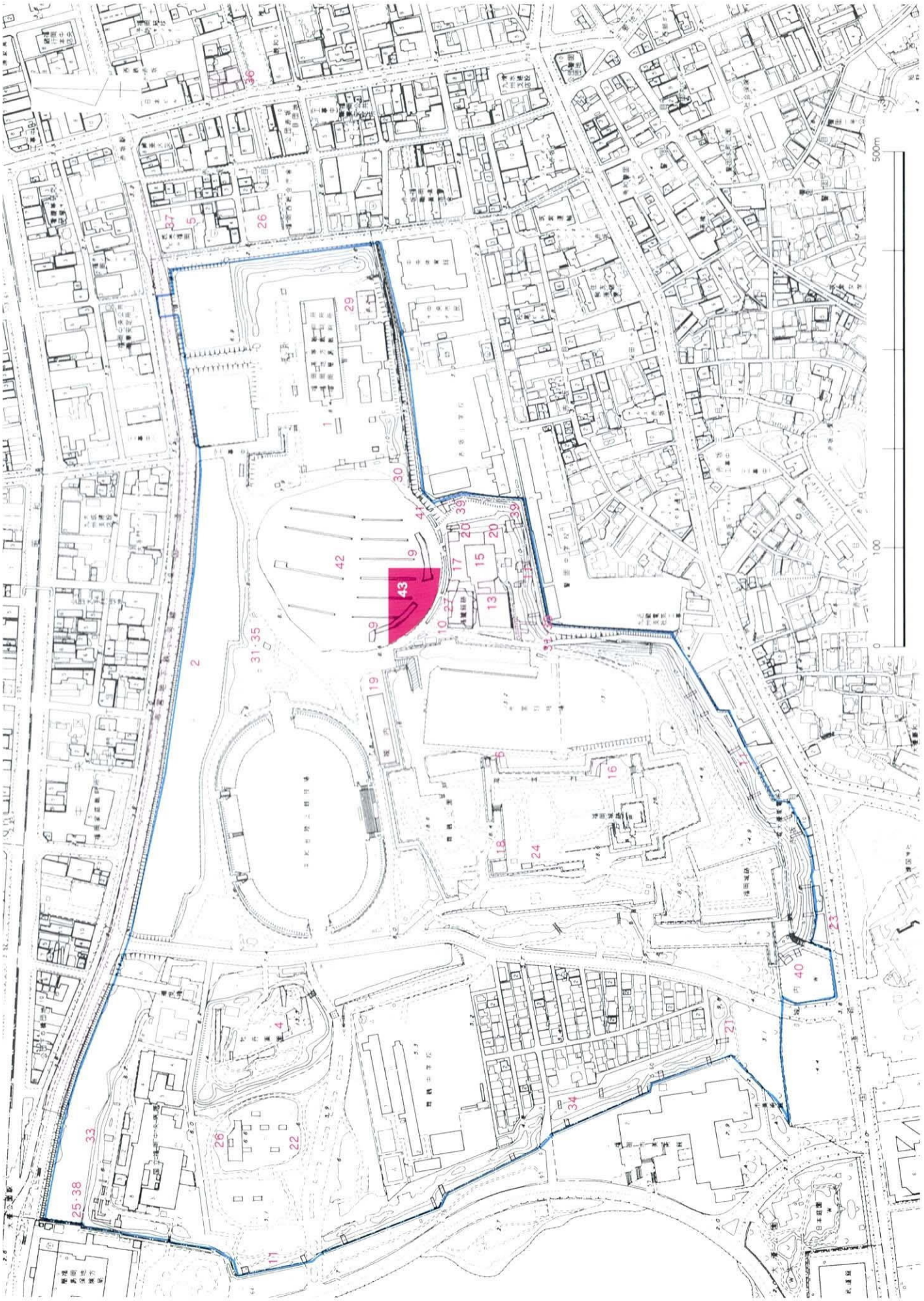


Fig. 2　福岡城内発掘調査区位置図（1/5000）（番号は福岡城跡内調査次数）

Tab. 3　福岡城跡・鴻臚館跡関係調査報告書・文献一覧

1	高野孤鹿	『平和台の考古史料』		1972
2	福岡県教育委員会	「史跡福岡城発掘調査概報」	福岡県文化財調査報告書第 34集	1964
3	福岡市教育委員会	「筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷」	福岡市埋文調報第 59集	1980
4	福岡市教育委員会	「福岡城址－内堀外壁石積の調査－」	福岡市埋文調報第101集	1983
5	池崎譲二・森本朝子	『福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション』	福岡市埋文調報第101集所収	1983
6	弓場知紀	『出光美術館の高野コレクション』	福岡市埋文調報第101集所収	1983
7	九州大学考古学研究室	『九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物』	福岡市埋文調報第101集所収	1983
8	福岡市教育委員会	「筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷図録編」	福岡市埋文調報第 59集	1990
9	福岡市教育委員会	「福岡城肥前堀」	福岡市埋文調報第131集	1986
10	福岡市教育委員会	「福岡城跡・Ⅳ－内堀内壁の調査－」	福岡市埋文調報第237集	1991
11	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅰ　発掘調査概報」	福岡市埋文調報第270集	1991
12	福岡市教育委員会	「福岡城肥前堀第３次調査報告」	福岡市埋文調報第293集	1992
13	福岡市教育委員会	「福岡城肥前堀第４次調査報告」	福岡市埋文調報第294集	1992
14	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅱ」	福岡市埋文調報第315集	1992
15	福岡市教育委員会	「福岡城　月見櫓」	福岡市埋文調報第316集	1992
16	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅲ」	福岡市埋文調報第355集	1993
17	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡４　平成４年度発掘調査概要報告」	福岡市埋文調報第372集	1994
18	福岡市教育委員会	「福岡城跡第23次調査報告」	福岡市埋文調報第415集	1995
19	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡５　平成５年度発掘調査概報」	福岡市埋文調報第416集	1995
20	福岡市教育委員会	「福岡城赤坂門跡－福岡城跡26次調査報告－」	福岡市埋文調報第463集	1996
21	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡６　平成６年度発掘調査概要報告」	福岡市埋文調報第486集	1996
22	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡７ －鴻臚館跡第Ⅰ期整備報告－」	福岡市埋文調報第487集	1996
23	福岡市教育委員会	「福岡城跡－福岡城中堀跡の調査－」	福岡市埋文調報第498集	1997
24	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡８ －平成７・８年度発掘調査概要報告－」	福岡市埋文調報第545集	1997
25	福岡市教育委員会	「史跡福岡城跡－東の丸の調査－」	福岡市埋文調報第546集	1997
26	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡９　平成９年度発掘調査概要報告」	福岡市埋文調報第586集	1998
27	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡10　平成10年度発掘調査概要報告」	福岡市埋文調報第620集	1999
28	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡11　平成11年度発掘調査報告」	福岡市埋文調報第695集	2001

（福岡市埋文調報は、福岡市埋蔵文化財調査報告書の略）

3、平成１１年度の調査事業概要

（1）発掘調査の組織

1）調査および整備指導

鴻臚館跡調査研究指導委員会（第６期2年次）

委員長	九州大学名誉教授	横山浩一	考古学
副委員長	学習院大学教授	笹山晴生	国史学
委員	財団法人大阪府文化財調査研究センター理事長	坪井清足	考古学
	奈良国立文化財研究所長	町田　章	考古学
	福岡大学教授	小田富士雄	考古学
	九州大学教授	西谷　正	考古学
	九州大学名誉教授	川添昭二	国史学
	京都学園大学教授	八木　充	国史学
	京都橘女子大学教授	狩野　久	国史学
	東京大学教授	佐藤　信	国史学
	前奈良国立文化財研究所長	鈴木嘉吉	建築史学
	九州芸術工科大学名誉教授	澤村　仁	建築史学
	九州芸術工科大学教授	杉本正美	造園学
	工学院大学教授	渡辺定夫	都市工学
	京都造形芸術大学教授	中村　一	造園学

2）発掘調査・整備事業主体

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	西憲一郎
調査総括		文化財部長	柳田純孝
庶務担当		文化財整備課長	上村忠明
		管理係長	井上和光
		管理係	河野淳美
調査担当		文化財部課長（鴻臚館跡調査担当）	塩屋勝利
		文化財部主査（鴻臚館跡調査担当）	池崎譲二

（2）調査事業の概要

1）鴻臚館跡調査研究指導委員会　平成11年12月１日と２日に開催し、平成11年度平和台野球場跡地初年次の発掘調査中間報告と今後の発掘調査の進め方、及び12年度以降の長期調査計画の検討を行った。

2）発掘調査　平和台野球場跡地の本格的発掘調査の初年次であり、これまでの調査で確認していた筑紫館・鴻臚館建物の北側の広がりを探る目的で、旧野球場右中間スタンド及びグランド部分約3,500㎡を対象に実施した。調査の結果、既往の筑紫館・鴻臚館建物の北側に東西方向の谷が見つかり、古代瓦の出土状況などから谷北側にも筑紫館・鴻臚館時代の建物の存在が想定され、またその谷は筑紫館・鴻臚館時代に造成されて堀状をなし、南北を繋ぐ陸橋状の埋め立てが検出された。詳細については第２章で報告する。

3）公開事業　平和台野球場跡地の本格調査の初年次であり、調査に対する市民の期待と関心が非常に高いことから、調査区に隣接して見学台を設置し、発掘調査の状況を公開した。また、現地説明会を平成11年８月23日と12月11日の２回開催し、延べ740人の見学者が訪れた。さらに、発掘調査の状況や成果を鴻臚館跡展示館で公開するためにビデオ映像製作を行い、鴻臚館跡展示館に新たに速報コーナーを設け、新発見の遺物や解説パネルを展示した。

第２章　平成11年度発掘調査報告

１．発掘調査の経過

平和台野球場跡地の南半部分を鴻臚館跡第Ⅳ期調査対象とし、平成11年度の調査はその初年度にあたる。南側建物群の北側への拡がりを確認するに適当な位置として南西側１/４（球場バックスクリーンから右中間）約3500㎡を対象とした。

４月22日から準備作業に入り、５月６日から盛り土の除去作業を開始した。特に外野スタンドの盛り土は、平和台野球場建設時にグランド側を削って盛り上げたもので鴻臚館関係遺物が多数含まれているため、野球場解体時に埋められたグランド埋め土と区別するため先行して機械による移動を行った（Fig.３～５）。次いでグランド部分の盛り土除去を行った。スタンド部分の遺構の遺存状態については既に昭和62年度の調査の段階で様相は把握され、比較的良好な状況と考えられていた。野球場建設による破壊は、新旧スコアボード基礎など部分的ではあったが、バックスクリーン基礎や連隊関係建物基礎も広くみられる。しかし、懸念されていたスタンド擁壁基礎はベタ基礎で遺構面に達していない。しかし、レベル的には、南側展示館内遺構検出面より60cm程低く、ある程度の削平は連隊以前に受けているものと思われる。グランド側は更に約１ｍ程の削平を受けている。

盛り土除去後以下を手掘りで精査した。平成12年３月15日まで調査は実施したが、グランド部分で東西に走る谷が検出され、大量の鴻臚館関係瓦を廃棄する中世の池が見つかり、さらに連隊建物基礎も良好に遺存していたため、当初予想より手間取り、平成11年度調査区の一部は、平成12年度も継続調査した。



Fig.３　調査着手前の状況（北から）

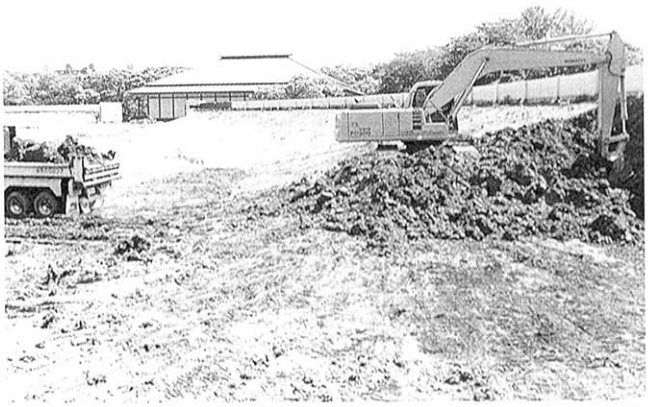


Fig.４　スタンド盛土移動状況（北から）

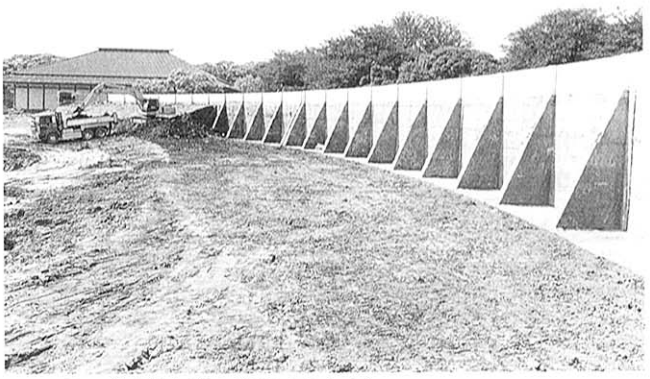


Fig.５　盛土除去後の状況（北から）

Tab.４　平成11年度調査検出遺構一覧

遺構番号	種　　類	時　　期	遺構番号	種　　類	時　　期
SD1001	排水溝	昭和20～23年	SG1046	池状遺構	中　世
SX1002	バックスクリーン基礎	昭和24～25年	SM1047	埋立造成	江戸初頭
SX1003	〃	〃	SX1048	スコアボード撹乱	戦　後
SX1004	〃	〃	SD1049	自然地形谷	奈良以前
SX1005	〃	〃	SX1050	バックスクリーン基礎	戦　後
SX1006	〃	〃	SX1051	〃	〃
SX1007	〃	〃	SX1052	瓦溜まり	近　代
SX1008	〃	〃	SK1053	土　壙	江　戸
SX1009	土管継手掘方	〃	SG1054	池状遺構	奈　良
SX1010	排水工管掘方	〃	SF1055	犬走り状通路	奈良・平安
SX1011	ラッキーゾーンフェンス基礎	〃	SD1056	側　溝	〃
SX1012	ケーブル工管掘方	〃	SD1057	溝	中　世
SX1013	土管排水掘方	〃	SK1058	瓦溜まり	古代か
SK1014	柱　穴？	？	SA1059	布掘り掘立柱列	奈　良
SK1015	土　壙	奈良～平安	SF1060	通　路	奈良・平安
SK1016	土壙（布掘？）	〃	SX1061	電柱アンカー	近　代
SB1017	連隊建物	近　代	SX1062	電柱掘方	〃
SB1018	〃	〃	SK1063	土　壙	不　明
SD1019	雨落ち溝	〃	SK1064	土　壙	近　代
SD1020	建物基礎	〃	SK1065	焼土溜まり	近　代
SD1021	〃	〃	SK1066	土　壙	不　明
SD1022	〃	〃	SX1067	連隊溜め桝	近　代
SD1023	〃	〃	SK1068	バックスクリーン基礎	近　代
SD1024	暗渠排水	〃	SK1069	柱　穴	奈良・平安
SD1025	雨落ち溝	〃	SB1070	掘立柱建物	奈　良
SD1026	建物基礎	〃	SK1071	柱　穴	奈良・平安
SD1027	〃	〃	SK1072	柱　穴？	〃
SB1028	連隊建物	〃	SK1073	球場基礎	戦　後
SK1029	土　壙	江　戸	SK1074	柱　穴？	不　明
SD1030	建物基礎	近　代	SK1075	土　壙	平　安
SK1031	土　壙	平　安	SK1076	土　壙	平　安
SX1032	バックスクリーン撹乱	戦　後	SK1077	瓦溜まり	不　明
SX1033	バックスクリーン基礎	〃	SX1078	瓦敷き遺構	平　安
SK1034	柱　穴	奈良・平安？	SX1079	瓦溜まり	平　安
SK1035	土　壙	戦　後	SK1080	土　壙	奈　良
SK1036	〃	〃	SD1081	溝	中　世
SX1037	瓦溜まり	中　世	1082		
SK1038	土　壙	江　戸	1083		
SK1039	瓦溜まり	古　代	1084		
SK1040	土　壙	戦　後	1085		
SK1041	土　壙	平　安	1086		
SK1042	土　壙	古　代	1087		
SK1043	瓦溜まり	近　代	1088		
SM1044	埋立造成	奈　良	1089		
SD1045	堀	奈良・平安	1090		

2．時期別検出遺構と出土遺物

国指定史跡福岡城の区域は、鴻臚館以前から現在まで、数段階の土地利用の変遷をたどってきた。鴻臚館遺構の調査を行うには、それ以降の遺構の記録保存も必要となる。ここでは鴻臚館跡とは直接関係ない遺構も含めて、平成11年度調査で検出された遺構について５期に分けて報告する。

１）戦後構築物

昭和20年６月19日の福岡大空襲によって焼失した旧陸軍24連隊の跡地には、昭和23年10月福岡平和台総合運動場が建設され、第３回国体会場として利用された。サッカー競技場は昭和24年から25年にかけて、大規模な改修工事を加え、平和台野球場として生まれ変わった。この時期の遺構は大半は撹乱とでも言うべき遺構であるが、鴻臚館、福岡城関係の遺物が含まれており、遺物取り上げの必要から Tab.４、Fig.７のように遺構番号を振っている。外野スタンドはグランドを掘り下げた土で盛り上げたものであり、各時期の遺物が多量含まれている。

Fig.６に示したスタンド盛り土の遺物は、大きく連隊関係（１）、福岡城関係（２～４）、中世（５～11）、鴻臚館関係（12～24）に分けられる。図示した遺物について説明する。１は連隊使用の丼形の碗で口縁部の外側白色釉下に暗い緑の圏線２条がめぐる。２、３は焼塩壺の蓋で、内面に布目が残る。２には２行にわたって「若□□様、□□…」の墨書がある。４は唐津焼きと思われる天目碗で、ざっくりした黒灰色の胎に黒緑色の釉がかかる。５は唐津焼き皿で、高台は糸切り離し後内面をえぐる。見込みに３カ所の大きな砂目跡を残す。６～10は龍泉窯系青磁である。６は平底皿、７・８は碗でいずれも見込みに花文を描く。12世紀後半に属す。９は分厚い高台の小碗で14世紀代、10は内面に印花文を持つ碗で15世紀前半代のものである。11は12世紀代の高台の高い白磁碗である。12～14は鴻臚館関連の白磁で、12、13は邢窯系の蛇の目高台を持つもの、14は白磁ＸⅠ類とされる11世紀前半期のものである。15～24は越州窯系の青磁で、蛇の目高台を持つもの（15）、削りだしの高台を持つもの（16～20、22、23）、貼付高台（21、24）などがある。

２）旧陸軍２４連隊関係遺構

明治維新後、福岡城跡はしばらくの間福岡県庁として使用された。明治19年には陸軍歩兵24連隊が正式に福岡城跡に設置され、昭和20年の終戦まで約60年間兵営として使用された。前述の通り福岡大空襲によって大半は焼失したが、外野スタンド盛り土直下の基礎は良好に残っていた。

ＳＢ１０１７・ＳＢ１０１８（Fig.７、Pl.３）

従来武器庫と考えられてきた礎石建物であるが、福岡市博物館蔵喜多嶋資料「既設福岡歩兵第二十連隊弐ヶ中隊兵舎新築図面」によると被服庫とされている。南北に長い３棟の建物のあったことがわかるが、東端の建物は野球場グランド部分に位置し、既に削平されている。SB1018は南端が確認され、SB1017は平成12年の調査で北端が確認されているため建物規模が想定できる。すなわち母屋の梁行きは４間、桁行き15間の細長い礎石建物で、東西両面に各１間の庇、または各１間幅の、東に庇、西に廊下を持つものと考えられる。建物周囲には、花崗岩の切石で瓦を挟み込むようにしつらえた雨落ち溝（SD1019.1025）が巡らされている。内面礎石は単独で設置されているが、側柱礎石は布掘り状に連続して大礫を並べ、頑丈な基礎としている。またこの２棟の建物は、ほぼ中央部で渡り廊下状の通路（SA1023）によってつながっている。

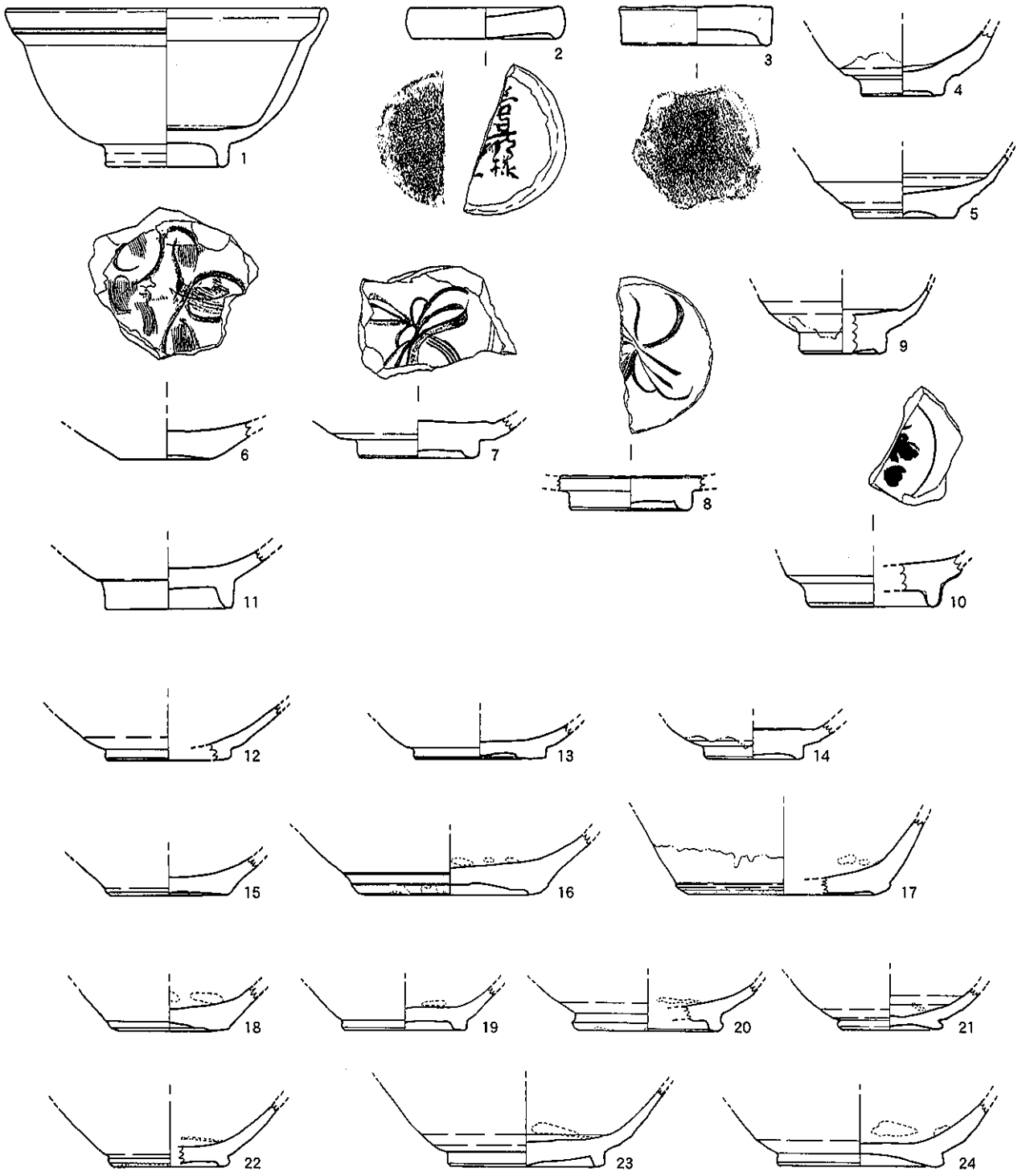


Fig.6　外野スタンド盛り土等出土遺物（1／3）

ＳＢ１０２８（Fig.7、Pl.4）

SB1017、SB1018の南側の東西に長い礎石建物である。軟質の風化頁岩の岩盤上に設置されている。西端部は調査区外に伸び全体規模は不明だが、母屋は梁行き３間、桁行き16間以上の規模を持ち、北側に１間幅の庇を持つ。建物東、南面雨落ちには凝灰質砂岩の切石で蓋をした、排水土管がめぐって



Fig. 7　近・現代遺構全体平面図（1／250）

いる。内面礎石は単独で設置され、ほぼ根石を残す程度の状態である。側柱は岩盤を布掘りして小振りの礫を充填し、花崗岩切石角礫をその上に置き、礎石としている。

北側庇の外には残りは悪いものの花崗岩切石を１列に並べており、既に瓦敷きはみられないが母屋側の列石との間は雨落ち溝だったと思われる。

これらの建物の間は通路として使われており、度々の嵩上げ整地により幾層もの硬化面がみられる。芝を敷き詰めたり、車両の轍の残る面もあった。この整地には鴻臚館関係遺物も混在する。また、通路面最上部には空襲による火災整地によって、連隊関係遺物が焦土とともに敷き詰められている。しかし、焦土はSD1001の東側約７m幅の範囲にはみられず、国体の際の通路とするために両脇に片づけられたものと思われる。図示はしていないが、焦土からは火熱で溶解したガラスや歩兵銃弾、薬莢、認識票、帽子徽章、軍服ボタン、軍靴底、有刺鉄線等の軍隊関係遺物が出土している。

Fig.８に示した遺物は、建物床面や通路の整地に伴う遺物で、各時期の遺物が混在する。１～４は福岡城に関する遺物で、１が焼き塩壺の身、２が同じく蓋である。３は二重口縁をもつ陶器灯明皿、４は染付高台付き小杯である。５、６は中世の遺物である。５は大内系の土鍋で、三脚を持つものであろう。６はロハゲの白磁皿である。７～34は鴻臚館関係の遺物である。７は北宋前半期の白磁で、高台内面を斜めに削り出す。８、９ともに小さな玉縁を持つ白磁碗で邢窯タイプのものに類似するが、胎土は粗く北宋前半期と考えられる。10、11ともに蛇の目高台を持つ邢窯タイプの白磁碗である。12は口縁を端反りにする定窯系の白磁で、口縁端部を削り輪花とし、それに対応して内面に白色の堆線を施している。14～33はいずれも越州窯系青磁である。14～25はⅠ類とされる精製品、29～31はⅡ類とされる粗製品、26～28はⅢ類とされる貼付の輪高台を持つ精製品である。14は高台内を粗くえぐり、蛇の目にした碗である。えぐりは中心からずれる。高台脇を斜めに削り、畳付きのみ釉を掻き取る。15、16は削り出しの平高台の碗で、高台脇を斜めに削り、この部分と内底に目跡が残る。17～25は削り出しの輪高台で、えぐりが浅く幅広の高台をもつものと、断面台形の高台を持つものがある。基本的に畳付きを除き内外面施釉で、畳付きと内底に目跡が残るが、17、18、25は外底露胎となっている。26はやや外方に開く高台を持つ碗で、畳付きを除き全面施釉されるが、内底に目跡は残らない。体部に窪みを入れ輪花をなすものと思われる。27は貼付の高台で高台内側を斜めに削っている大振りの碗である。全面に秘色風の青釉が均質に施され、畳付きのみ拭き取られている。内底に目跡はみられない。極めて優品である。28は浅い碗で、外方に開く細いバチ形の貼付高台を持つ。内外全面に施釉され、高台内に４カ所の目跡が残る。見込みに線描きによる草花文があり、体部に外方からの窪みを入れ輪花となす。29は口縁端部を内傾させる碗で、内面と外面体部下半に施釉され、内底に大きな目土が残る。30は円盤状高台を持つものであるが、31は内面をえぐり、輪高台風にする。32は精製品の壺（水注）で削り出し輪高台を持ち、均質な釉が畳付きを除き内外面にかかる。33は盤口壺の口縁部破片で濃いオリーブ釉が掛けられるが、胎は黒粒を含み粗い。

ＳＫ１０４３（Fig.９・10、Pl.５－４～６）

連隊建物の建設時及び増設時に、窪地の整地に多量の瓦が使用されている。明確な掘方が無く、ほとんどが鴻臚館に関する瓦のため、当時の瓦溜まり遺構と区別しにくいのだが、わずかに混入した遺物で判断せざるを得ない。この遺構も連隊建物SB1028建設による整地と考えられる。図に示した遺物は１～３が江戸時代、以外は鴻臚館関係遺物である。１，２は高取焼き、３はかわらけである。４は蛇の目高台の白磁、５以下は越州窯系青磁で、５が貼付輪高台、輪花碗、６、８はⅠ類、７は口縁に褐釉を掛け分ける粗製皿、９はⅡ類粗製碗、10は均質な施釉をした水注の優品、11は特殊な器形で、竹管施文をした破片であるが全体形は不明。12は水注の口縁部破片である。

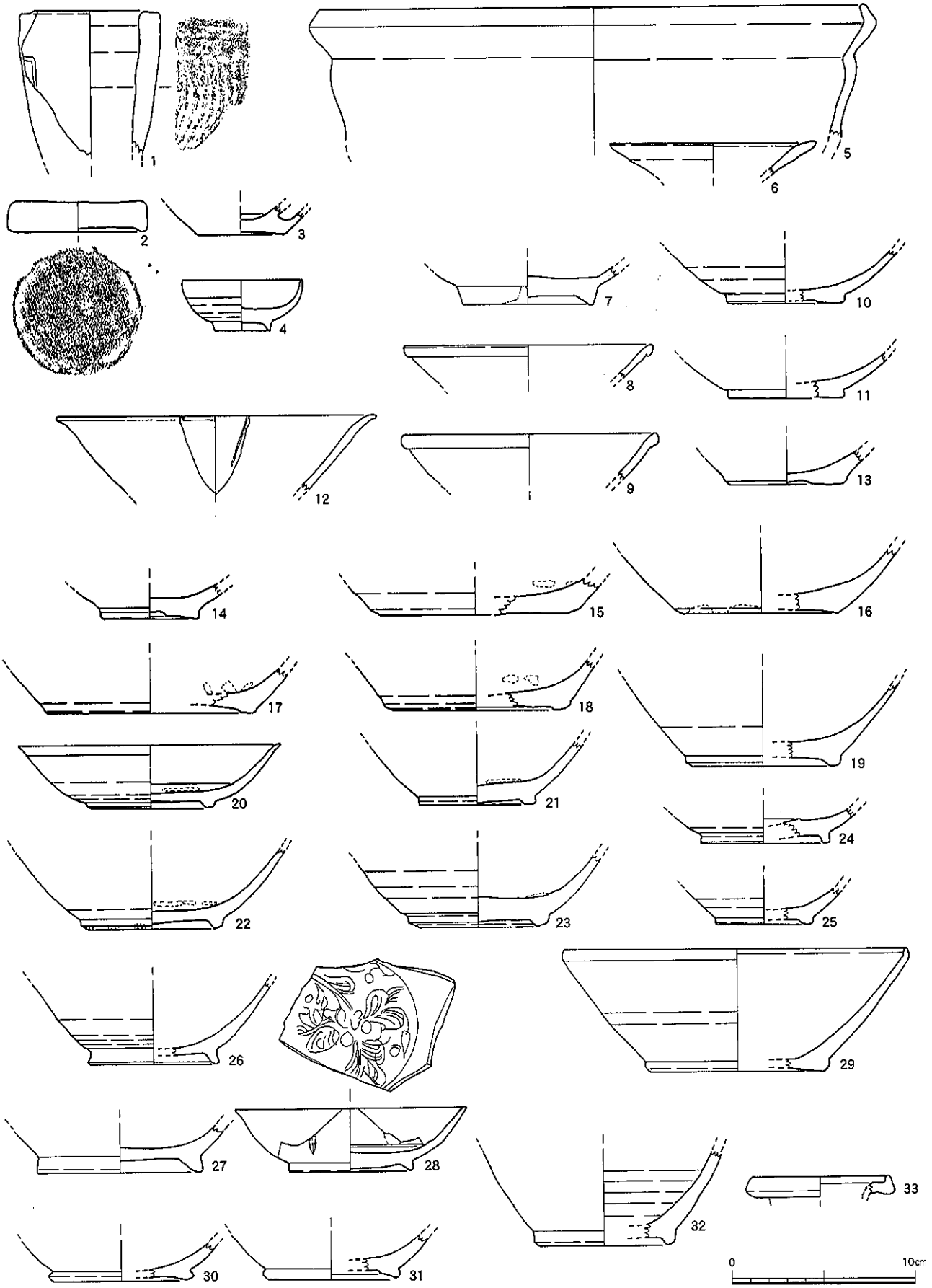


Fig. 8　旧陸軍２４連隊関係遺構出土遺物（1／3）

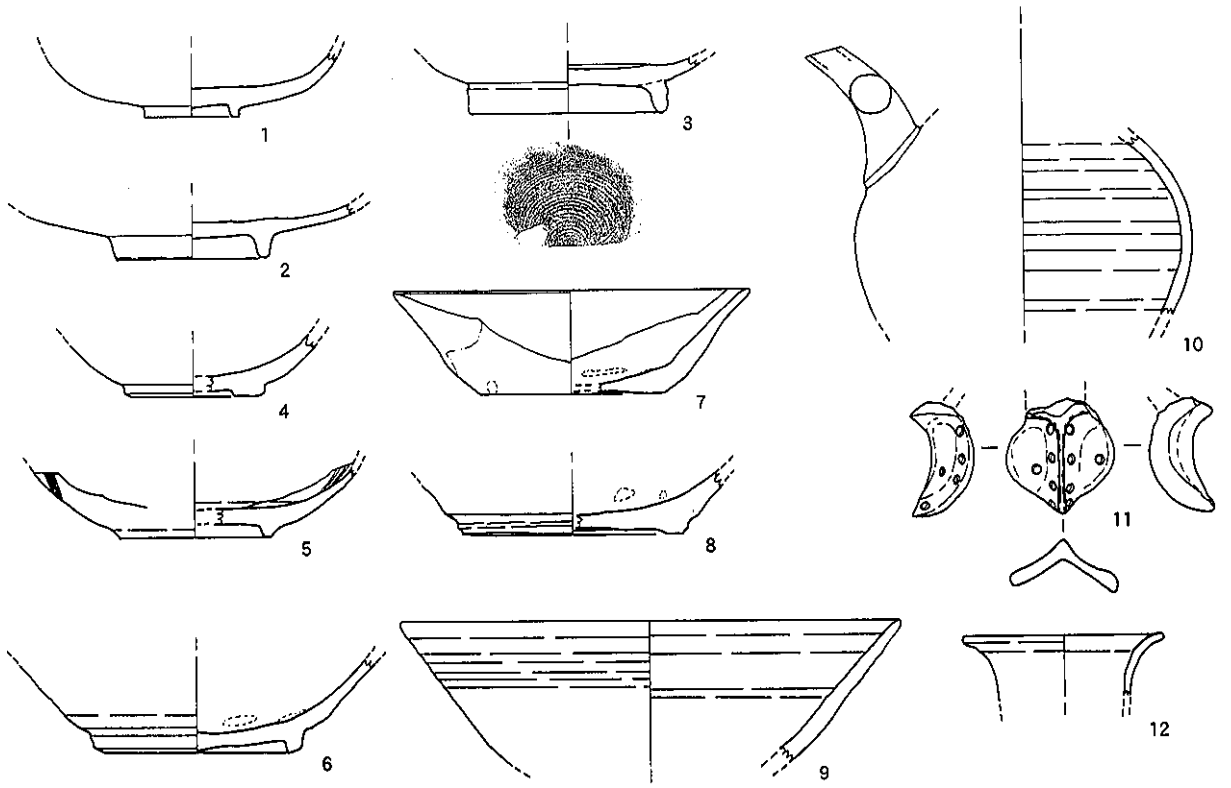


Fig.9　ＳＫ１０４３出土遺物（1／3）



Fig.10　ＳＫ１０４３瓦溜まり平面図（1／40）

３）福岡城関係遺構

福岡城は国指定史跡であり、遺構検出の場合には慎重な取り扱いが求められる。平成10年度に実施した試掘調査では、城内を東西に横断する道路面が確認されていたが、今年度調査区では確認されていない。また、この道路南側にあったとされる家老屋敷（大音屋敷）の遺構も削平を受けているものと思われ、建物基礎は検出されていない。わずかに屋敷内のゴミ穴と思われる土壙が２基がみられるだけである。また、福岡城築城に伴う埋立遺構も検出されている。

ＳＭ１０４７（Fig. 14、 Pl. 7－2）

鴻臚館関係瓦を大量に廃棄された中世末期の池を埋め立てた遺構である。大規模、かつ短期間に埋め立てられていること等から、17世紀初頭の福岡城築城による整地によるものと考えられる。埋立土は岩盤由来の風化頁岩であり、築城に当たって周辺地形の大幅な改変があったことがうかがえる。埋立土には標高７m付近に土層変換面がみられ、大きく２回に分けて埋立が実施されたことを示している。堆積状況から見ると西側から東側に向けて埋められている。グランド内は球場建設によって削平されているが、本来は標高８m強のレベルで平坦面を造成したものである。埋立土からの出土遺物は少ない。１は粗い胎土の明代龍泉窯系青磁碗で、畳付きと高台内は露胎である。２は定窯系の白磁壺である。精良な胎土で、削り出しの端正な高台を持ち、内面と畳付き以内は露胎で、外面は高台脇まで均質な釉が施される。３は越州窯系青磁Ⅰ類碗で全面施釉され、畳付きに目跡を残すが内底にはみられない。４は戦国期の三つ巴文軒丸瓦である。

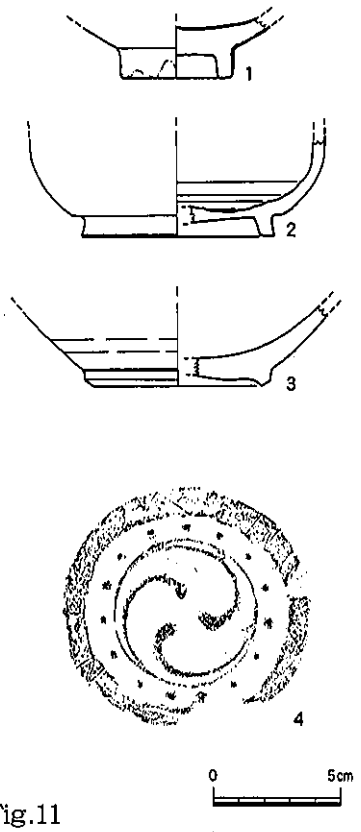


Fig.11
ＳＭ１０４７出土遺物（1／3）

ＳＫ１０２９（Fig. 12）

大音屋敷地内に営まれた不定形のゴミ穴である。 SK1038 と大きく重なっており、それよりも新しいが、遺物には SK1038 のものも混在する。両遺構ともに18～19世紀初めのもので、大きな時期差はないものと思われる。ともに多量の近世陶磁器が廃棄されている。図示した遺物は１～17が福岡城関係の近世遺物、18～20が中世、21～33が鴻臚館関係遺物である。１は焼き塩壺で、外面に長方形区画のスタンプがあるが、内部の文字は判読できない。２～７は肥前系の染め付けである。２は首が細く、油壺と思われる。７は外面体部のみに青磁釉を施したもので、外底に渦福文字がある。４、６は見込み蛇の目釉剥ぎである。８～15は高取系の陶器である。９～11は同型の皿で、高台脇以下露胎、ともに高台内に「イルヨリ」のカタカナ墨書がある。12にも墨書があるが判読できない。15は高台内面脇の露胎部の相対する２カ所に「○」「立」の墨書がある。16は肥前系の陶器甕、17は陶器土瓶である。18は李朝の茶碗で、19は同じく象嵌青磁、20は同安窯系青磁碗である。21、22は小さな玉縁、蛇の目高台を持つ邢窯系白磁碗。23～31は青磁で、31は合子身で外底のみ露胎、蓋の受け部と畳付きに目跡が残る。32は長沙窯水注破片で黄釉に褐彩が施される。33は越州窯系陶器壺である。

ＳＫ１０３８（Fig. 13）

SK1024 同様近世ゴミ穴で、図示した遺物はいずれも近世のものである。１～６は土師器皿、５は有孔である。７は焼き塩壺蓋。８～16は高取系の陶器で、11には「イルヨ（リ）」の、16には「吉塚」の墨書がある。17～20は肥前系染め付け、18～27は陶器、28はハマ、29が土垂、30が砥石である。

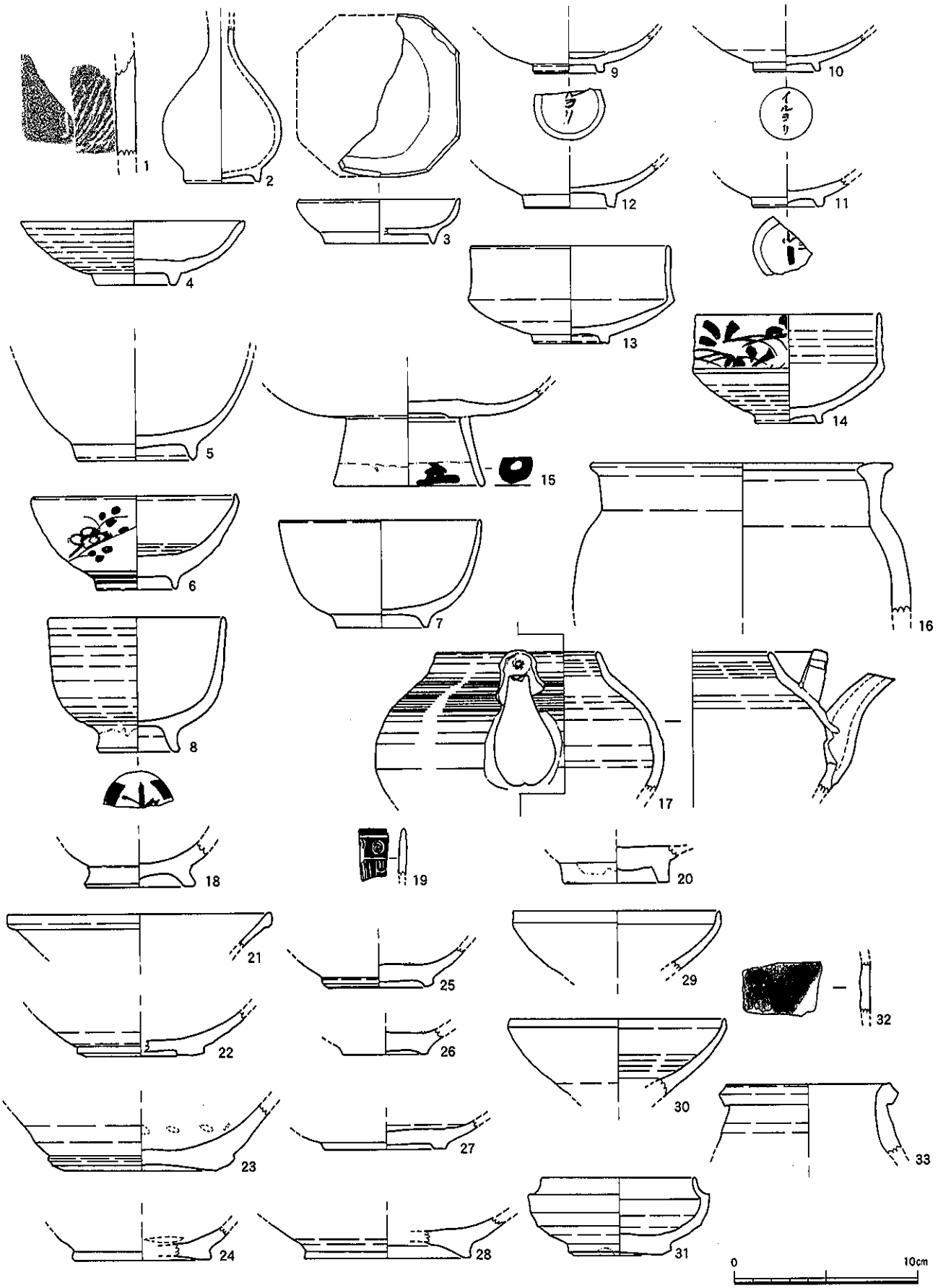


Fig.12　ＳＫ１０２９出土遺物（1／3）

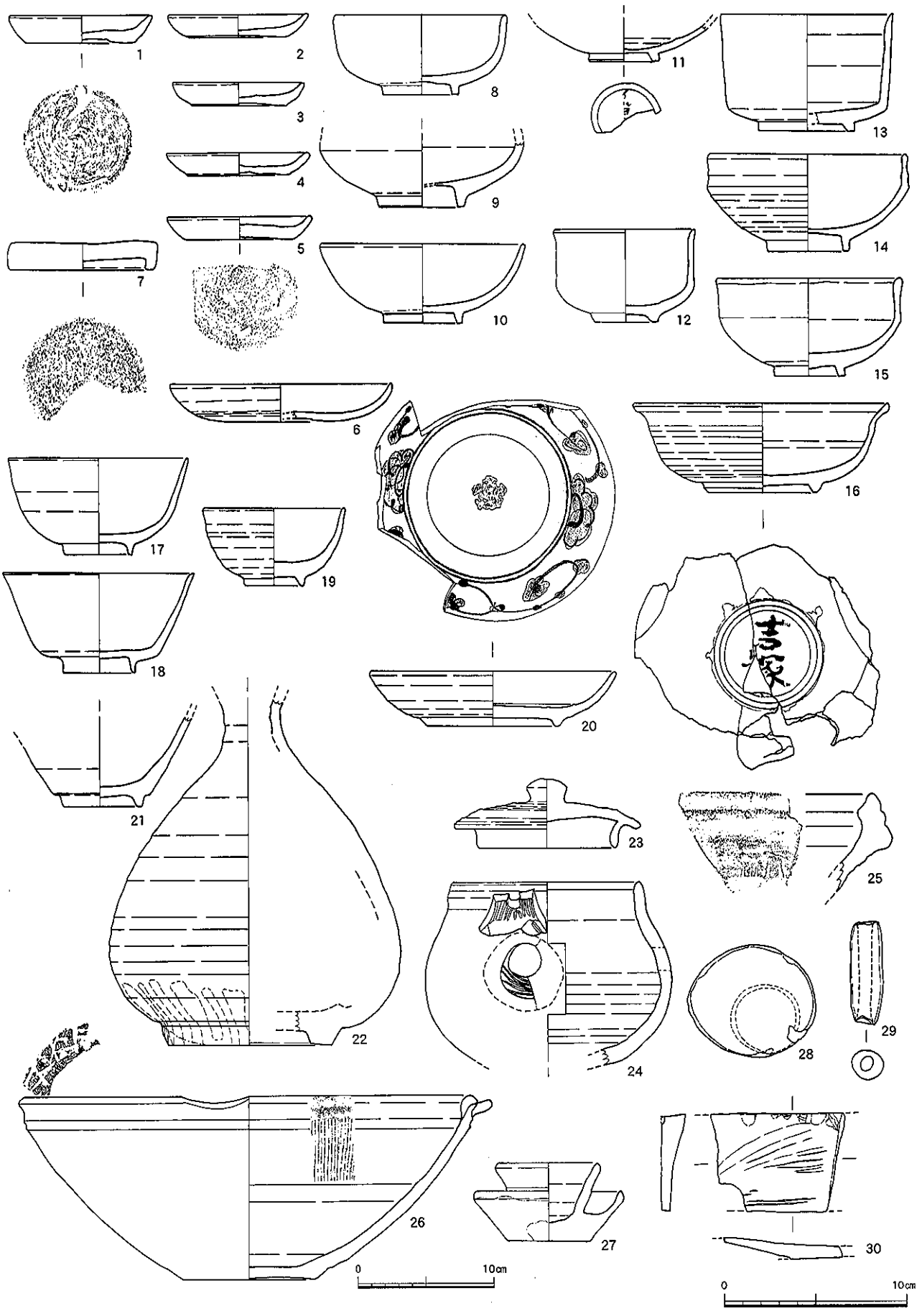


Fig.13　ＳＫ１０３８出土遺物（1／3，26は1／4）

4）鴻臚館廃絶後から福岡城築城間の遺構

次項で詳述するが、鴻臚館の廃絶時期は現在11世紀半ばと考えられるようになっている。遅くとも8世紀初頭段階で、自然地形の谷を埋め、人工的な堀（SD1045）として整備されていたが、鴻臚館関係施設の継続している間は、数回にわたって、火災による瓦等大量の廃棄が行われている。鴻臚館の廃絶後、この堀跡は自然堆積により徐々に埋没し、中世末の段階では池（SG1046）となり最終的には福岡城築城により埋め立てられ（SM1047）平坦地となる。この鴻臚館廃絶後から福岡城築城の間の遺構については、これまでの調査で梵鐘鋳造遺構、地下式横穴が野球場南側から見つかっており、建物は確認されていないものの、小規模な寺院の存在したことが想定されている。大規模な削平によって平成11年度調査区でも建物は検出できなかった。しかし、当該期の遺物はかなりの量がまとまっており、何らかの施設があったことは確実である。主たる遺構は堀の埋没過程に関するものである。

ＳＤ１０４５

堀堆積の上層部分（Fig.35—５のⅠ～Ⅲ層）がこれに当たる。ｅ、ｆ-820,830区のみ掘り下げた。埋立に使用される風化頁岩は含まず、茶褐色の細粒の粘質土に、鴻臚館由来の陶磁器、瓦小破片が混じる。出土遺物は下層遺物とともに次項で述べる。

ＳＧ１０４６（Fig.14、Pl.６～９）

福岡城築城時埋立て直下の遺構である。東西に伸びる堀が鴻臚館廃絶後徐々に埋没し、中世後期に池となったものである。底には青灰色粘質シルト、流砂が堆積しており、西側から SD1081 の溝を経由して水が流入し溜まる池の状態にあった事を示している。この池を南北に横断する幅７m程の築堤または陸橋状の高まりがあり、西側に溜まった水はここをオーバーフローして東側に流れ込むようになっている。酸化鉄層が重なっており、数回にわたって嵩上げされたものである。この池の南北斜面、底面には鴻臚館由来の瓦が大量に堆積している。南北斜面立ち上がりの瓦群は平成10年度のグランド部分の試掘で既に確認されており、その段階で東西に走る谷の存在が想定されていたのであるが、時期については明らかではなかった。平成11年度調査では、鴻臚館の瓦に混じって、図に示したように明および朝鮮時代の陶磁器が多く出土しており、中世後期の段階で鴻臚館跡地の整地が行われ、その際瓦を池に廃棄したものであろう。このことは中世後期段階で大規模な整地を行う施設の存在がうかがわれ、さらに鴻臚館瓦の堆積が池の南北両斜面にみられることは、鴻臚館建物も池（堀）の南側だけではなく北側にも存在したことを示唆している。

北側斜面の瓦は、北側建物群に由来し、南側斜面の瓦は南側建物群に由来すると考えられるので、南北遺物群の比較は、とりもなおさず南北建物群の時期的な変遷や施設の性格を比較することにもつながり、重要な手続きである。しかしながら、出土遺物は瓦を中心に膨大な量に及び、現在十分な整理が行われていない。瓦については次年度報告書で整理結果を報告することとし、今回は陶磁器類を中心に報告する。なお、東西の土層観察壁によって、おおむねｆ区＝北側斜面、ｅ区＝南側斜面できる。遺物も２分して紹介する。

ｆ７９０区出土遺物（Fig.16）

１～14は中世の遺物である。１は胎の粗い白磁皿であるが、内面と外面体部下半まで掛けられた釉は青味を持つ。高台は３カ所をアーチ状にえぐり、尖端に重ね焼きの釉が付着する。２、３も同様の皿であるが、２のえぐりは４カ所である。４～６はほぼ15世紀代の龍泉窯系青磁碗で、内底に印花文を持つ。いずれも分厚い高台部に二次加工を施し、円盤となす。７は同安窯系青磁碗、８は龍泉窯系青磁碗で12世紀後半～13世紀前半のものである。９～14は国産陶磁器である。９は瀬戸焼のおろし目皿で、糸切り底である。10は径65cmにもなる大型の土師質土鍋で内外面に煤が付着する。11は瓦質擂

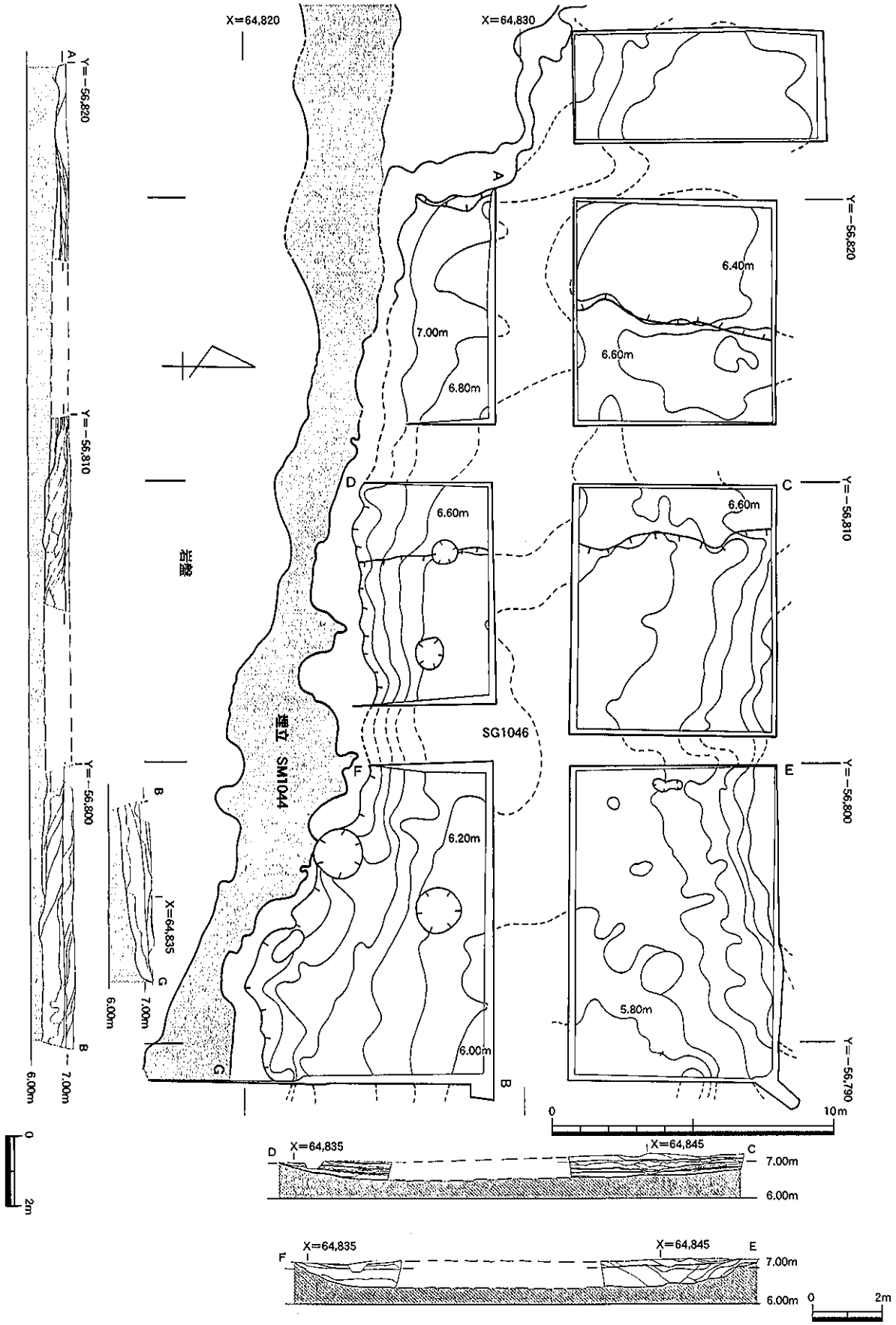


Fig.14　ＳＧ１０４６平面図（1／100）とＳＭ１０４７土層図（1/80）

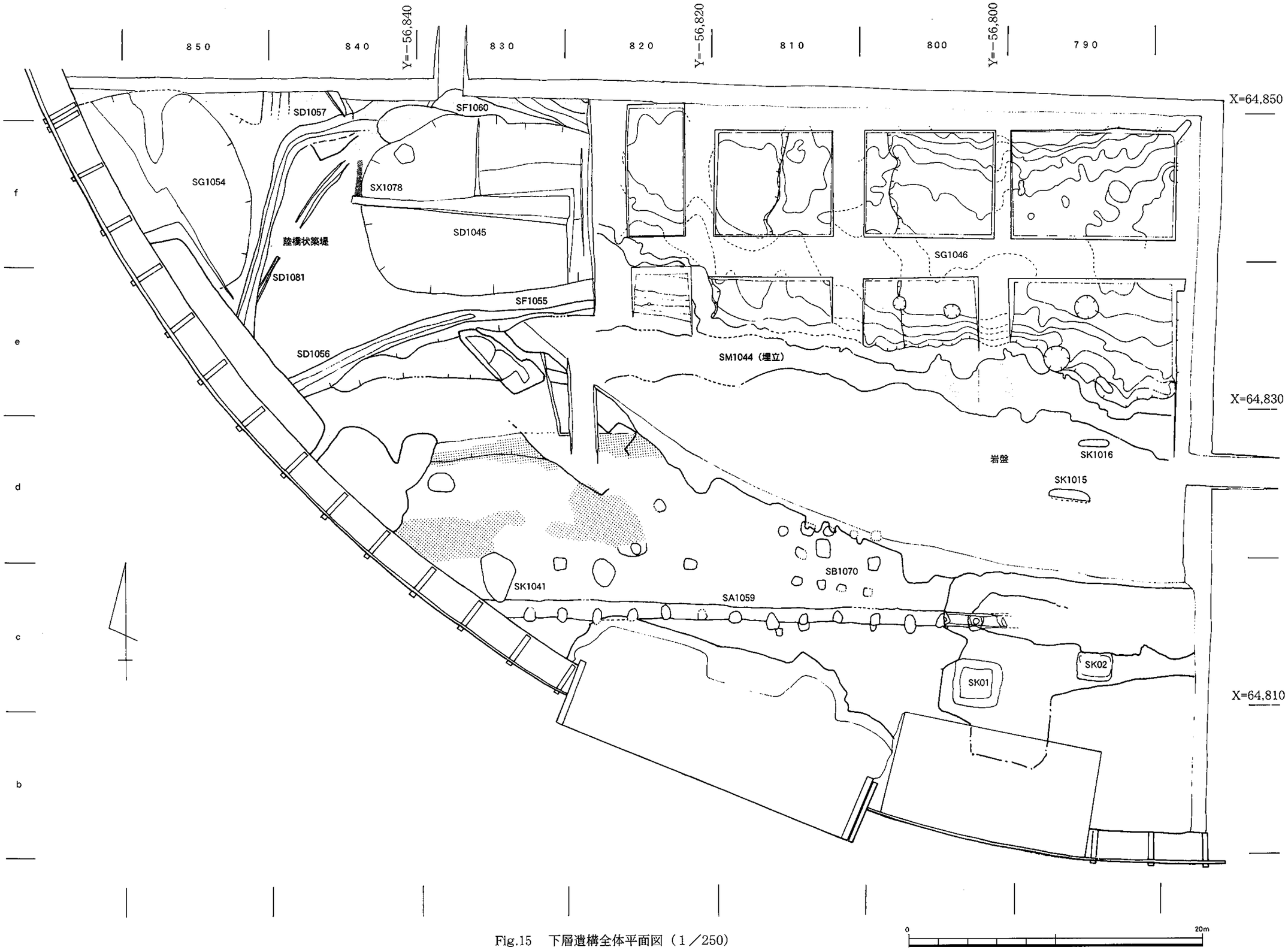


Fig.15　下層遺構全体平面図（1／250）

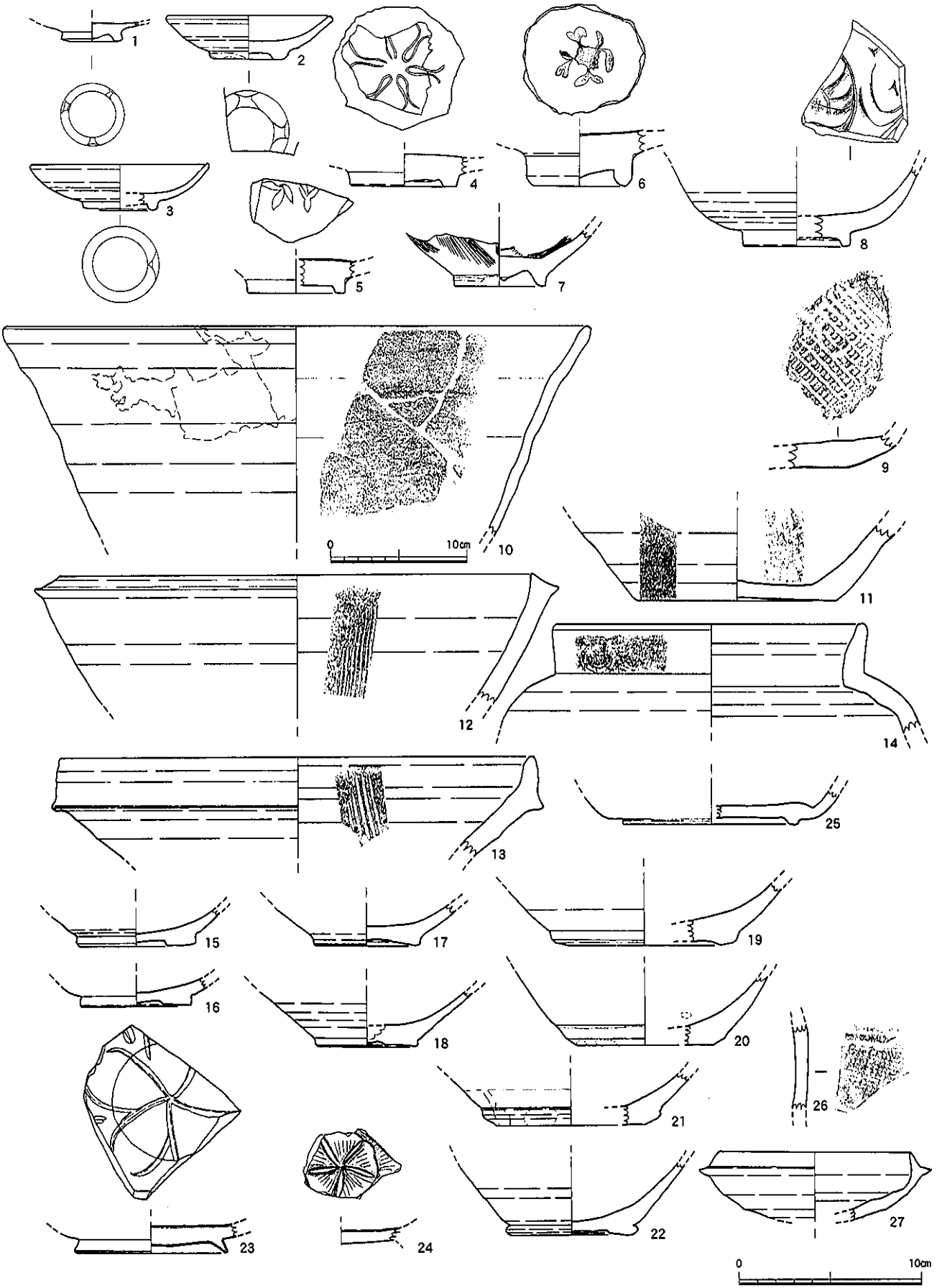


Fig.16　ＳＧ１０４６、ｆ７９０出土遺物（1／3，10は1／4）

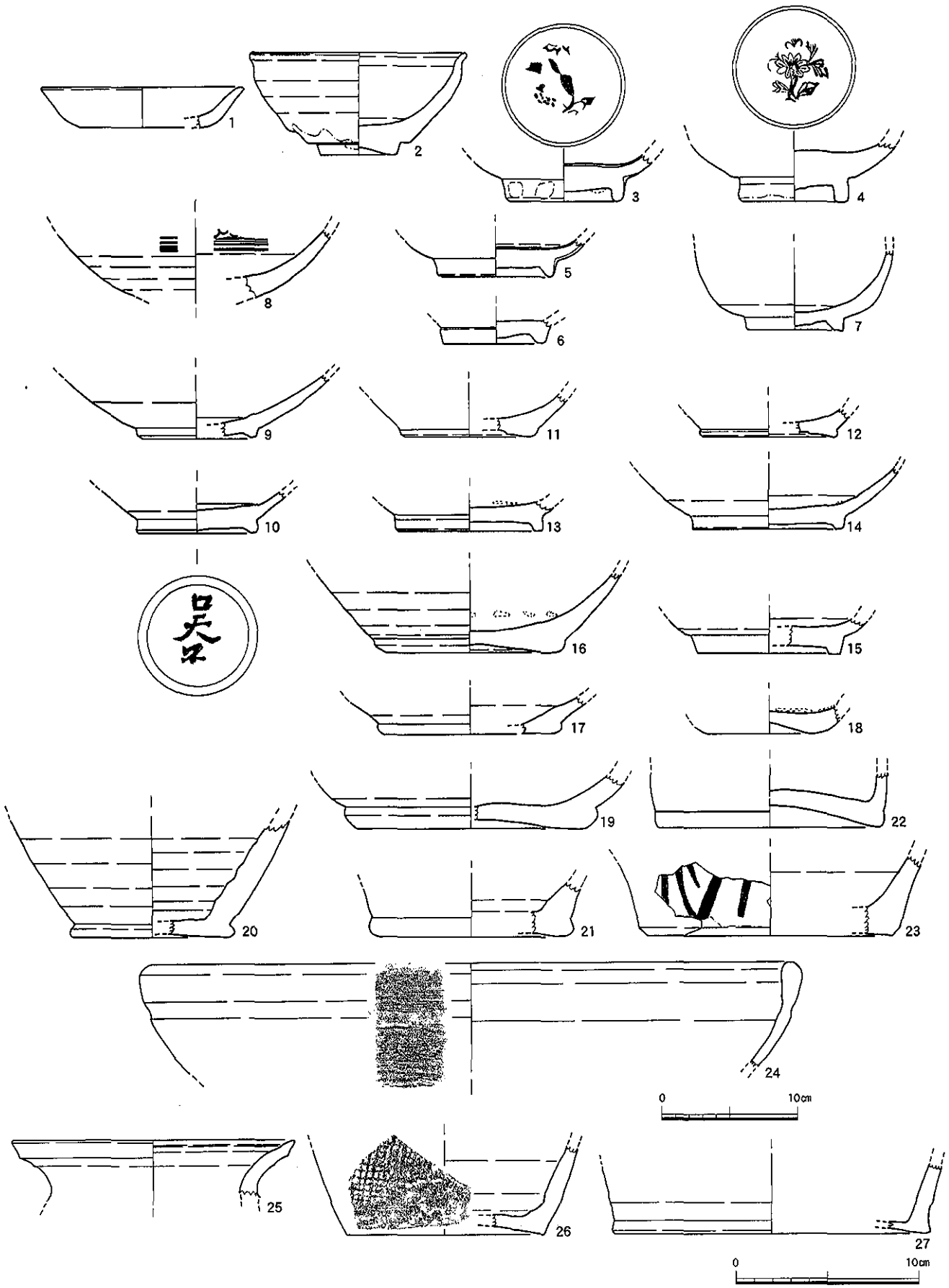


Fig.17　ＳＧ１０４６、ｆ８００出土遺物（1／3，23・24・27は1／4）

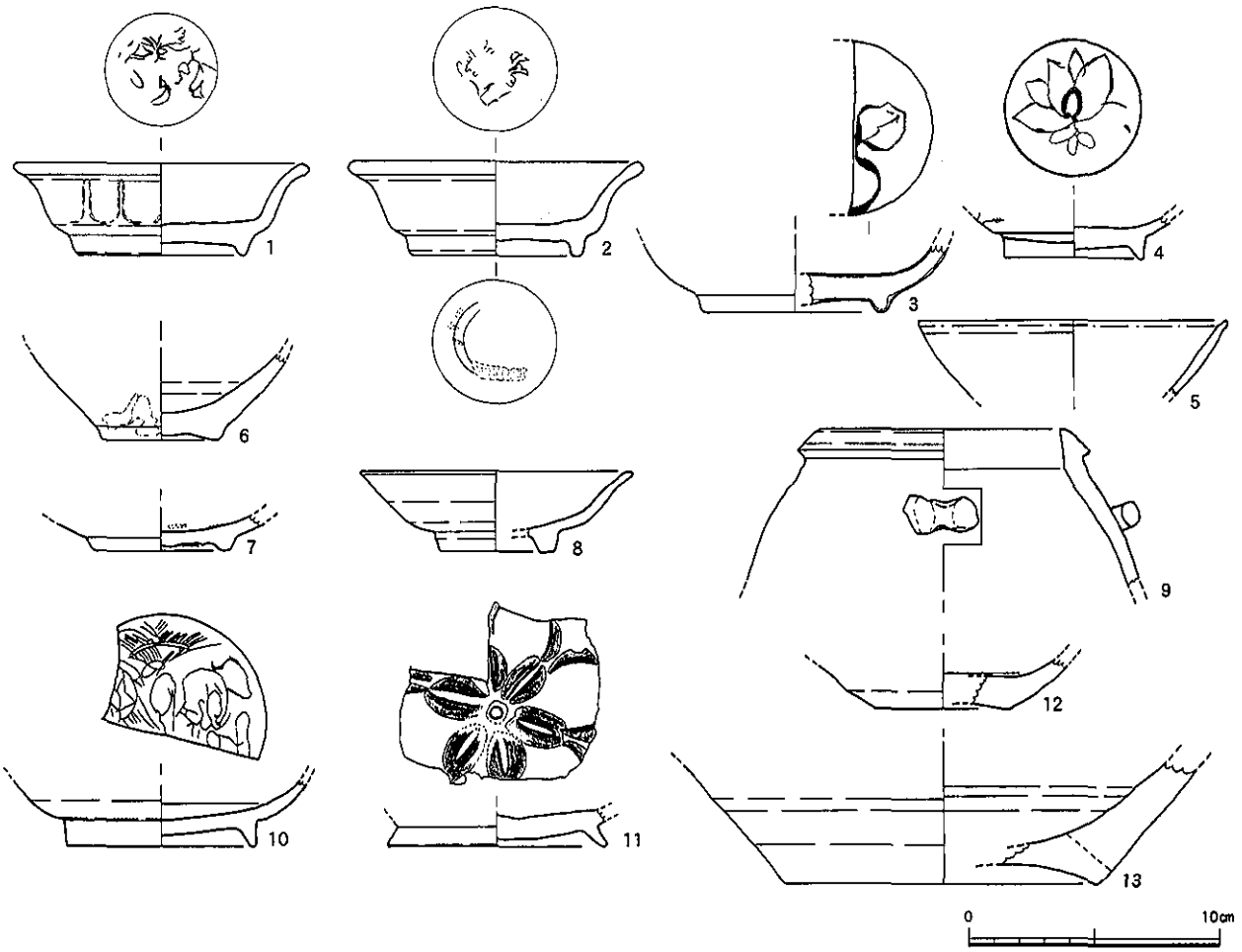


Fig.18　ＳＧ１０４６、ｆ８１０出土遺物（1／3）

り鉢であるが、二次被熱により酸化する。12、13はいずれも備前焼の擂り鉢であるが、口縁部の造りに違いがある。12は13世紀後半から14世紀前半、13は16世紀前半に位置づけられる。14は瓦質の広口壺で口縁部外面立ち上がりに、２個の同心円文スタンプを並列して施文する。15～26鴻臚館関連遺物である。15、16は邢窯系の蛇の目高台をもつ白磁碗である。17～24は越州窯系青磁である。17、18は蛇の目高台を持つ碗で、畳付きのみ釉を掻き取る。19は内外全面施釉で、削り出しの幅広い高台畳付きの釉は掻き取り、目跡を残す。20、21は削り出しの平高台を持ち外面を斜めに面取りする。22は円盤状貼付高台を持つものであるが、内面をわずかに削り輪高台風にしている。24はⅢ類とされるものである。23は外側にバチ状に開く貼付高台を持ち、内面にはヘラ描きの粗い花文が描かれている。
高台内に目跡を持つ。24は底部破片で高台は欠失しているが、23同様のものであろう。内底にヘラ描きと線描きによる花文を持つ。25は須恵器杯、26は高麗系の陶器破片で表面黒色を呈し、横位に小さな突帯を持つ。27は鴻臚館以前の須恵器である。周辺に古墳または当該期の遺構が存在したことを示す。

ｆ８００区出土遺物（Fig.17）

１～７は鴻臚館廃絶後の遺物である。１は土師器皿。２は瀬戸天目で、口縁は鐚口をなす。外面体部下端を直角に削り出し、高台を造る。高台内をわずかにえぐる。胎土はザックリとした磁質で、濃い鼈甲色の釉が内面と外面下半までかけられ、端部と見込みには厚い釉溜まりが生じる。３～５は龍泉窯系青磁碗である。３、４ともに分厚い底を持ち、高台内にハマの痕跡が残る。見込みに印花文をもつ。５はやや底が薄い。15世紀代のものである。６は見込みの釉を環状に掻き取る白磁碗で、二次

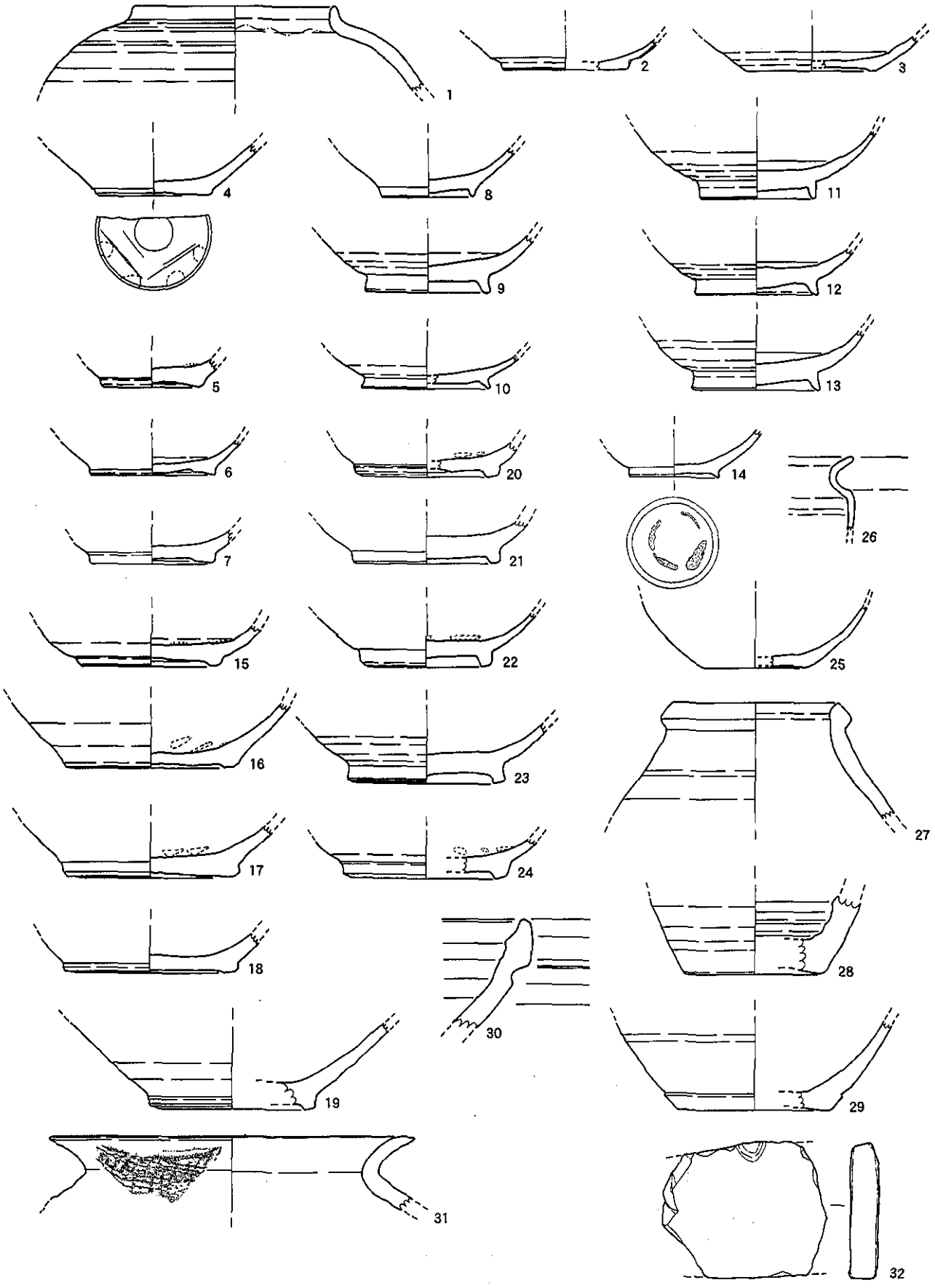


Fig.19　ＳＧ１０４６、ｅ７９０出土遺物（1／3）

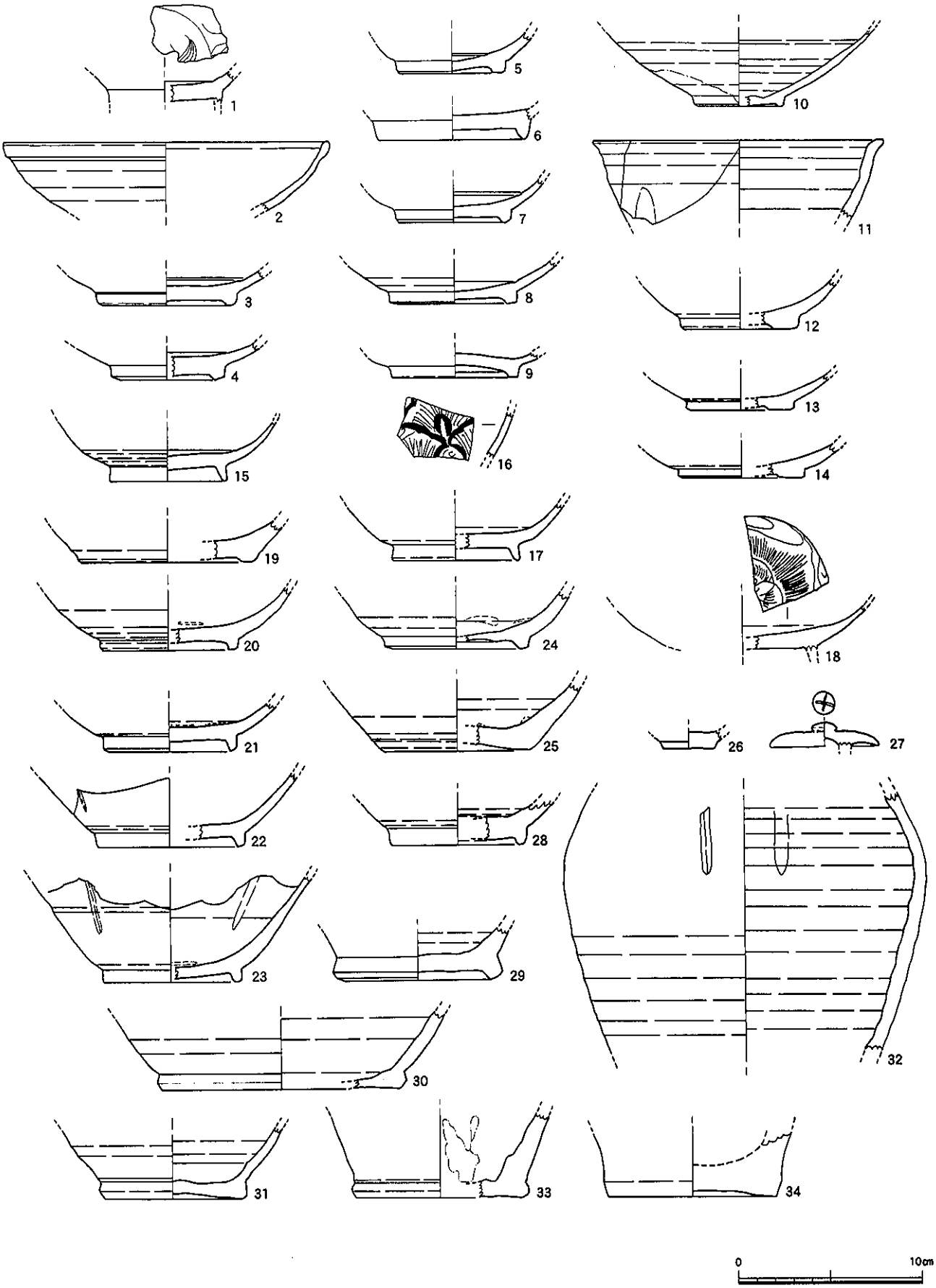


Fig.20　ＳＧ１０４６、ｅ８００出土遺物（1）(1／3)

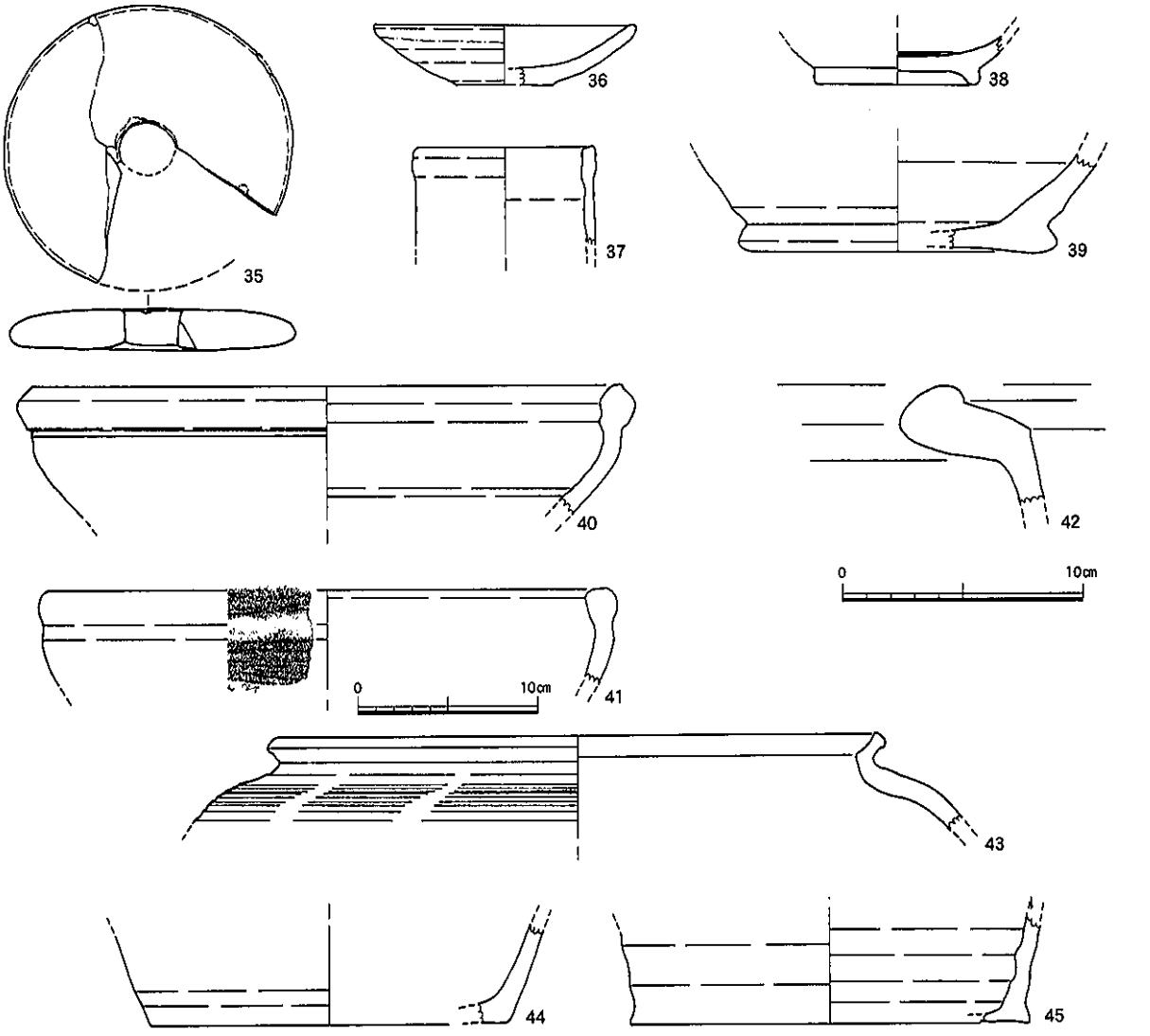


Fig.21　ＳＧ１０４６、ｅ８００出土遺物（２）（1／3，40･41･44･45は1／4）

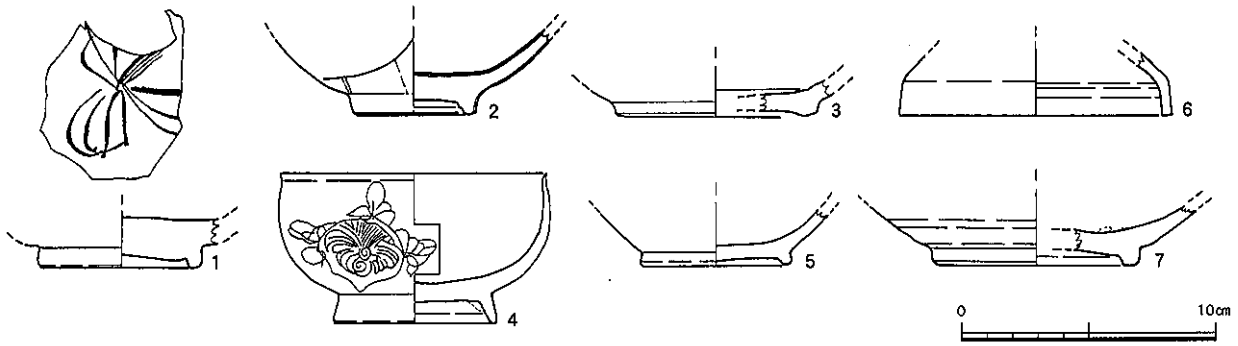


Fig.22　ＳＧ１０４６、ｅ８１０出土遺物（1／3）

加工により円盤状に整形する。７、８は朝鮮時代の陶器で、それぞれ緑褐釉をかける碗、内外面体部に象嵌を施す三島手の鉢である。９～27は鴻臚館関係遺物である。９、10はＸⅠ類とされる白磁碗で鴻臚館廃絶直前の時期に当たる。10の高台内露胎部には中国人名と思われる「呉」の簡体字「吴」が墨書されている。時期の異なる遺構から出土したものではあるが、鴻臚館から博多へ貿易の拠点が移動していく時期の様子がうかがえる遺物である。11～18は越州窯系青磁である。11、12は蛇の目高台の碗で、11は全面施釉、12は高台畳付きのみ露胎である。13～15は削り出し輪高台の碗で、畳付きを

除いて全面施釉、畳付きと内底に目跡がのこる。16も同様の鉢であるが、高台のえぐりは浅い。17は貼付円盤状高台の碗で外面無釉、18は外底を窪ませた平高台皿である。19は胎の粗い無釉陶器こね鉢で、内面は使用により摩耗している。20、21は同形の中国製無釉陶器水注で、胎土は粗く大粒の石英粒が混じる。22は中国製無釉陶器で、長沙窯水注などの底造りに似るがより硬質である。23は中国製大型甕で外面に釉を掛け流す。24は焼き締め風の無釉陶器こね鉢で、中国製と思われる。25は無釉陶器壺口縁部であるが、胎土に石英粒を多く含み、20、21に似る。26は統一新羅、27は高麗の陶器である。

ｆ８１０区出土遺物（Fig.18）

１～９は中世の遺物である。１、２は同形、同大の龍泉窯系青磁皿で、２枚が重なり伏せた形で出土した（Pl.９－３）。全面に厚く施釉した後、内底と高台内は円形に掻き取る。内底には印花文がみられる。１の外面体部には蓮弁文がみられる。３は龍泉窯系青磁碗で、全面に水色の半透明釉を厚く掛けた後高台内釉を環状に掻き取る。見込みに印花文がある。４は染付皿であるが、二次的被熱で全体がカセている。ベトナム製か。５は口ハゲの白磁皿である。６～８は朝鮮時代の陶磁器である。６は白磁碗、７は白磁皿、８は粉引き手の皿である。９は中国製褐釉陶器四耳壺である。釉は大部分が剥落しているが、外面と内面口縁下まで白化粧の痕跡がある。10～13は越州窯系青磁である。10、11はⅢ類の碗である。10は直に立つ高台を持ち、見込みに線彫りの花卉文を描く。11は外にバチ形に開く高台を持ち、内面にヘラ切りの粗い花文を描く。両者ともに高台内にのみ目跡を残す。12は平高台の皿で、畳付きにのみ目跡を残す。13は大型の鉢で、全面施釉されている。胎土に違いがあり、底部には白粒を多く含む粗い土、体部には白粒を含まない精良な土が使用されている。

ｅ７９０区出土遺物（Fig.19）

ｅ列（南側斜面）では、中世遺物はｆ列（北側斜面）に比べると格段に少ない。中世段階の生活の場は北側を中心としたものであろう。

１のみが中世遺物で、以外は鴻臚館関係遺物である。１は瀬戸系の頸の短い壺で、外面と内面頸部に淡緑色の釉が薄くかかる。２は蛇の目高台の白磁碗、３はＸＩ類の白磁皿で、外底をわずかに削り高台をなす。外底無釉である。４～29は越州窯系青磁である。４、５は蛇の目高台碗で、４は高台畳付きの釉を粗く削り取り、５は外底無釉で内面底に目跡が残る。６、７は蛇の目高台に近い幅広の削り出し高台を持つもので、全面施釉、畳付きのみ釉を掻き取る。６は内底に目跡があり、７にはない。８～14はⅢ類の碗である。バチ形の外方に開く高台を持つものと、直立するものがある。いずれも全面施釉で、高台内側に目跡を持ち、内底にはみられない。15～19はえぐりの浅い削り出し輪高台の碗、鉢で、全面に施釉されるが畳付きのみ釉を掻き取り、畳付きと内底に目跡が残る。20～24はえぐりが深くやや高い削り出し高台を持つ。いずれも全面に施釉され、畳付きのみ釉を掻き取るが、畳付きと内底に目跡が残る。23は高台内側に目跡があり、内底にはない。25は平底碗で全面施釉、畳付きのみ釉を掻き取る。26は薄手の広口壺で内外面に薄く施釉される。27～29は越州窯青磁系の陶器である。いずれも四耳壺であろう。緑褐釉がかかるが、29は外面無釉、28は磁質である。30は中国製こね鉢で石英粒を多く含む粗い胎土で、無釉である。31は新羅系陶器。32は硬砂岩の砥石で上下平坦面と一側面に砥面を持つ。

ｅ８００区出土遺物（Fig.20・21）

１だけが中世遺物で以外は鴻臚館関係遺物である。１は白磁碗で内面底に櫛描き文、体部に片切り彫りの施文をする。２～11はＸＩ類の白磁碗である。いずれも削り出しの輪高台を持つ。内面全面と外面高台脇まで施釉される。高台内側にハマの痕跡を持つ例が多く、畳付き、内底に目跡を持たない。

６は高台脇を打ち欠き円盤状に整形している。10は体が外方に直ぐに伸び、内面底に小さな盛り上がりを造る。青白磁碗の器形に近い。11は厚みのある体部を持ち、口縁は外反する。体部縦の窪みを入れる。側面にはで12～14は蛇の目高台を持つ白磁碗である。高台脇まで施釉され、外底は無釉。畳付きは削り調整があり外面角は面取りする。15～34は越州窯系青磁である。15～18はⅢ類の碗である。いずれも貼付輪高台で、内外面全面に施釉し、高台内底に大きな目跡を残す。見込みに目跡はない。16の内面にはヘラ描きと線描きによる花弁文が描かれ、18には見込みに細い毛彫りによる繊細な花文が描かれている。19～24はⅠ類の碗で精製品である。削り出しの輪高台を持ち、畳付きを除いて全面施釉される。畳付きに目跡が残り、22を除いていずれも内面に目跡が残る。22、23は体部に外面からの凹みをいれる。25は削り出し平高台の碗である。粗製品の器形であるが比較的胎土は精良で、内面のみにガラス質の釉がかかる。畳付きと内底に目跡が残る。26は小さな平高台を持つ小碗で、貼付と思われる。内外面施釉されるが、外底はふき取る。円盤状に二次加工する。27は小壺の蓋である。全面に施有する。丸い撮みを持ち、頂部には「×」の刻みがある。28～34は壺または水注である。28、29は削り出し輪高台の精製品で、28は内面に釉垂れがみえ、29は内外面全面施釉。30、31は平高台を持つ。胎土は比較的精良である。31は全面施釉であるが、30は二次被熱による釉の剥落がひどく、内面に痕跡を残すのみである。32は内外面に施釉する精製品で、胴部から肩にかけて瓜割りの窪みをもつ。水注であろう。33は陶質で胎土が粗く円盤形貼付高台を持つ。内面底に釉垂れがあり、体部下半まで施釉される。34は磁質であるが胎土が粗く、外面全面に施釉し内面底には釉垂れがある。中世遺物の可能性もある。35は磁質の有孔円盤で無釉、薬研の碾子と考えられる。36は粗製の褐釉陶器皿である。灯明皿か。37は薄胎の褐釉陶器壺または水注の口縁部破片である。38は国産緑釉陶器碗で、内面と外面高台脇まで濃い緑釉が施釉される。見込みに２条の沈圏線がめぐる。39は中国製の円盤状貼付高台の胎の粗い壺もしくは鉢である。40は中国製無釉陶器こね鉢である。41は口縁部内側から外面に施釉される中国製の粗製褐釉陶器鉢である。42は中国製大型褐釉陶器甕の口縁部で、肩と口唇部、口縁部内面の釉をふき取っている。40～42は中世の可能性がある。43～45は高麗の黒色陶器甕である。

ｅ８１０区出土遺物（Fig.22）

遺物量は少ない。１～３は中世遺物である。１，２は龍泉窯系青磁碗で、１の見込みには片切り彫りの花文を持ち、２は体部外面に鎬蓮弁文を持つ。３は外面無釉の白磁高台付き皿である。４～７は越州窯系青磁である。４～６はⅢ類の精製品である。４は高い高台を持ち、体部は丸く口縁端部はわずかに外方に開く。外面に精緻な線彫りで花弁文を描いている。全面施釉で高台内面に目跡がある。５は低い削り出し高台を持つ碗で全面施釉、高台内面に目跡がある。６は合子蓋で、内外面施釉下端の釉のみをふき取る。７は低い削り出し高台を持つ碗で内底に目跡を残す。

ＳＸ１０３７（Fig.23、Pl.5－2）

昭和62年度調査区Ⅱ区東端で検出された瓦溜まり遺構 SB11と同じである。南側岩盤の北斜面に堆積しており、当時は建物基壇の一部と考えられていた。遺物は鴻臚館に関連瓦がほとんどであるが、瓦堆積は筑紫館整地層上の自然堆積の最上面にあり、直上には福岡城築城時の埋立土が被る。この状況はSG 1046 と同じであり、瓦の堆積自体は中世末の段階のものであろう。岩盤斜面については南側建物群の基壇的役割を持っているものと考えられる。筑紫館埋立の境には溝が造られ、埋立面自体は一段低い平坦面であり、南側建物群の北側の犬走り的な控え空間を作り出したものであろう。図示した遺物は軟質の須恵器広口壺である。

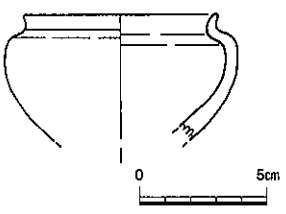


Fig.23（1/3）
ＳＸ１０３７出土遺物

5）鴻臚館・筑紫館関係遺構

平成11年度の調査は、平和台野球場南側の昭和63年度以降の調査で確認されていた遺構群が、どのような遺存状態で、どのような拡がりを持って北側（野球場内）に展開していくのか、それを確認する第一歩であった。既にボーリング調査、平成10年に実施した試掘調査の結果から、グランド内を東西に走る自然地形の谷の存在は想定されていたが、具体的な鴻臚館関連遺構は明らかにはできていなかった。外野スタンド部分については昭和62年度の確認調査で遺構の存在は明らかになっており、平和台野球場造成による削平を受けたグランド部分よりも遺存状態はいいものと考えられていたが、それでも南側礎石建物の標高より約60cm程遺構面は低くなっており、第Ⅲ期遺構とされる礎石建物の存在は難しいものと考えられていた。そのような中で鴻臚館・筑紫館関係遺構の調査は進めたが、特筆すべき事は、大規模な事業として南北の岩盤に挟まれた谷が埋立造成（SM1044）によって、人工的な堀（SD1045）とされていたことである。大規模で深い堀の存在により、グランド掘削による鴻臚館関係遺構への影響が、実質的に岩盤と埋立部分が削平されたグランド南側部分にとどまったのは幸いであったというべきであろう。また、前述の大規模遺構の他、南側岩盤域を中心に次の様な遺構を検出することができた。以下、遺構の種類ごとに述べる。

土壙・柱穴・瓦溜まり

スタンド面では岩盤に掘り込まれた廃棄物処理土壙、柱穴や、面的に広がり明確な掘方を持たない瓦溜まり、礎石抜き跡状の瓦溜まりが散在しているが、削平によって上面が削られ、遺存状態は良好でない。また柱穴と考えられる遺構も単独で検出されることが多く、掘立柱建物 SB1070 だけを除いて組織的に把握することができない。グランド面では岩盤の削平で、遺構はほとんど残っていないが、確実な鴻臚館関係遺構として２基の土壙が検出できた。

ＳＫ１０１５（Fig.25、Pl.10－１）

グランド岩盤削平面でわずか10cm程の掘方が検出できた。2.20×0.45mの細長い遺構で、底面は平

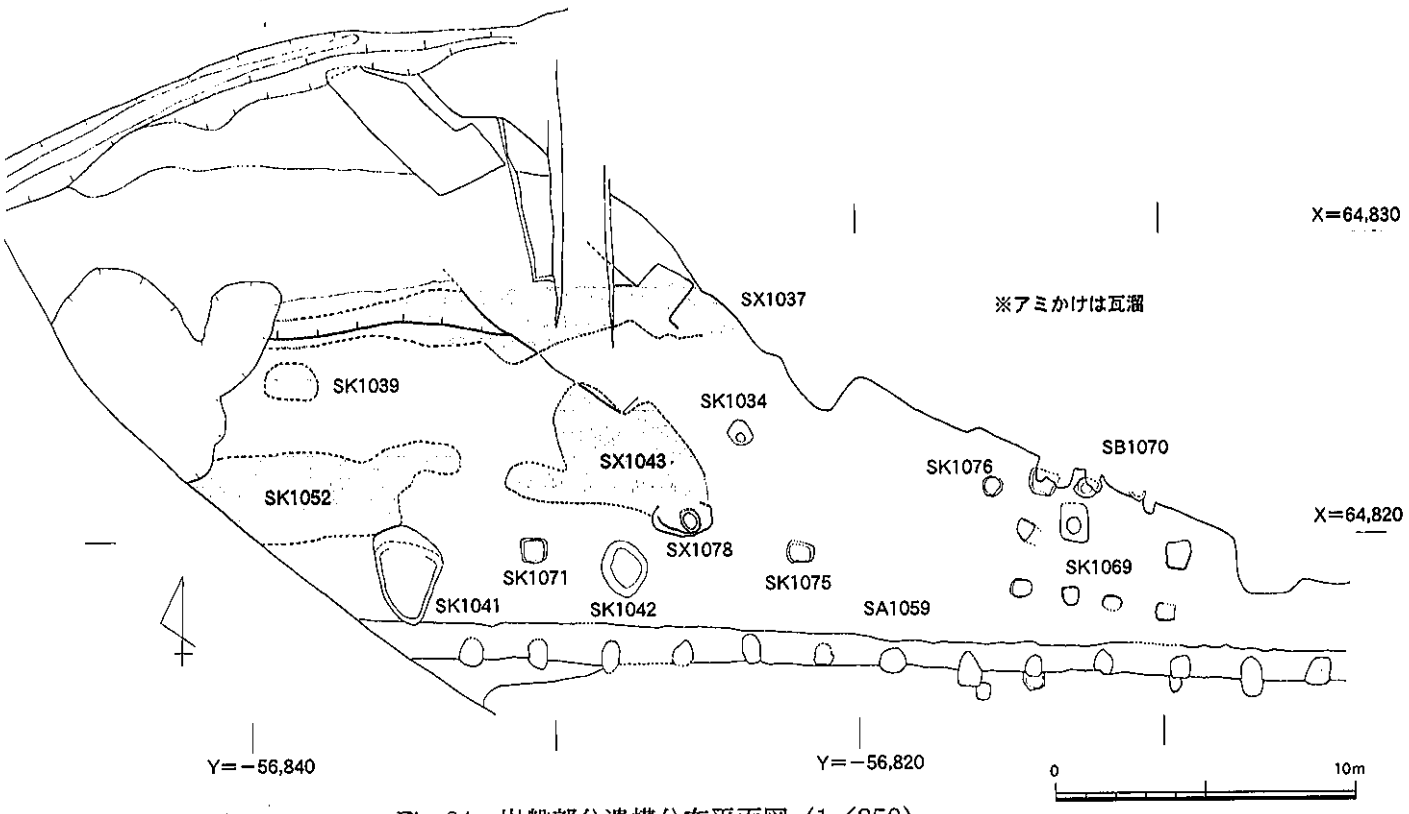


Fig.24　岩盤部分遺構分布平面図（1／250）

坦である。削平されていることを考えれば本来の掘方は１m以上あったものである。遺物はほとんど含まない。東西軸線は第Ⅱ期遺構布掘り軸とほぼ一致していることから、当該期の遺構と考えられる。また、第Ⅲ期建物の南門推定地に対応する北側周辺に当たるが関連遺構が無く、詳細不明である。

ＳＫ１０１６（Fig.25、Pl.10－２）

岩盤削平部で検出されたものである。野球場排水管にも切られ、状況は良くない。2.8×0.6＋αm の細長い掘方で、本来の掘方は１m以上あったものであるが、削平によって辛うじて残る程度である。

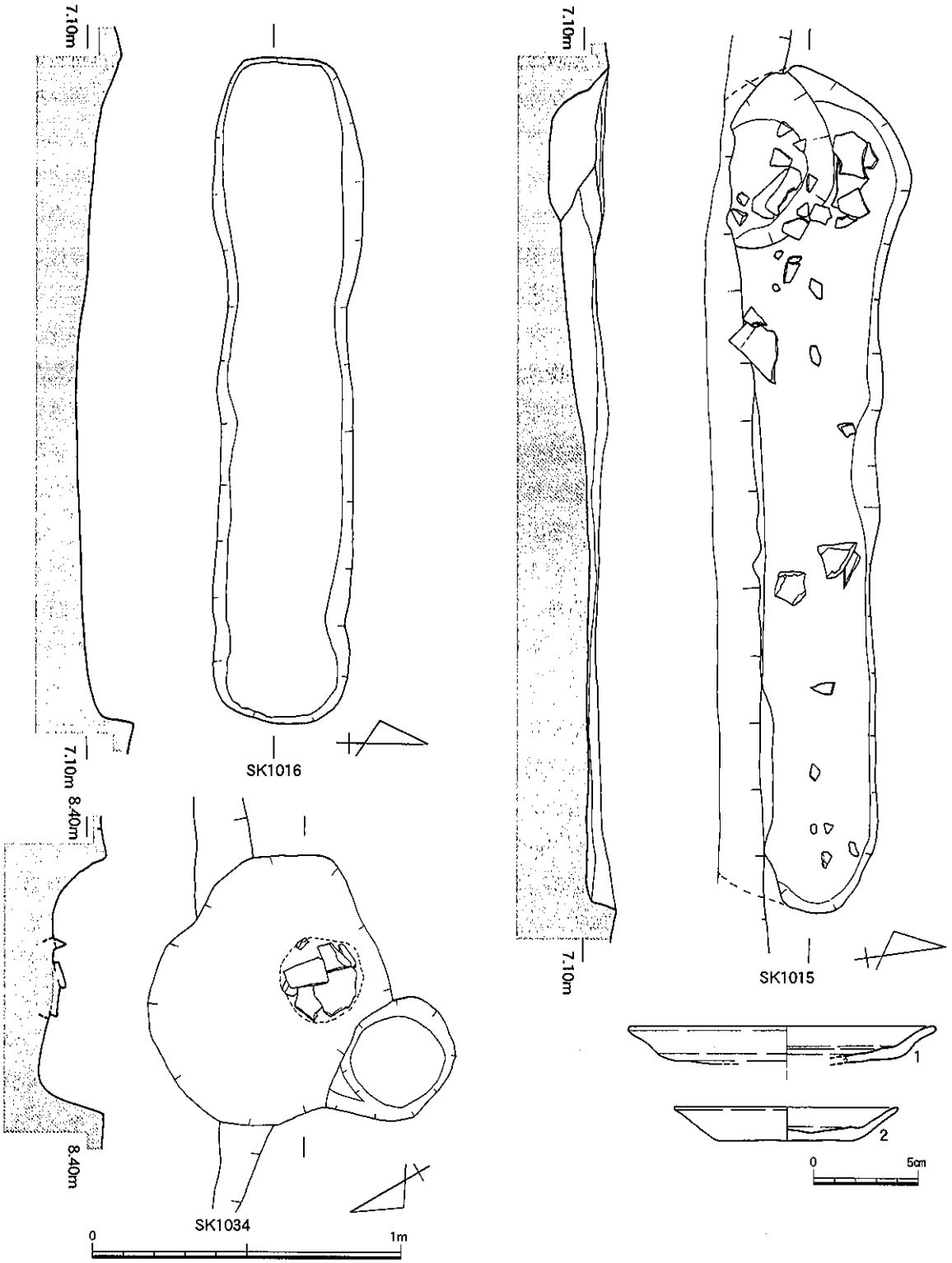


Fig.25　ＳＫ１０１５、１０１６、１０３４実測図（1／20）とＳＫ１０１５出土遺物（1／3）

西側端部には柱穴状の穴がうがたれている。埋土からは瓦小破片、土師器等が出土している。図示した遺物１，２はいずれもヘラ切り離しの土師器皿で、９世紀代のものである。東西軸線は南側建物群とややずれており、関係は明らかでない。

ＳＫ１０３４（Fig.25、Pl.10-5）

スタンド部分岩盤に掘り込まれた遺構である。野球場バックスクリーン基礎により切られており遺存状態は良くない。75×90cm、深さ20cmの深皿形掘方の底に径25cm程の柱穴状の浅い掘り込みがある。底面には、平たい礫と瓦破片が敷かれており、礎板と思われる。周辺柱穴状遺構との関連性は不明である。

ＳＫ１０４１（Fig.26～28、Pl.10-3・4）

岩盤を掘り込んだ3.4×2.1m、深さ30cmの不定形をした廃棄物処理土壙である。連隊建物基礎、戦後側溝によって切られているが、全体的には遺存状態はいい。覆土の最下層には木炭、焼土がみられる。遺物はこの層に集中しており、瓦、陶磁器、礫石等とともに、生活残滓である焼けた獣骨や魚骨（タイを含む）、サンショウ、ウリ等の植物種子が出土している。火災等による廃棄土壙ではなく、生活に伴うゴミ廃棄土壙であろう。出土遺物には興味深いものが多い。以下図示したものについて述べる。１～６は土師器である。１は杯、２は皿、３は大振りの杯で、いずれもヘラ切り底である。４は高台は剥離して無いものの、本来は高台付きの碗と思われる。外底部にのみ煤が付着し、剥落がみられる。煮沸用に転用されたものであろう。５はバチ形の高台が外方に開く碗である。６は同様の碗であるが、５ほど高台の開きが極端ではない。７、８は同形同大の青白磁小杯である。器壁は最大厚でも２㎜という薄胎で、非常に軽量である。釉は全面に薄くかけられ、二次的被熱によりややくすんでいる。青味はほとんどないが器形としては青白磁の範疇に含めるべきであろう。なお、７，８は接合面がないため別個体として扱っているが、同一個体の可能性もある。９は青白磁碗である。全体に薄胎で、淡い青みを帯びた青白釉が内面全面と外面体部下半まで施釉される。高台は断面台形の削り出し輪高台であるが、畳付きは外側を斜めにけずっている。体はやや丸みを持ちながら、口縁端部は外方に開き、口唇部には６カ所の刻みを入れ輪花となす。その直下には外方からの押圧を加え瓜割形の体とする。高台内には鉄錆様の窯道具痕跡がある。10は大型の白磁合子の蓋で、極めて珍貴な器形である。天井部分はやや丸みを持ち、肩から下は直となる。頂部には貼付による圏状の高まりを造り、形式的な撮みとしている。胎土はやや軟質だが精良で、体は厚めである。７，８に似た釉が外面にのみ薄く施釉され、二次的被熱によるものか釉下に黒色の斑が生じている。身との接合面は丁寧に研磨されている。11～26は越州窯系青磁で

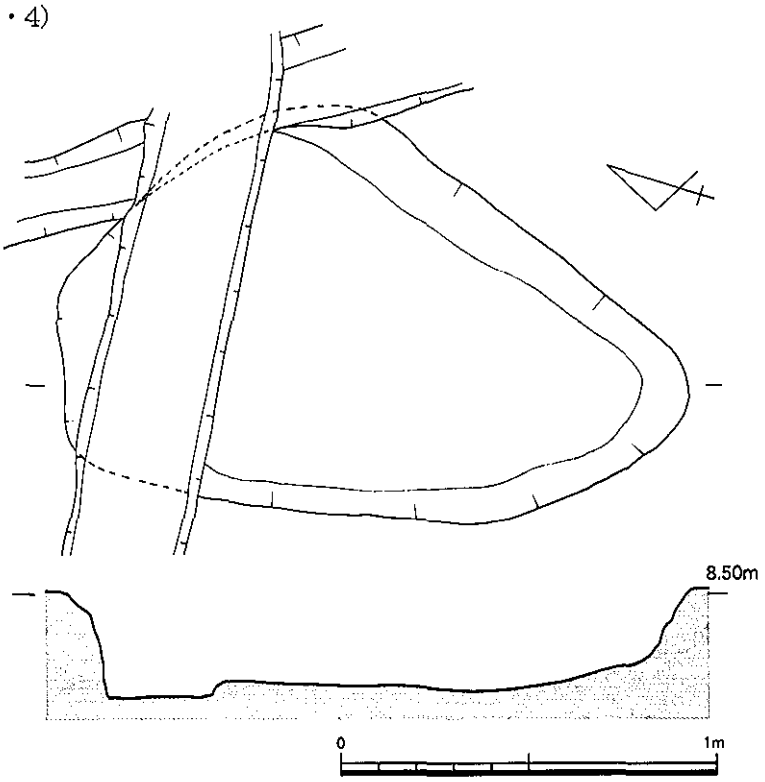


Fig.26　ＳＫ１０４１実測図（1/20）

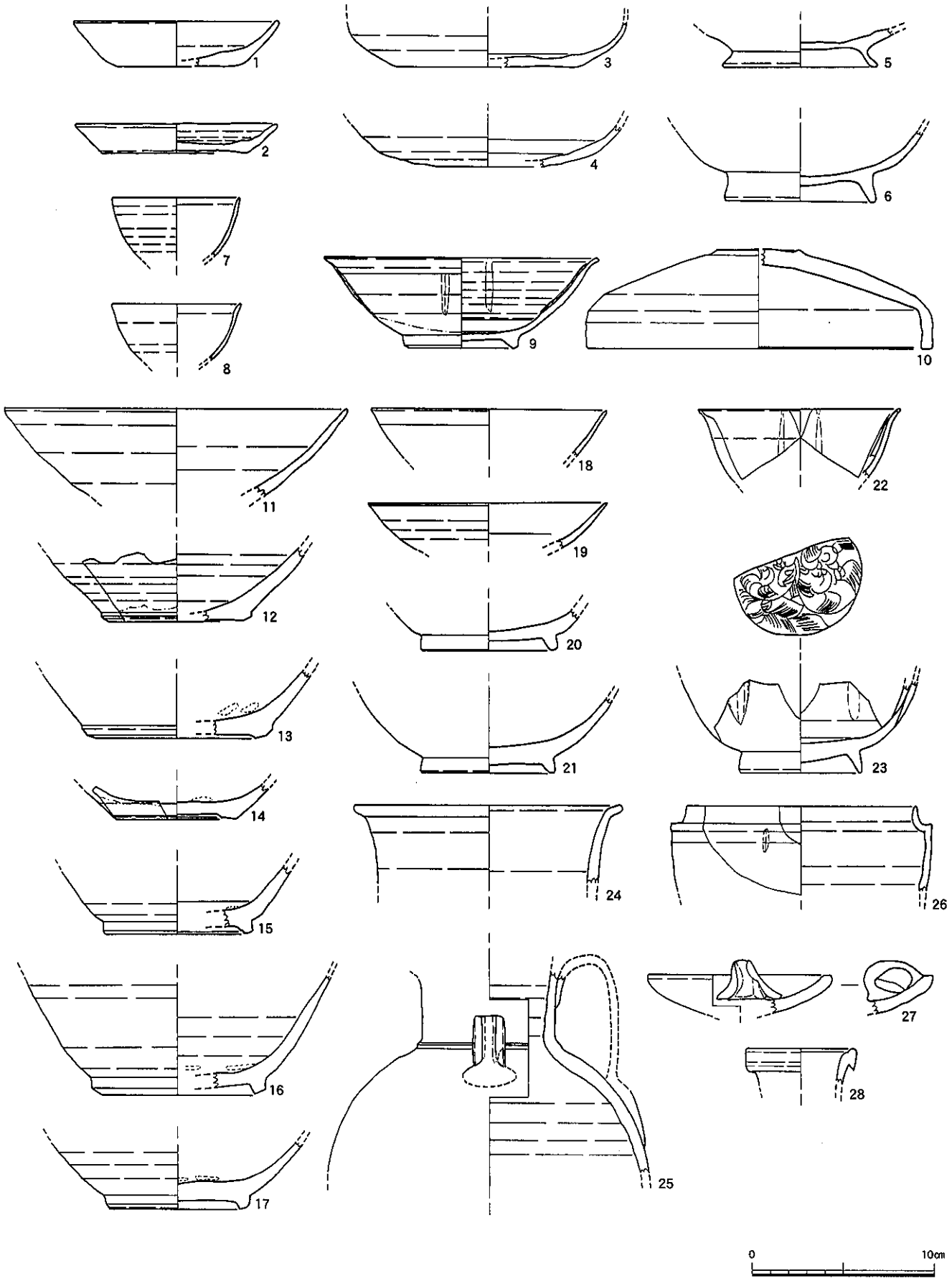


Fig.27　ＳＫ１０４１出土遺物（１）(1/3)

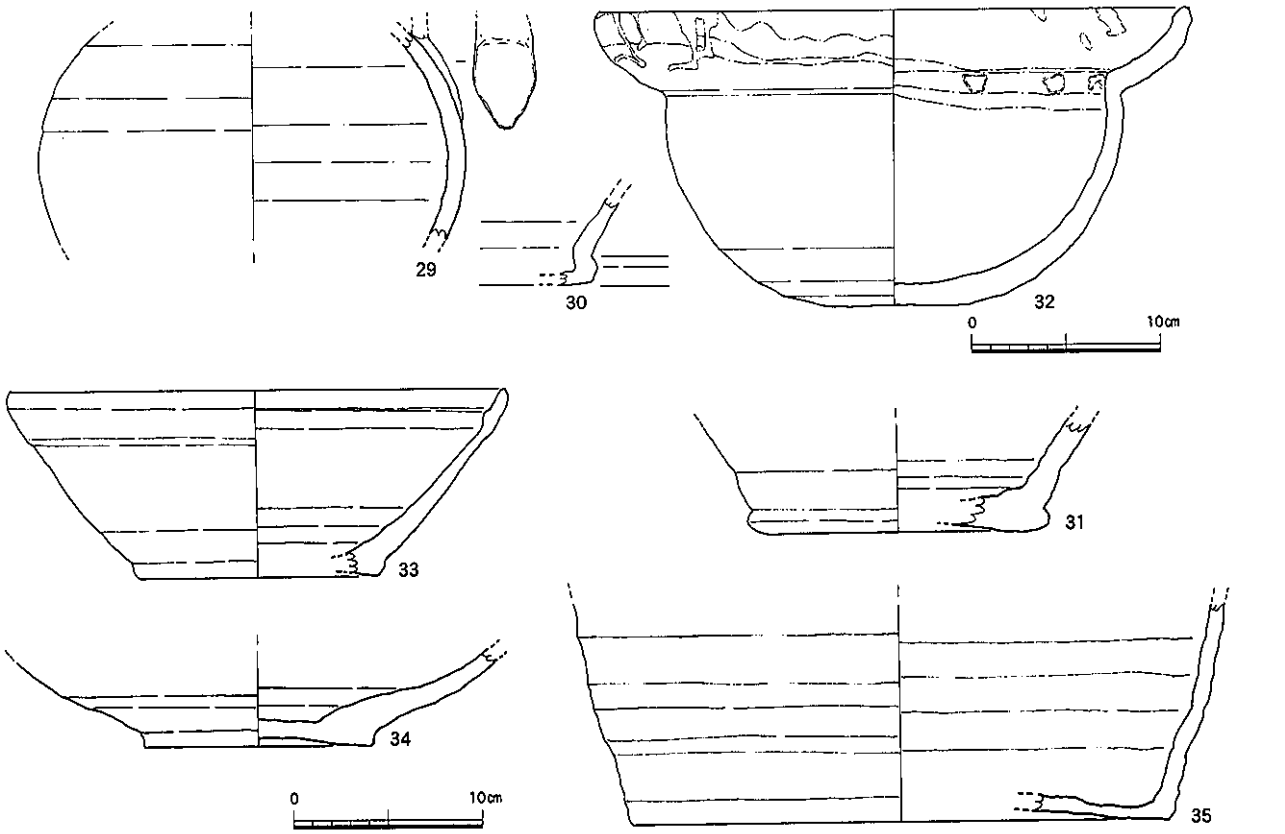


Fig.28　ＳＫ１０４１出土遺物（２）（1／3，32･34は1／4）

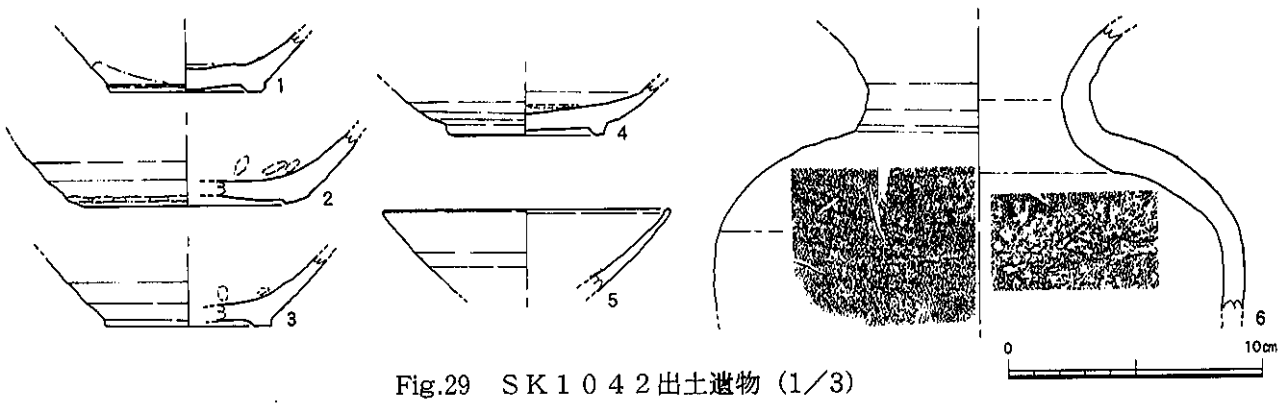


Fig.29　ＳＫ１０４２出土遺物（1／3）

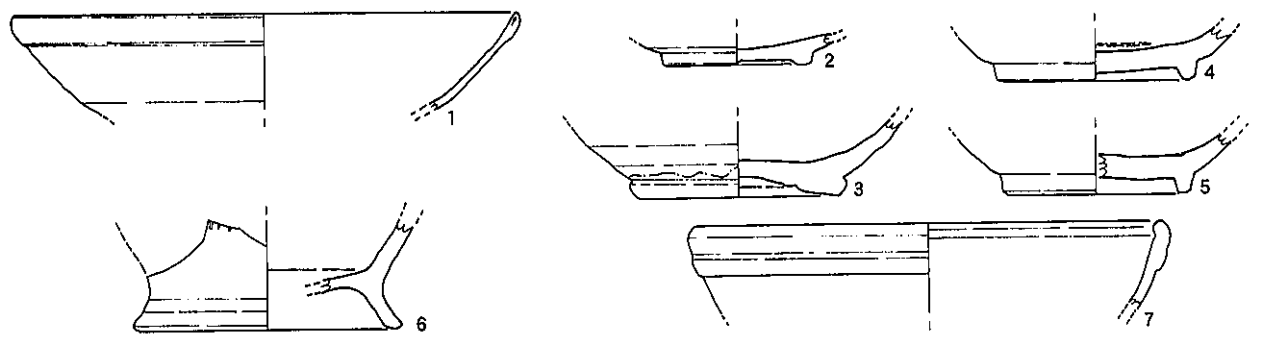
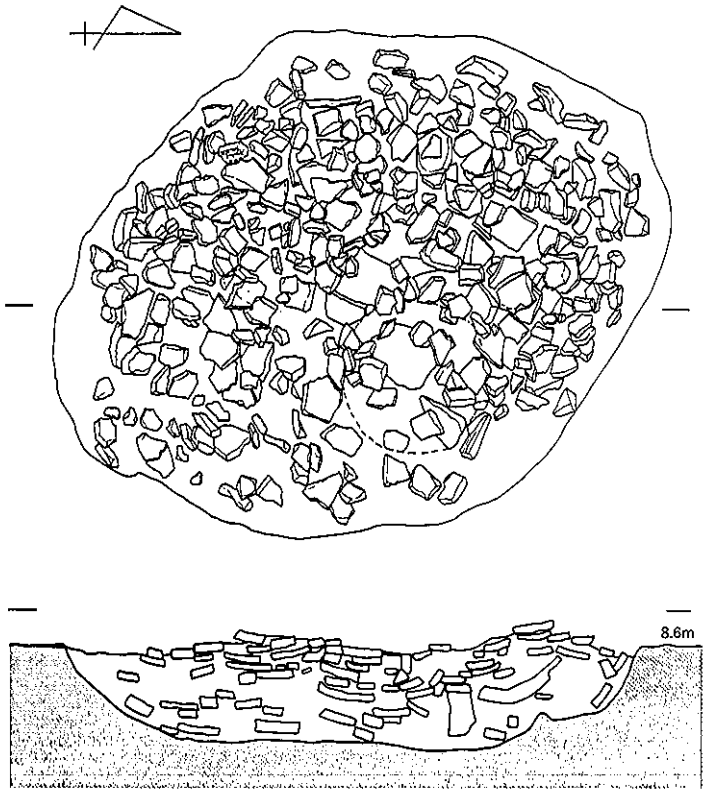


Fig.30　ＳＫ１０６９出土遺物（1／3）



ＳＫ１０４２　瓦出土状況

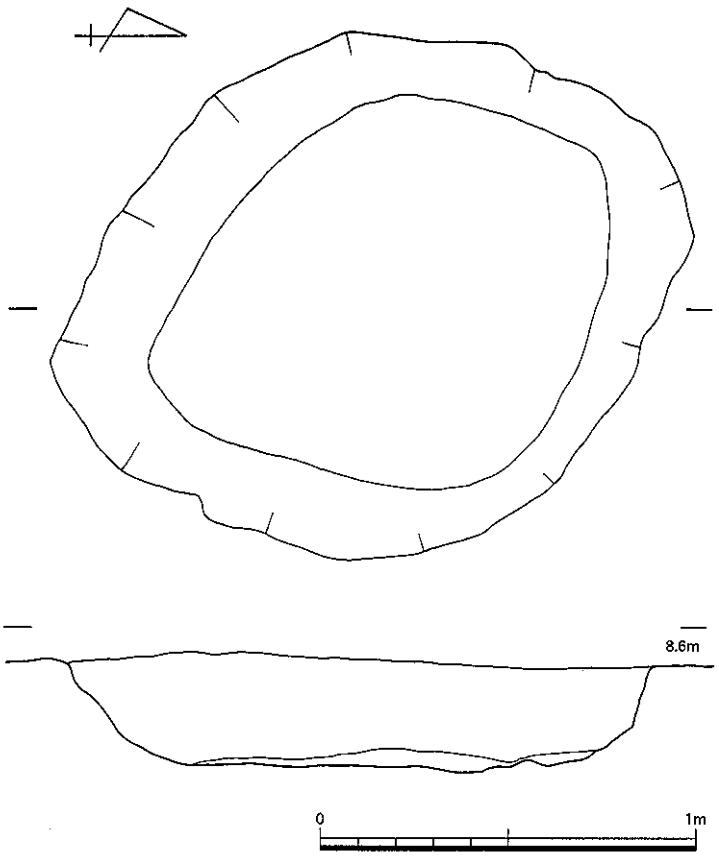


Fig.31　ＳＫ１０４２実測図（1/20）

ある。11～17は削り出し高台を持つ碗である。12は平高台で畳付きを斜めに面取りし、外底無釉。13、14は低い輪高台で外底無釉、畳付きと内底に目跡を持つ。15～17はやや高い高台を持つもので、全面施釉、畳付きのみ釉を掻き取り、畳付きと内底に目跡を残す。18～23はⅢ類精製品の碗である。畳付きを除き全面施釉され、内底に目跡はない。22は体部に縦の筋目を押しつけ輪花とする。23も同じく輪花をなし、内底には精緻な線彫りで花卉文を描く。高台は細く高く、内面に目跡を残す。24は粗製の水注の口縁部である。25は緑褐釉を施した水注で、把手と耳周辺の釉溜まりは澱青釉風の青味を持つ。内面は頸部下まで釉垂れがみられる。胎土は磁灶窯系陶器に似た白粒を含む陶質で灰色、焼成は堅緻であるが火膨れがみられる。26は蓋付き罐の身である。陶質薄胎で25の胎土に似る。青磁釉がかかるが受け部分のみ釉をふき取る。胴の上端に小さな筋目を押しつけ瓜割状にしている。27は胎土の粗い褐釉陶器灯盞である。外底露胎である。28は黒褐釉陶器壺である。29～34は共通の胎土を持つ陶器である。褐～暗灰色で長石や白、黒粒が多く混じる粗い胎土で、磁灶窯系陶器に似る。29～31は無釉の盤口水注の胴部、底部である。32は極めて特異な器形をした口径48cm、器高25cmの大型の鉢である。33、34のこね鉢と泉州磁灶窯で代表される黄釉鉄絵盤との中間的な器形を持つ。胴は球形に膨らみ、斜め上方に伸びる幅広の鍔を持つ。外底脇はヘラ削りして、平高台とする。外面は露胎であるが口縁直下には化粧土と釉の

垂れがみられる。内面は化粧土を施した後、黒みを帯びた緑褐釉がかけられ、内面屈折部の上下に鉄奨が帯状にかけられ、屈折部には大きな目跡が付着している。35は高麗の黒色陶器甕である。この他図化してないがＸＩ類白磁も存在する。遺構の年代は11世紀前半から半ばまでに求められよう。

本遺構は北宋前半期の一括遺物として重要な資料価値を持つものであろう。当該期の遺構としては越州窯系青磁Ⅲ類と白磁ＸＩ類との共伴が、既に昭和62年度確認調査で廃棄物処理遺構 SK01 出土遺物で確認されているが、本遺構ではさらに青白磁、福建省南部の陶器の共伴が明らかになった。博多遺跡群出土遺物との類似性が認められる。このことは鴻臚館の終焉から中世博多への貿易拠点の移動の流れと、中国側の貿易体制の変化をみる上で重要であろう。

ＳＫ１０４２（Fig.31、Pl.11-1）

1.75×1.35m、現存深さ0.3mの不整長円形に岩盤を掘り込んだ土壙である。大量の鴻臚館関係瓦と礫がぎっしりと詰まっている。上面に連隊建物礎石基礎が重なるが連隊建物とは直接関連はないものと思われる。南側第Ⅲ期建物 SB32 の東側礎石列の延長線上にあり礎石抜き跡の可能性もあるが、レベル的にはやや低く、また単独検出のため礎石抜き跡か廃棄物処理土壙か断定はできない。図示した遺物について述べる。１～５は越州窯系青磁碗で、１は削り出し輪高台で外底露胎、２、３は削り出し輪高台で全面施釉、畳付きの釉を掻き取る。４は幅の狭い削り出し輪高台の精製品で、内外面施釉する。畳付きのみ釉を掻き取る。内底には沈圏線があり、内側に細長い目跡が６個のこる。５は浅い小振りの碗または皿である。口縁端部が薄く、内側に屈折する。内底に目跡が残る。６は須恵器壺である。

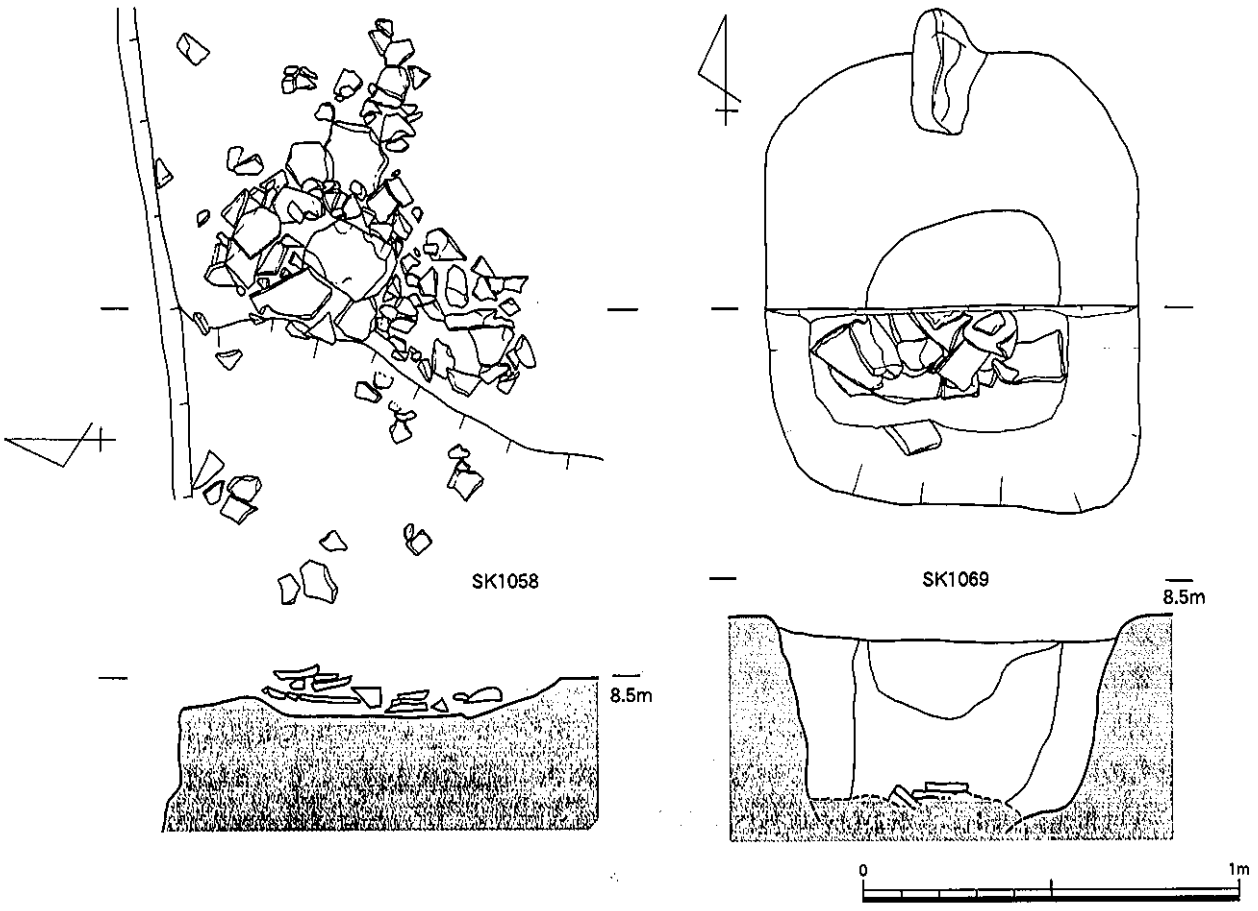
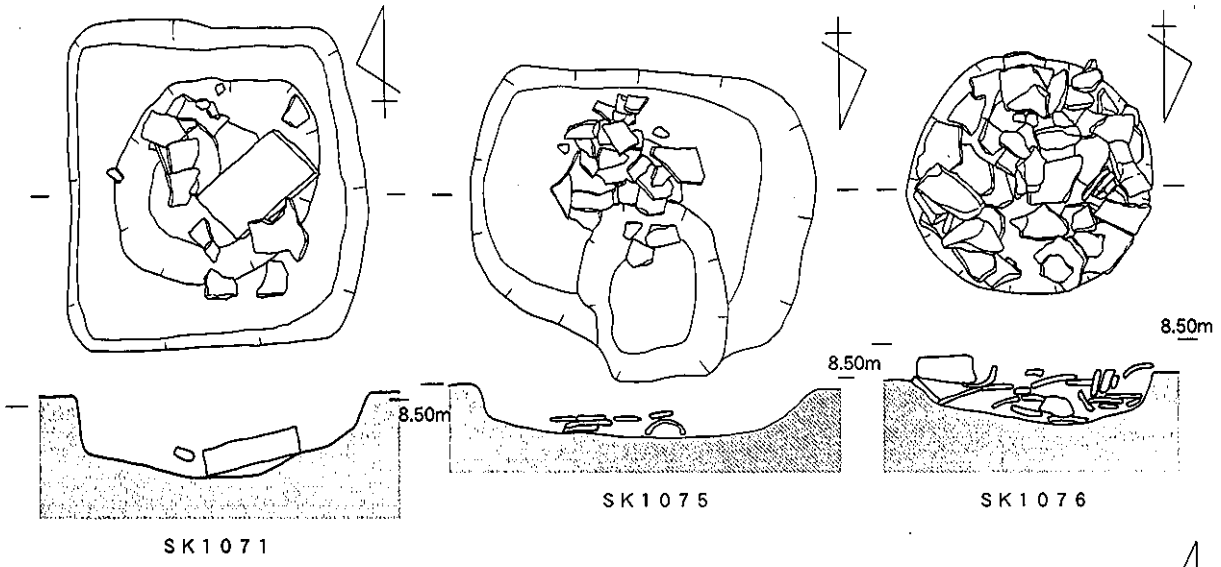


Fig.32　ＳＫ１０５８、１０６９実測図（1/20）



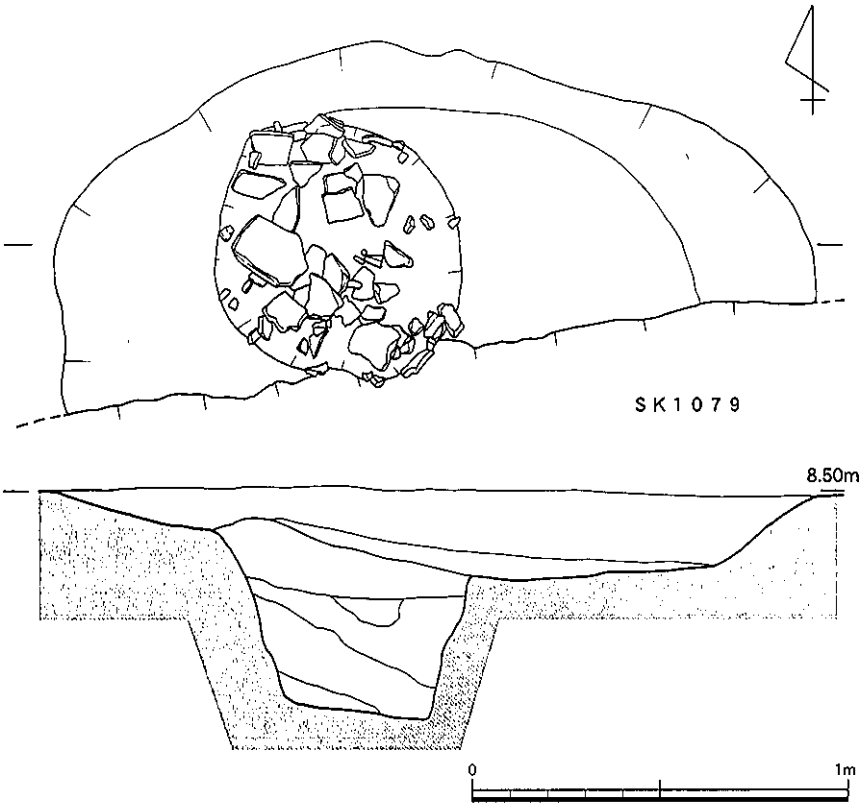


Fig.33　ＳＫ１０７１、１０７５、１０７６、１０７９実測図（1/20）

ＳＫ１０５８（Fig.32）

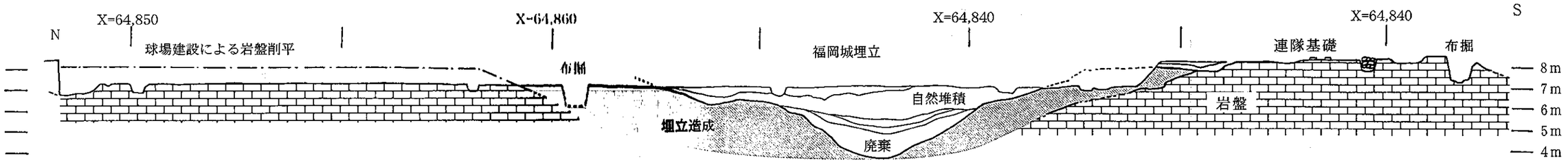
明確な掘方はなく浅い岩盤の窪みに鴻臚館関係瓦と大礫が炭化物混じりの風化粘土とともに堆積しているものである。瓦はさほど密でなく、二次的に被熱している。時期は明確にしがたい。連隊建物布掘り基礎、バックスクリーン基礎に切られているが、連隊建物建設時あるいは福岡城に関する整地の可能性もある。

ＳＫ１０６９（Fig.32、Pl.11-2）

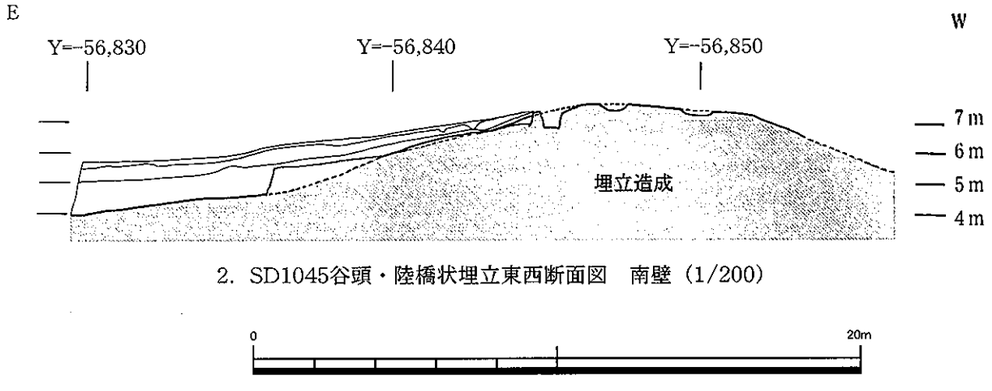
1.2×0.98m、深さ0.53mの隅丸長方形の明確なプランを持つ。岩盤風化岩を掘り抜いたものである。検出時から瓦を埋め込んだ径50cmの柱抜き跡が確認できた。半切して掘り下げた結果、ほぼ掘方いっぱいに礫、瓦を敷いた状況が見られた。鴻臚館式軒丸瓦１点を含む。根固めとしたものであろう。抜き跡周囲には岩盤由来の風化礫を堅く突き固めている。明確な柱穴であるが関連すると思われるものはみられない。削平されているグランド側に広がっていたものであろうか。瓦以外の出土遺物は小破片で、図示したものは次のようである。１、２がＸⅠ類の白磁碗で、１は玉縁を持つ。３～５は越州窯系青磁碗で、３は粗製品、４，５が畳付き以外に施釉する精製品である。６は軟質の須恵器壺でバチ形に開く高い高台を持つ。７は胎土の粗い中国製陶器こね鉢である。全体にＸⅠ類の白磁が目立つ。

ＳＫ１０７１（Fig.33、Pl.11-3）

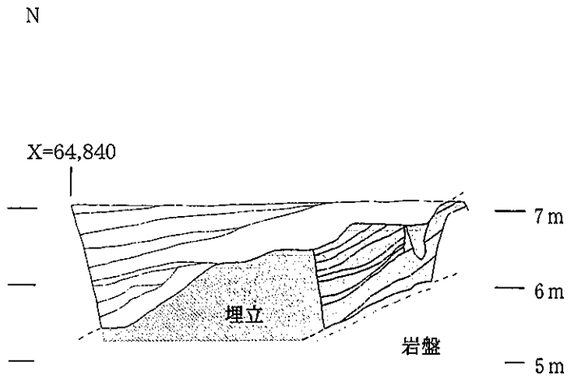
0.9×0.8m、深さ25cmの長方形の明確な掘方が検出できた。風化岩盤を一段掘り込み、中央部を皿



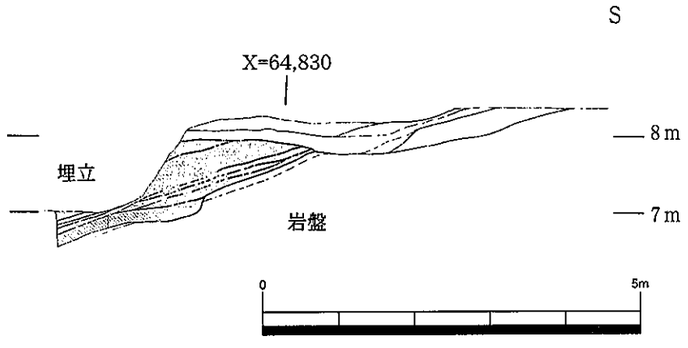
1．平成11・12年度調査区南北断面図　東壁 Y=−56,828ライン（1/200）



2. SD1045谷頭・陸橋状埋立東西断面図　南壁（1/200）



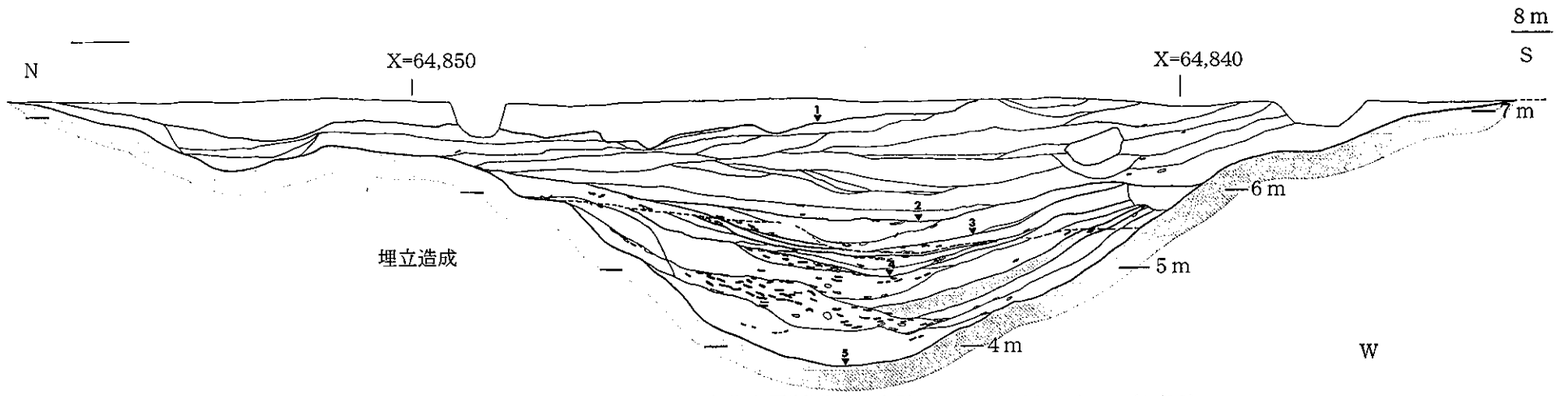
3. X=64,840付近土層断面　東壁



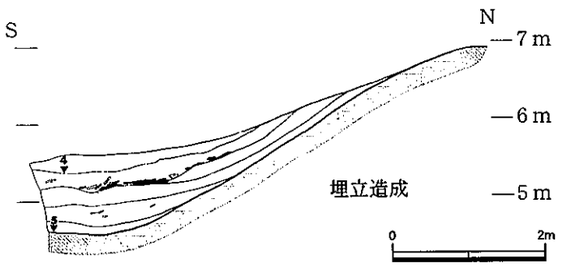
4. X=64,830付近土層断面　東壁

Y=−56,828ライン(1/80)

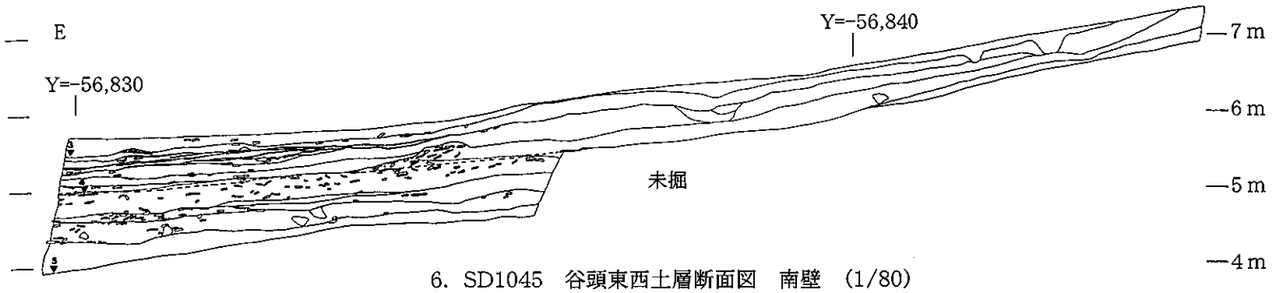
Y=−56,822ライン(1/80)



5. SD1045　南北土層断面図　東壁　Y=−56,828ライン　(1/80)



7. SD1045　谷頭南北土層断面図　西壁　Y=−56,828ライン(1/80)



6. SD1045　谷頭東西土層断面図　南壁　(1/80)

SD1045の層位
1層　福岡城築城時埋立（SM1047）
2層　自然堆積（微細な遺物を含む。最上面が瓦廃棄池状遺構-SG1046）
3層　自然堆積　（瓦少量含む。一部粘質シルト堆積）
4層　人為的な瓦廃棄（多量の瓦、焼土・木炭層を含む。～11世紀半ば）
5層　人為的な瓦廃棄（多量の瓦、南斜面に焼土・木炭層堆積。8世紀～）

＊破線は上下層の合成面
＊土層内アミかけ部分は焼土・木炭層

状に窪ませる。検出面で径20cmの柱抜き跡が確認されたが、下面を掘り下げた結果抜き跡の最下面に27×17×７cmの礎の完形品が敷かれていた。周辺に瓦破片も散在する。礎板としたものであろう。

ＳＫ１０７５（Fig.33、Pl.11-4）

0.9×0.7m、深さ15cmの隅丸長方形の、浅いが明確な掘方が確認できた。風化岩盤を皿状に掘り込んでいる。連隊建物中央部のやや南より床面に瓦を平坦に敷き、礎盤としたものであろう。

掘方形状、規模、軸線方向等の類似する SK1071, 1075 の両者をつないだラインは布掘り掘立柱列 SA1059 の東西軸と平行になる。２つの柱穴以外に関連性のある柱穴はないものの、第Ⅱ期、第Ⅲ期建物の軸を意識した施設があったのかもしれない。

ＳＫ１０７６（Fig.33、Pl.11-5）

径0.6mのほぼ円形プランに礫、瓦が敷き込まれているものである。下面に深さ13cmの浅い皿状の掘方が確認できた。岩盤風化岩に掘り込む。礎石抜き跡の形状にも似るが、周辺に類似遺構はなく、明確にはしがたい。

ＳＫ１０７９（Fig.33、Pl.11-6）

連隊建物基礎に一部切られている。連隊建物建設時の整地と考えられる瓦溜まり SK1043 の下面で検出された。浅い皿状の窪みの下に、岩盤を掘り込んだ岩盤を掘り込んだ径70cmの円形プランの掘方で現存深さは50cmである。最上面には多量の瓦が堆積する。下面堆積土には岩盤由来の風化礫、瓦を少量含む茶褐色粘土がある。柱穴と思われるが他の遺構との関連性は不明である。

掘立柱建物・塀遺構

昭和62年度の平和台野球場外野スタンドでの確認調査では、布掘り掘立柱列３本分が検出されており、鴻臚館遺構確認の契機となった。この布掘りは野球場南側で実施した第Ⅰ期調査で確認された、東側に八脚門持つ第Ⅱ期建物区画（東西74.07m、南北56.26m）の北側区画に想定されていた。平成11年度の調査ではこの西側延長部分が確認できるものと考えられた。

ＳＡ１０５９（Fig.35、Pl.12･13）

連隊建物基礎、野球場スコアボード基礎によって部分的に壊されているが、ほぼ想定通りに概ね良好に検出された。昭和62年度確認点から新たに長さ約31m、12間分が検出できた。既調査分を加えると約35mとなる。東西方位は真北からN-88°-E偏し、南側東西布掘りと一致し平行となる。第Ⅱ期建物区画の北側区画に想定されていたラインが、これによって確定できたものといえよう。西側は外野スタンド擁壁基礎下に伸びに北西隅角は確認できないが、想定からすると擁壁基礎下面付近で南側に折れ曲がるものと考えられる。上面はある程度の削平を受けているが、検出面標高は約8.50mである。岩盤風化頁岩を幅１m前後、深さ１～1.2mの溝状に掘り抜き、底面にさら深さ15cm程の柱穴を設置している。柱間は12間の平均で2.33mを測る。柱設置後、掘方は岩盤風化岩砕礫で数cm単位の厚さで版築されている。柱は、柱抜き穴の状況からすべて内側（南側）に倒し抜き取っている。版築土、柱抜き穴から微量ではあるが瓦小破片が出土している。

ＳＢ１０７０（Fig.35、Pl.12-4）

唯一確認できた梁行２間、桁行３間の小規模な掘立柱建物である。連隊建物基礎、野球場基礎に切られ遺存状態は良くない。また上面は削平され、大半の柱穴がわずか15～数cmの深さで確認されたに過ぎない。北側柱穴の一部はグランド造成時に削平され、断面に痕跡だけを残すものもある。西側梁行柱間は1.85m、南側桁行柱間は西から1.65m、1.45m、1.70mと不揃いで、東西軸はN-80°-E をとり、第Ⅰ～Ⅲ期建物のいずれの軸線とも異なる。鴻臚館関連遺構と考えるが、規模、規格性から作業施設等の臨時的な施設であろうか。

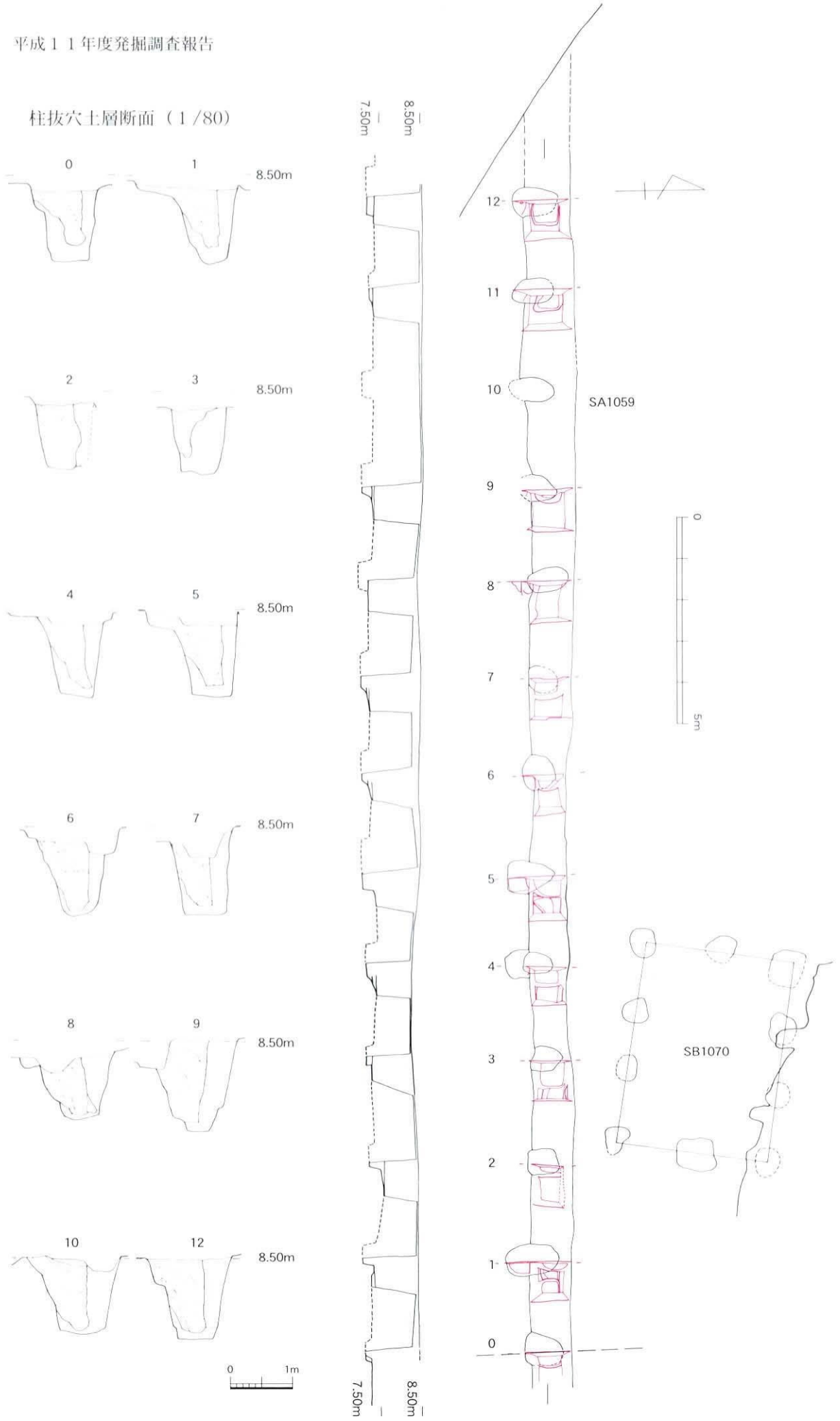


Fig.35　ＳＡ１０５９、ＳＢ１０７０実測図（１／125）

谷・埋立事業・堀・池

平成11年度の調査で特筆すべき事は大規模な造成工事が明らかになったことである。昭和62年度の外野スタンド部分確認調査の際、確認トレンチの土層として鴻臚館に関わる造成土が指摘されており、平成４年度の第８、９次調査においても整地跡が確認されている。特に第９次調査の東南部においては風化頁岩からなる自然丘陵の斜面に、大規模に土盛り整地していることが確認され、その時期は丘陵に鴻臚館施設が設置された時期と重なるものと考えられた。今回の調査ではこの埋立整地の面的な広がりが確認できたことと、それが周辺土地利用上極めて大きな意味を持っていたという点で重要である。

ＳＭ１０４４（Fig.15、Pl.14-2）

平和台野球場跡地内で検出された埋立造成事業遺構を包括する。この事業によって陸橋状の築堤があり、堀 SD1045 が造られ、池状遺構 SG1054 が造られている。

平和台野球場周辺のボーリング調査および平成10年度の野球場跡地の試掘調査の結果から、周辺自然地形は南側丘陵と北側丘陵と分かれており、両者間には西から東へ開析する自然地形の谷の存在が明らかになっていた。造成は南北丘陵を削平して平坦面を造り、その岩盤由来の風化頁岩細礫と風化粘土で谷を埋め平坦面を南北に幾分拡幅しているものである。谷の中央部は埋め立てず、堀としての機能を持たせている。南側斜面の土層（Fig.34-3･4、Pl.15-3）観察によると、埋立の方法はおよそ次のようになる。岩盤平坦面より一段低いレベルで谷の上半のみを埋立て平坦面を造る。この段階で土の滑り落ちを止めるためであろうか、岩盤を削り傾斜を緩やかにしている箇所もある。次ぎに谷の中位に犬走り状の平坦面を造り底部まで谷斜面に沿って埋めている。谷底は一度掘り下げ、堀の深さを確保している。埋め土には福岡城築城時の池埋立 SM1047 のような風化礫の大きな破片は用いず、崩落防止のためであろうか細かく破砕した風化礫と風化粘土を用いている。上部平坦面は岩盤側レベルより一段低く、また岩盤との境に溝が造られていることから南側建物の北側控えスペース、通路等の機能があったものと思われる。また、下段の犬走り状平坦面にも一部側溝がみられる。通路としての機能もあったものと思われる。この下段の犬走り状平坦面は北側斜面にもみられる。

さらにこの埋立は自然地形の谷頭部分を堰き止め、南北を繋ぐような形でも行われている（Fig.15、Pl.14-2）。西側に池 SG1054 を形成していることから築堤でもあり、南北を繋ぐ通路的機能も果たしていたものと思われ、陸橋状の埋立ともいえる。この築堤・陸橋状埋立は上部埋立平坦面とは段差があり低く、面としては下段の犬走り状平坦面につながってゆく。馬の背状の形態をし、Fig.34-2のように底面は幅広く、上部平坦面でも 7.5ｍの幅を持つ。南北の平坦面間の距離からすると16.5ｍで規模の大きな埋立事業である。

この埋立事業の時期については、平成12年度調査で第Ⅱ期建物布掘りが埋立後に掘り込まれていることが確認され、遅くとも第Ⅱ期建物以前には実施されていたことが明らかになったが、第Ⅰ期建物との前後関係は現段階では不明である。

ＳＸ１０７８（Fig.36、Pl.7）

築堤・陸橋状埋立の平坦面東端と谷頭の境に造られた特殊な瓦敷き遺構である。埋立当初ではなく、埋立土が徐々に崩壊し、堀が幾分埋まった段階で造られている。2.7×0.6ｍのほぼ長方形に、比較的大きさの似通った瓦破片をほぼ３列に、南を上、北を下にして重ねながら整然と並べたものである。使用されている瓦は、丸瓦、平瓦がともにあるが、叩き文様は格子目が大半をしめる。鴻臚館式軒丸瓦も含まれている。土留めの役割があったものであろうか。通路としての機能が果たされていた段階のものであり、鴻臚館遺構の後半期のものであろう。この遺構は型取りを行い、現状のまま埋め戻し

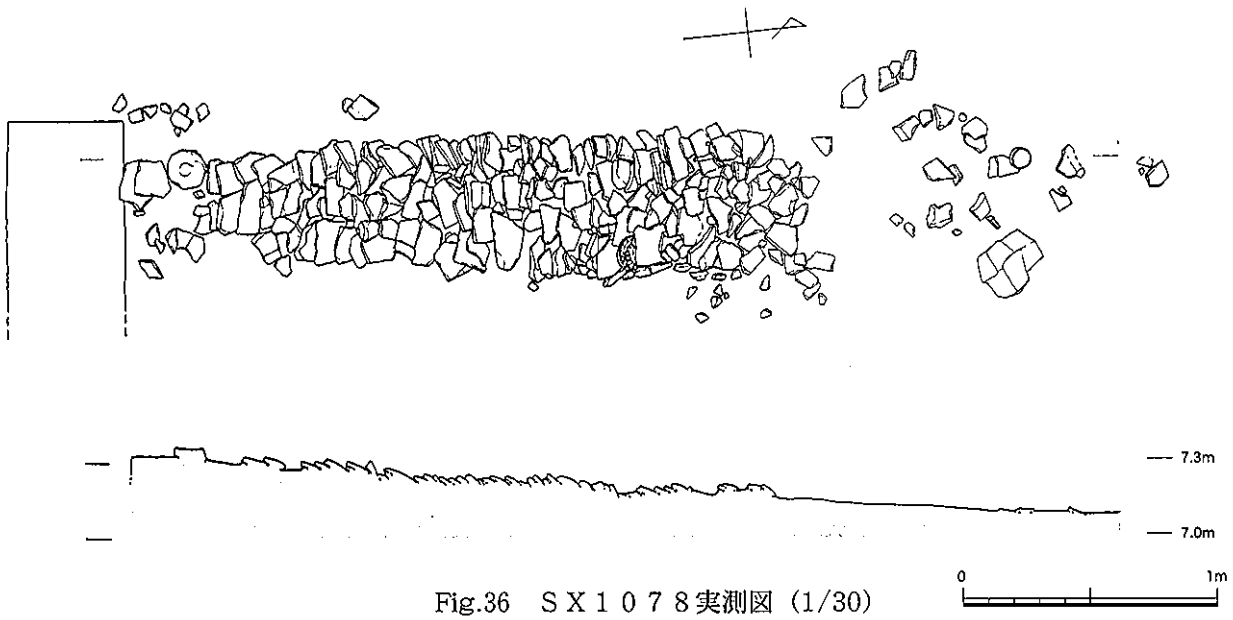


Fig.36　ＳＸ１０７８実測図（1/30）

保存する。

ＳＤ１０４５（Fig.34、Pl.14～16）

前述した谷の埋立事業によって造られた堀である。南北両斜面ともに中間に平坦面を持ち、二段堀の構造を持つ。幅は南北上部平坦面間で約22m、下段平坦面間で約10mを測る。深さは現グランド面から3.45m、上部埋立平坦面からの比高は約4.2mを測る。弥生時代環壕ほど極端ではないがＶ字に近い断面形状を持つ。規模の大きな遺構である。遺構の深さと遺物量の多さから、平成12年度まで継続して調査を行った。しかしながら、全体の一部を調査したに過ぎない。ここでは平成12年度で得られた知見を加えながら説明するが、遺物については平成11年度のトレンチ調査で得られたものを中心に紹介し、以外の資料については次回の報告書に譲りたい。

調査部分では堀底は一定の深さを確保するために岩盤を掘り下げている。底面は西側から東に向け傾斜を持ち次第に深くなっていく。東側では岩盤の掘り下げはないものと思われる。

堀は築造後次第に堆積し浅くなっていく。この埋没過程に筑紫館から福岡城に至る歴史が凝縮されている。土層図（Fig.34-5）から流れを追ってみる。堆積層序は大きく５層に分けられる。下層から順に述べる。５層－堀は建設当初から徐々に自然堆積が始まり、その後北から大量の瓦が廃棄される。瓦破片は大きなものが多い。その後火災によると思われる焼土、木炭が南側から廃棄される。さらに自然堆積と小規模な瓦廃棄を繰り返す。この中に中国製陶磁器はほとんど含まれていない。８世紀前半から堆積は始まっているものと思われる。４層－皿状に窪んだ中に南北両側から大量の瓦が廃棄されている。最上面には焼土・木炭層が数枚の互層となって堆積している。４層の下層から中国製陶磁器、イスラム陶器が出土し始める。最上面の焼土層からは白磁ＸＩ類がまとまって出土しており、この層の最上面は11世紀半ばに位置付けられる。この段階で堀は中段犬走り状平坦面まで堆積し、底面は浅い皿状となる。この層以上は人為的な瓦の廃棄等はみられず、鴻臚館での積極的な活動は４層の最上面までということになる。すなわち鴻臚館の廃絶時期は11世紀半ばに求められる。３層－瓦破片、陶磁器等を少量含むが、鴻臚館廃絶後の自然堆積によるものである。一部には粘質シルトが堆積し水が溜まる状態にもなっていたと思われる。２層－微細な瓦、陶磁器破片を含む自然堆積である。徐々に堆積が進み、最上層は大量の瓦を廃棄した中世末の池状遺構 SG1046 となる。１層－福岡城築城時

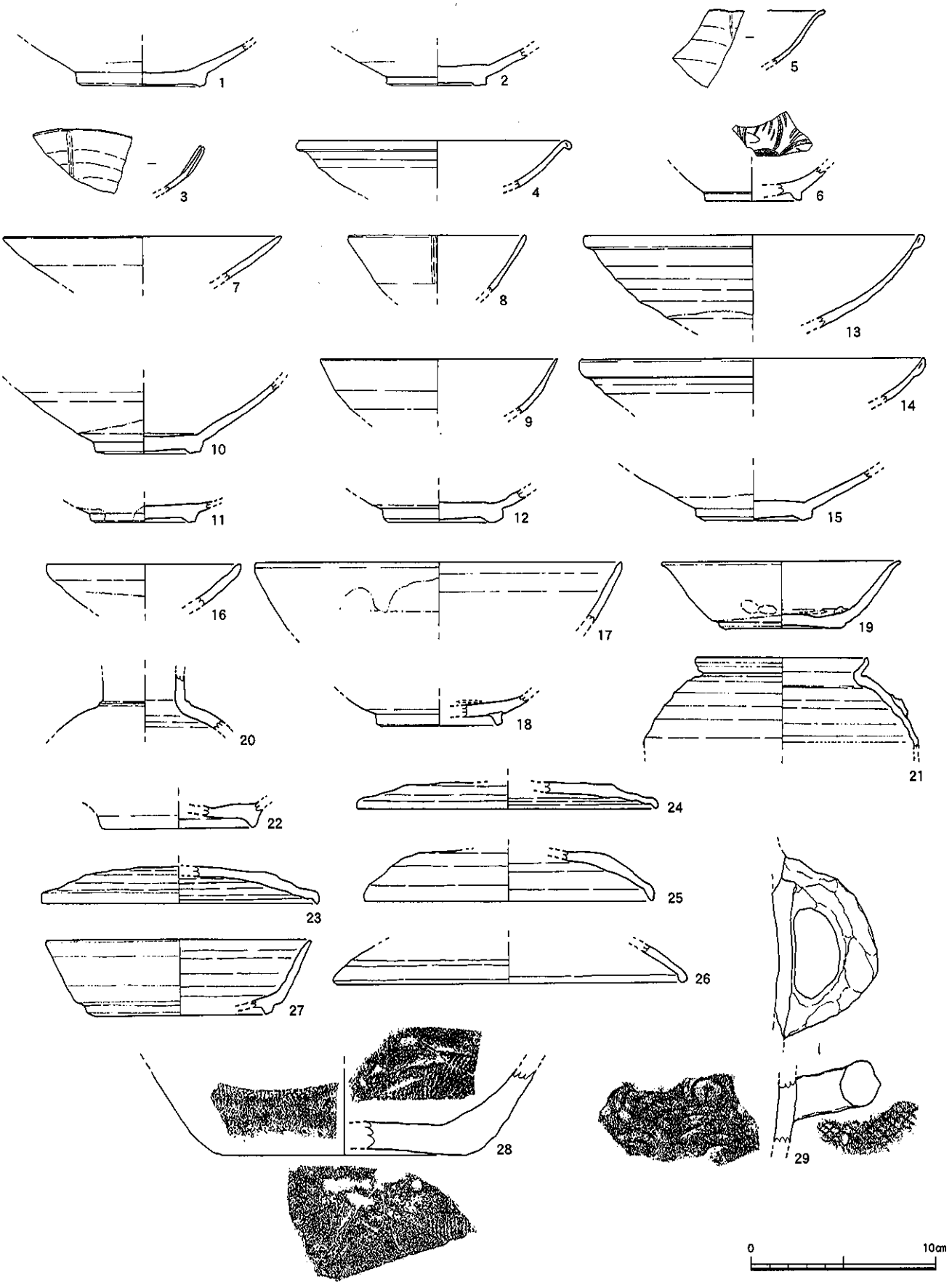


Fig.37　ＳＤ１０４５出土遺物（1）(1／3)

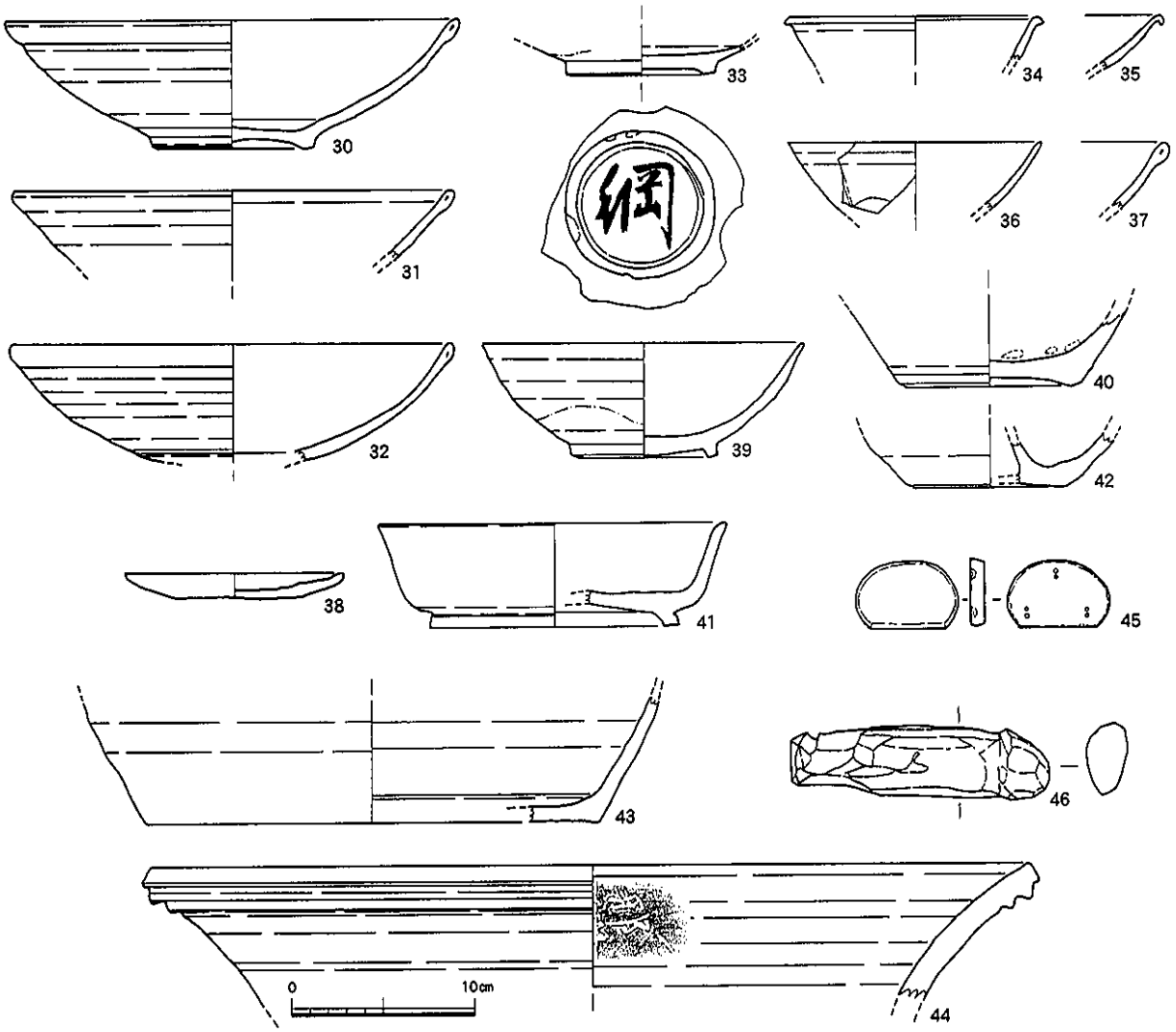


Fig.38　ＳＦ１０４５出土遺物（2）（1／3，43・44は1／4）

における埋立事業である。これによって堀の痕跡は全く地表面からはうかがえない状態となった。

平成12年度も継続調査を行っているため、出土遺物全体については来年度報告書で取り上げることとし、ここでは土層確認トレンチの出土遺物を中心に説明するが、平成12年度調査資料についても一部紹介する。

１～７はトレンチ２層出土遺物である。１～４はＸＩ類白磁碗で、１・２は外底露胎、３は体部に押圧して輪花をなし、４は口縁端を小さく下方に折り曲げるものである。５は青白磁碗で口縁端部を外方に折り輪花をなす。SK1041 出土の青白磁碗９と同形である。６は越州窯系青磁Ⅲ類の碗で内面にヘラ描き花文を持つ。７は越州窯系青磁Ⅲ類の碗である。８～29はトレンチ３層出土遺物である。８～15はＸＩ類白磁碗である。底部はいずれも外底露胎で高台内にハマの痕跡がある。８は押圧により輪花にするもの、９は胎が薄く青白磁に近いもの、13、14は幅広の玉縁をもつものである。16～20は越州窯系青磁で、16・17は粗製品、18は貼付輪高台の碗、19は平底皿、20は精製品の壺の頸部破片で、つなぎ目に段を持ち内外面にオリーブ色の釉がかかるものである。21は薄胎の陶器双耳壺で胎土は磁質に近く、外面と内面中位まで緑褐釉がかかる。22～26は国産で、22が土師器碗、23～26が須恵器杯蓋、27が杯身である。28は新羅陶器甕の底部破片で、内面下位に自然釉がかかる。29は乳白色焼

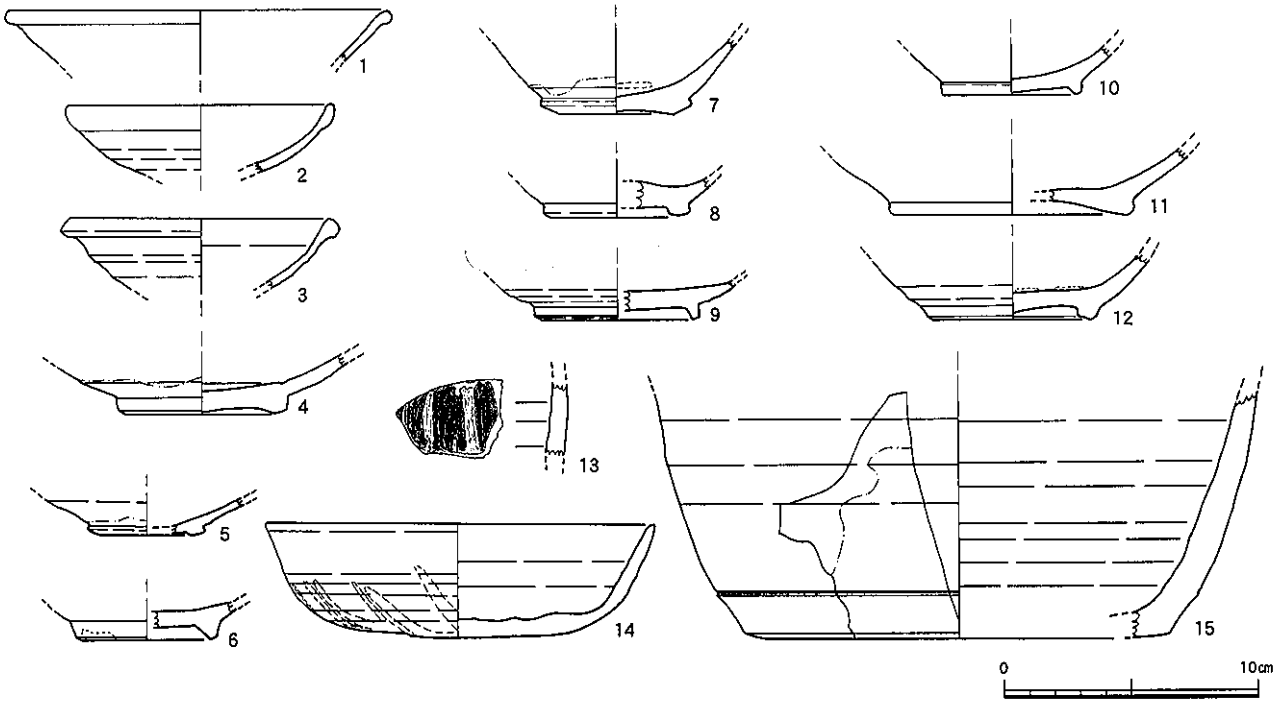


Fig.39　ＳＦ１０５５出土遺物（1／3）

成の軟質甕把手破片である。手捏ねの把手を貼り付ける。体部外面に格子目、内面に青海波の圧痕が残る。国産品であろうか。30～38は鴻臚館の廃絶期を示す４層上部焼土層から出土した（Pl. 16）遺物である。30～37はいずれも白磁ＸＩ類の碗で、外底は露胎である。口縁部は折り返しで幅広の玉縁を持つもの（30～32、37）、端部をわずかに下方に屈折させるもの（34、35）、直ぐに収め輪花をなすもの（36）がある。33の外底高台内には行書体の「綱」銘墨書がみられる。 SG1046 の「呉」銘墨書白磁（Fig.17-10）とともに鴻臚館廃絶直前の状況と中世都市博多の勃興を繋ぐ資料であるといえる。38はヘラ切りの土師器小皿である。39～41は土層確認トレンチⅣ層出土の遺物である。39は越州窯系青磁の輪高台を持つ小碗で、胎土は精良、外面体部下半は露胎である。内面に目跡はない。40は越州窯系青磁平高台の碗で、胎土は精良、全面施釉で畳付きと内底に目跡が残る。41は須恵器杯である。42は４層相当の堀堆積土から出土した褐釉陶器灯盞である。有孔の皿に、灯芯を通す円筒を貼り付けたものである。外底を除き施釉されるが、胎になじまず剥落がひどい。43は土層確認トレンチ４層出土の大型の中国製陶器鉢である。胎土は精良で磁質に近い。内面にのみ緑褐釉が施釉されるが、剥落がひどい。44は５層出土の須恵器甕の口縁部破片で、内面に「那賀ヵ」のヘラ書き文字がある。「那珂」の意で生産地を示すものであろう。45は４層下層から出土した丸鞆である。淡い緑色を呈するが石質は不明。裏面に２個の小孔からなる綴じ穴を３カ所に穿つ。鴻臚館では初めての出土である。46は４層下層から出土した滑石製陽物である。石鍋体部破片を再加工したもので反りがある。

ＳＦ１０５５（Fig.39）

堀南側中段の犬走り状平坦面である。ここでは埋め立て造成後から埋没時までの遺物が混在し、小破片が多い。１は邢窯タイプの小さな玉縁を持つ碗である。２～６はＸＩ類の白磁碗で、幅広の玉縁の小碗（２）、折り返しの明確な小さな玉縁の小碗（３）、青白磁に近い器形の小碗（５）などがある。７～12は越州窯系青磁碗である。13は長沙窯水注胴部破片で褐釉が垂れる。内面は無釉である。14は丸底の須恵器杯で、底部のみヘラ削りするが、底部から体部下半にかけて重ね焼きの際敷かれたわらの痕跡が付着する。15は新羅陶器壺底部破片で、外面に自然釉がかかる。

３．平成１１年度発掘調査のまとめ

昭和62年12月に行われた平和台野球場外野スタンド改修に伴う確認調査は、それまで遺存すら危ぶまれていた鴻臚館遺構を初めて検出するという極めて意義深いものであった。これを契機に平和台野球場南側の発掘調査が進められ、掘立柱建物群から布掘り掘立柱による東門を持つ塀区画、南門を持ち方一町の区画を持つと推定される左右対称の礎石建物群という建物の変遷が明らかになっている。この区域には鴻臚館跡展示館が設置され、遺跡公園として仮整備が行われ、広く公開されている。

昭和62年度の確認調査で鴻臚館遺構の存在を明らかにした平和台野球場内も、鴻臚館の全容解明には不可欠な調査対象地であった。発見当初の方針にしたがって、平成９年度で野球場の供用は終了し、翌10年度には野球場の解体工事、グランド跡地での試掘調査が実施された。その結果グランド部分は野球場建設に伴う工事で、１m近く掘り下げられてはいるものの、西から東に開析する谷の存在を明らかにすることができた。こうして平成11年度から平和台野球場跡地での本格的な発掘調査が開始された。検出された遺構・遺物については先に述べたとおりであるが、以下平成11年度調査結果について簡単にまとめておきたい。

１）遺構遺存状態

平和台野球場建設時に壊滅的な被害を受けた考えられていたグランド部分は、確かに大規模な削平を受けてはいるが、深い遺構は確実に遺存していることがわかった。スタンド部分は一部を除いて大規模な破壊は受けていない。当初予想よりも遺存状態は良かったと言うべきであろう。

２）自然地形谷の存在

すでにボーリング調査、試掘調査の結果から推定されていた事ではあるが、平和台野球場跡地周辺の地形を大きく南北に分ける谷の存在が明らかになった。昭和62年度の確認調査で二間分検出していた布掘り掘立柱列は、その後の調査で確認された第Ⅱ期建物の北側区画に相当すると考えられていた。平成11年度の調査では新たに、この西側延長12間分、約31mを確認した。遺構は谷南側丘陵岩盤部分の範囲内に収まっており、野球場南側でこれまで検出されていた遺構群はこの谷によって北側を区画されていることが明らかになった。

３）筑紫館時代の造成事業

平成11年度調査調査での重要な発見の一つは大規模な造成工事が明らかになったことである。昭和62年度のライト側外野スタンドの確認調査で、トレンチ土層として鴻臚館に関わる造成土が指摘されており、平成４年度の第８，９次調査でも整地跡が確認されている。今回の調査では、単純に平場を確保するだけの埋立整地ではなく、谷の一部を埋め、人為的な堀を形成していることが明らかになり、さらには谷を横断して南北を繋ぐ陸橋状の埋立築堤も同時に行われ、西側には池状の水溜遺構の存在が明らかになった。堀の存在することは北と南とを厳然と区別する必要があった事を示しており、陸橋状通路の存在は、南北が有機的な関係にあったことを示しているといえよう。今後の調査の進展により堀の存在の意味するところが次第に明らかにされよう。

なお、この大規模な谷の埋立造成事業は、平成12年の調査で第Ⅱ期布掘り掘立柱列に切られていることが明らかになり、遅くとも第Ⅱ期建物築造時以前に行われた事が明らかとなった。しかし、第Ⅰ期建物との前後関係は明らかでない。現段階では８世紀前半代以前の埋立といえる。

４）堀の埋没過程

堀は中位に平坦面を持つ二段堀の構造を持つ。深さはグランド面から約3,45mをはかり、規模の大きなものである。この堀の埋没過程堆積は、この地の歴史的な変遷過程を明らかに示している。

自然地形の谷を利用し、筑紫館時代に堀を造ったものであるが、いずれの堀の例に漏れず、火災や建て替え時の瓦等の廃棄場所として利用されている。築造当初から徐々に自然堆積は始まっているが始めに北側から大量の瓦が廃棄され、次ぎに南側から火災に起因すると思われる焼土、木炭が廃棄される。以後南北から自然堆積と数回の瓦廃棄を繰り返すが、中段の平坦面近くまで堆積が進んだ段階で焼土層と大量の瓦を廃棄する層（４層上部）がみられる。この層以上は長期間廃棄等の人為的行為は認められない自然堆積層で、遺物も小破片が見られるのみとなる。鴻臚館での積極的な活動はこの層を境として見られなくなる事から、鴻臚館の廃絶時期は４層上部焼土層の時期、すなわち11世紀半ばに求めることができる。このことは、具体的に鴻臚館の名称が見られるものではないが、永承２(1047）年、「大宰府が宋客宿坊に放火した犯人を捕らえ禁獄する。」 という記録（扶桑略記）に極めて符合する。

従来、大宰府鴻臚館の最後の記録は、寛治５（1091）年、「鴻臚館で某が宋商人季居簡の模本から経本を比校する」という大吉祥陀羅尼経の扉書きとされてきたが、近年の研究（川添1994、田島1995）では、この記録は平安京鴻臚館を示すものと考えられている。遺跡の調査結果からも大宰府鴻臚館は11世紀後半までは下らないことが明らかで、前説が追認できたといえよう。

この層からは北宋初期の製品である白磁ＸＩ類と呼ばれる遺物群が出土する。現在この一群が発見されているのは鴻臚館を中心に、大宰府、平安京に限られており、極めて限定された分布状況を示している。鴻臚館を窓口とした越州窯系青磁を中心とした陶磁器の輸入から、博多を中心とした11世紀後半からの華南白磁の輸入に移行する過渡期の特殊な状況を示すものであろう。またこの白磁に「綱」、「呉」銘墨書を持つものがある。「綱」あるいは中国人名の墨書陶磁器は博多に限っては比較的多く見られるものであるが、以外の地域ではほとんど見られない。鴻臚館でこの様な墨書陶磁器が出土することは、博多における「住蕃貿易」の萌芽が鴻臚館の終末期にはあったということであろう。

堀下半については平成12年度の調査であり、次期報告書でその成果を紹介する予定であるが、厚い堆積層のあることから遺物群の層位的な比較が可能であり、編年の好資料となろう。

５）中世池の瓦廃棄

鴻臚館廃絶後、しばらくの間この一帯に積極的な生活の痕跡は見いだせない。堀は自然堆積によって次第に浅くなり、中世末段階では堀の輪郭を辛うじて残す、東西に細長い池（SG1046）に姿を変えている。この池の中には、福岡城築城前に大量の鴻臚館関係瓦が廃棄されていた。この中には15世紀代の陶磁器を中心に室町時代の陶磁器がまとまって出土している。野球場南側の調査では梵鐘鋳造遺構、墓と思われる地下式横穴が確認されている。既に昭和34（1959）年、この付近から貞和６(1350)年銘のある板碑が発見されており（高野1972）、これらのことから中世寺院の存在が考えられる。しかし、中世遺物の出土量は、池南側斜面より北側斜面が圧倒的に多く、生活の中心は北側にあったものであろう。南側空間は墓域、寺院建物は北側にあったと推定される。しかし、当該期の瓦は見られないことから、瓦葺きではなかったとおもわれる。

池への鴻臚館関連瓦の大量廃棄は、中世段階の鴻臚館跡地の整地によるものであるが、南北両斜面に堆積していることは、南側斜面の瓦の供給地は南、北側斜面は北に求めることが自然であり、鴻臚館建物は北側にも存在していたと推定される。出土量は南北とも膨大な量であり、北側建物も規模の大きな建物だったと考えられる。

瓦の出土量は膨大なもので整理に時間を要しており、次期報告書で詳細を紹介できるものと思うが、北側斜面の瓦に新しいものが多く、南北斜面の瓦の構成比に差のあることが現時点では指摘できる。南北建物群の変遷の違いを示すものであろう。

６）平成12年度の調査について

平成12年度の調査区は、平成11年度調査区北側を約1750㎡を拡幅したものである。前述のとおり平成11年度の調査では堀の存在が明らかになり、その北側にも鴻臚館関係建物の存在が推定された。発掘調査の結果、Fig.38の様に堀を挟んで南側第Ⅱ期建物区画の西側布掘りと軸線を同じくする建物区画が検出された。北側第Ⅱ期建物区画の南西隅に当たるものであろう。平成11年度調査で想定された堀北側建物の存在を裏付けることとなった。詳細については次期報告書で紹介する。

［文献］川添昭二 1994　「中世都市博多の形成と展開」『史学雑誌103-12』
田島　公 1995　「大宰府鴻臚館の終焉」『日本史研究389』
高野孤鹿 1972　「平和台の考古史料」 稿本

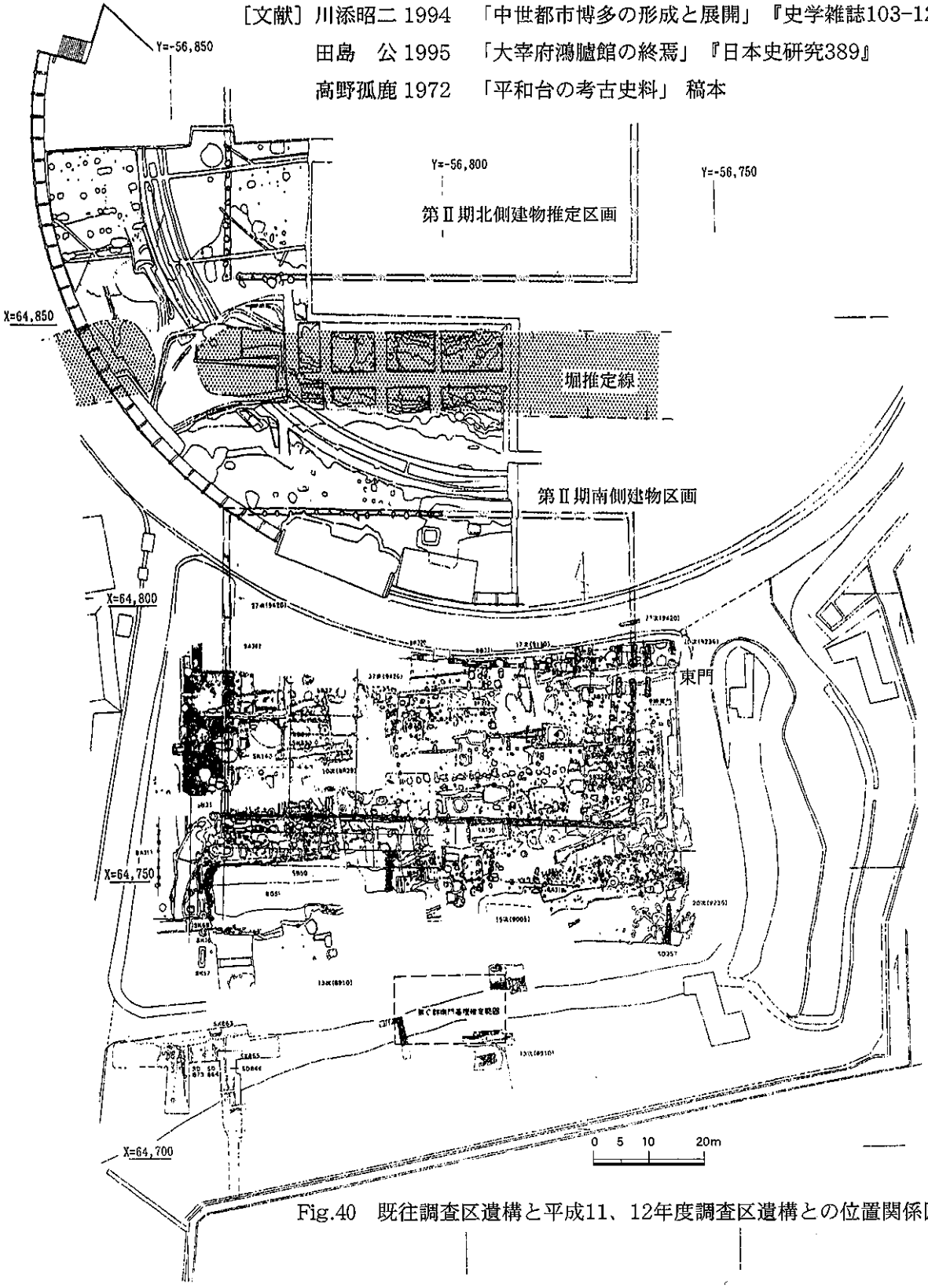
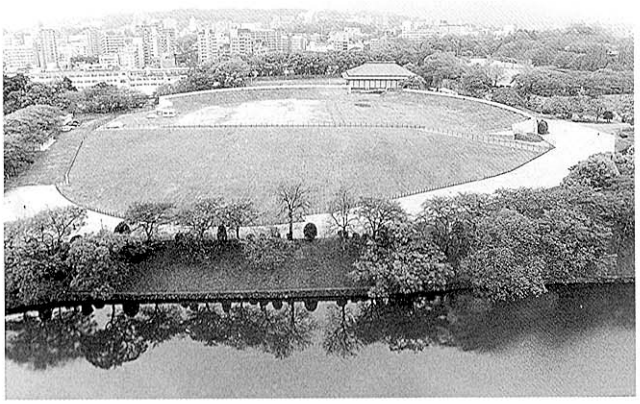


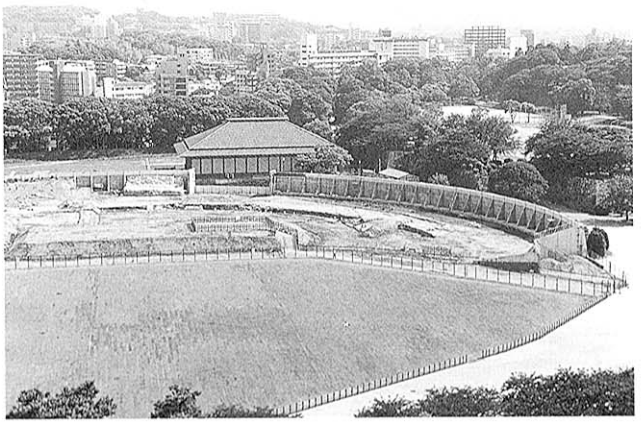
Fig.40　既往調査区遺構と平成11、12年度調査区遺構との位置関係図

図　　版

(PLATES)



1．平和台野球場解体後の状況（北から）



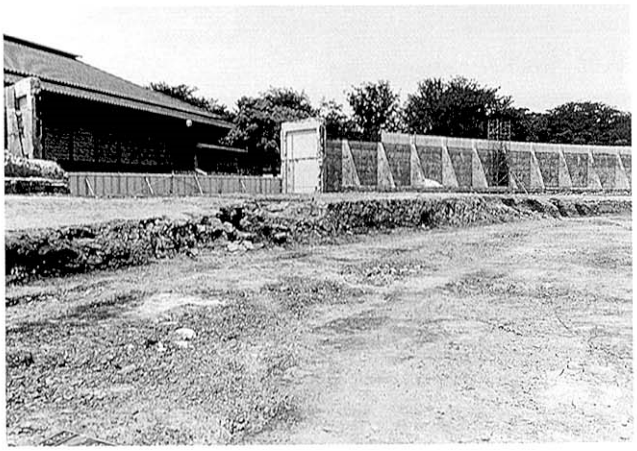
2．平成11年度調査区遠景（北から）



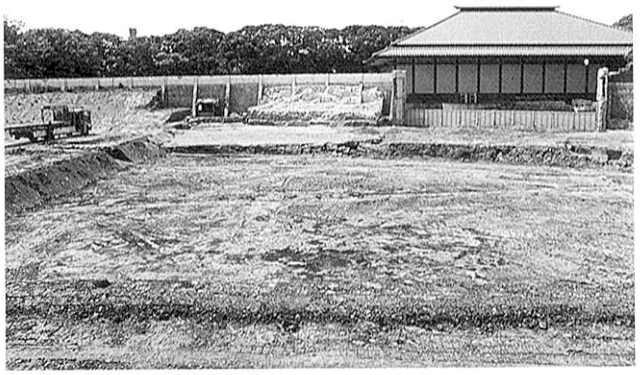
3．戦災焦土検出状況（南から）



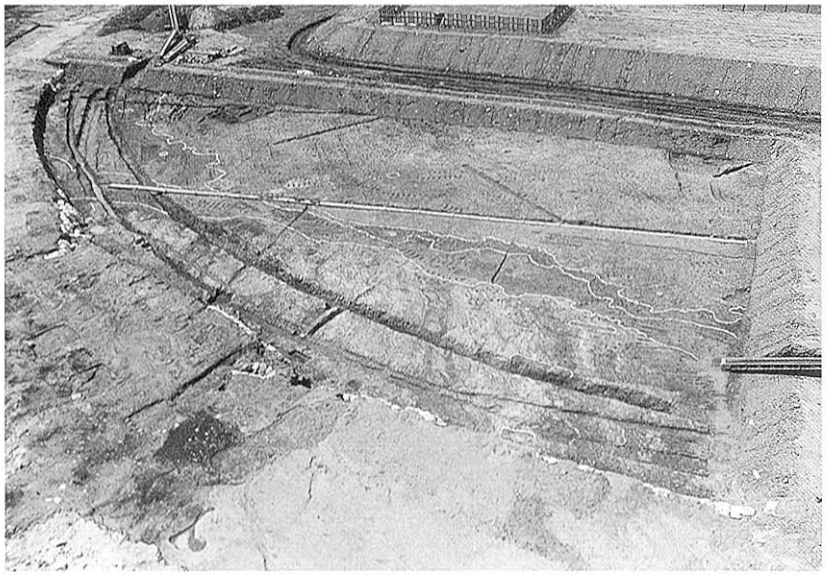
4．盛土利用の見学台（南西から）



5．グランド削平状況（東から）



6．グランド盛土除去後の状況（北から）



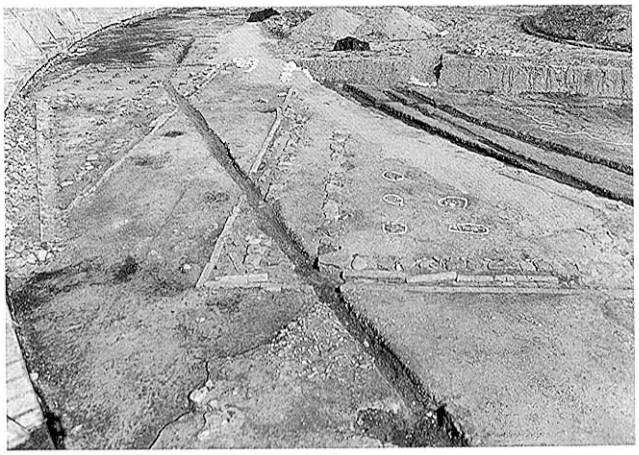
1．グランド内地層変換線確認状況（南から）



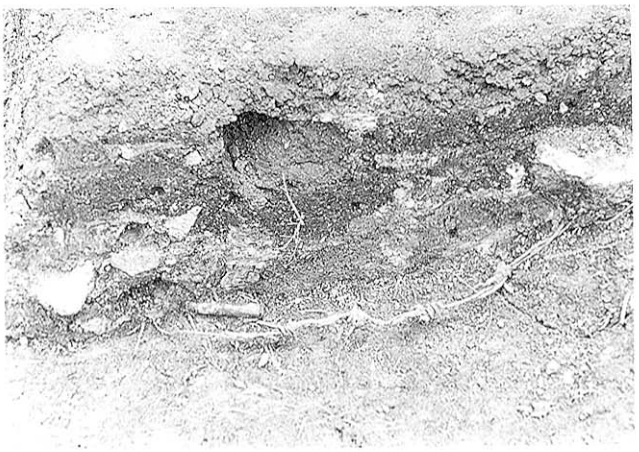
2．ライトスタンド側上層遺構検出状況（南東から）



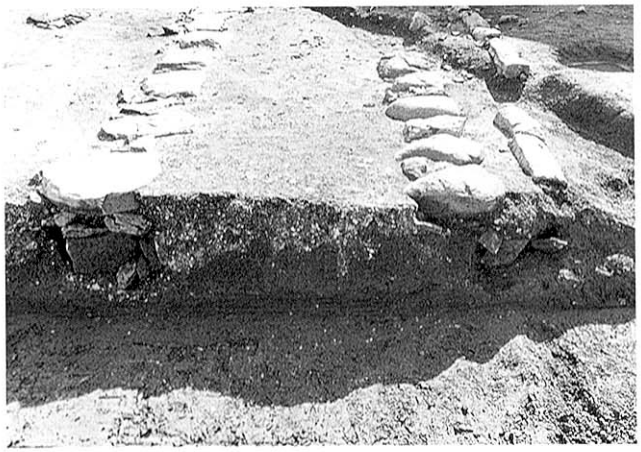
3．グランド内土層変換線（東から）



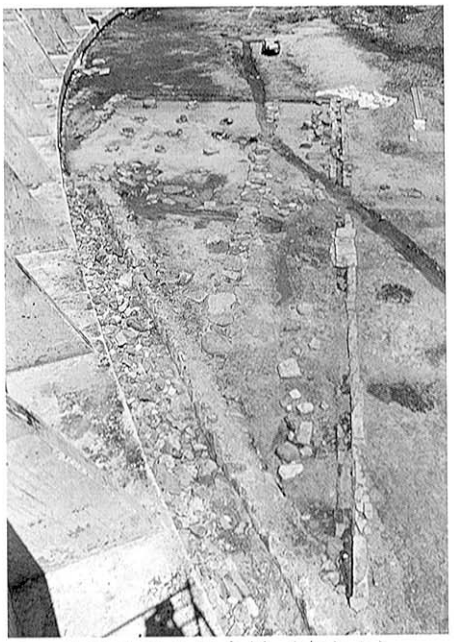
1．ＳＢ１０１８全景（南から）



2．戦災焦土・薬莢・有刺鉄線出土状況（南から）



3．ＳＢ１０１８　基礎断面（北から）



4．ＳＢ１０１７全景（南から）



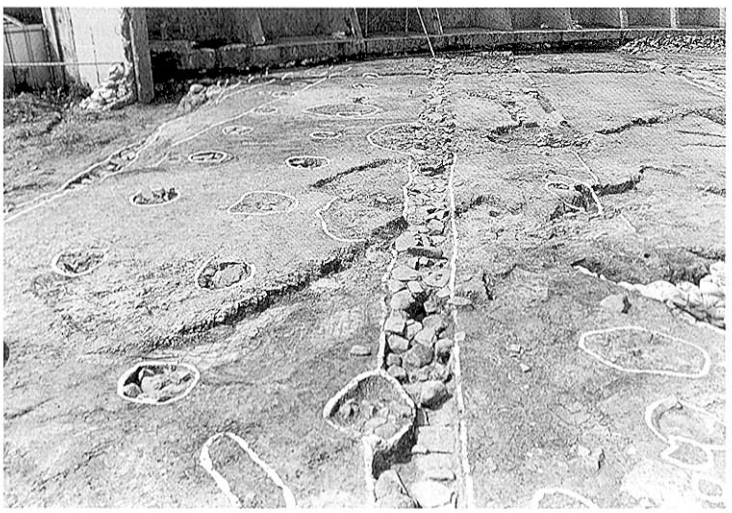
6．ＳＢ１０１７　基礎断面（北から）



5．ＳＢ１０１７全景（北から）



1．ＳＢ１０２８全景（西から）



2．ＳＢ１０２８全景（東から）



3．ＳＢ１０２８ 北側廂部分整地（西から）



4．ＳＢ１０２８と瓦溜り（北西から）



1．岩盤部分遺検出状況（南から）



2．ＳＸ１０３７（西から）



3．ＳＫ１０５２（西から）



4．ＳＫ１０４３（東から）



5．ＳＫ１０４３（西から）



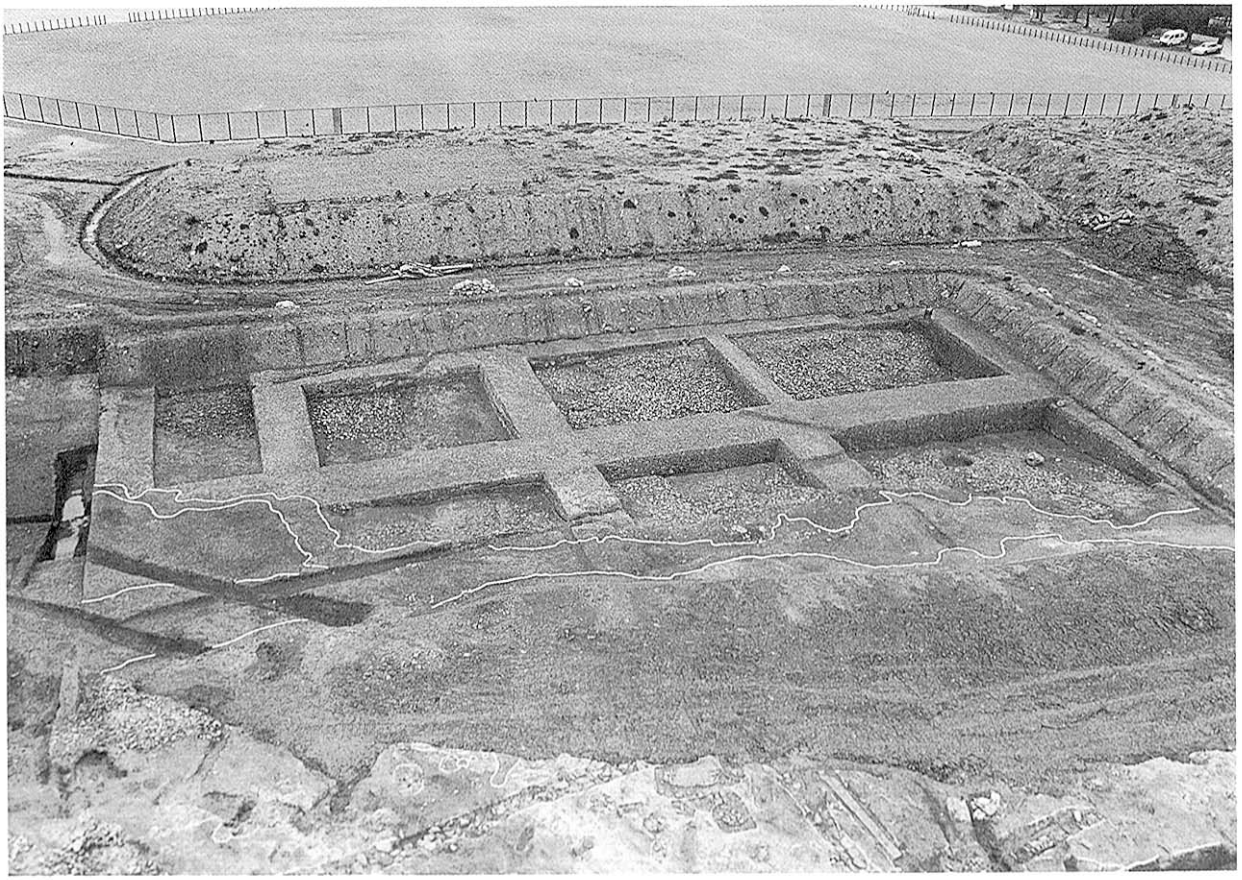
6．ＳＫ１０４３　遺物出土状況（北から）



1．ＳＧ１０４６全景（東から）



2．ＳＧ１０４６全景（西から）

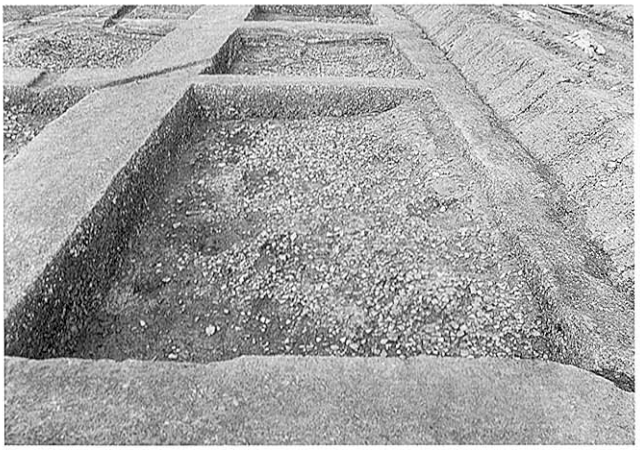


1．ＳＧ１０４６全景（南から）

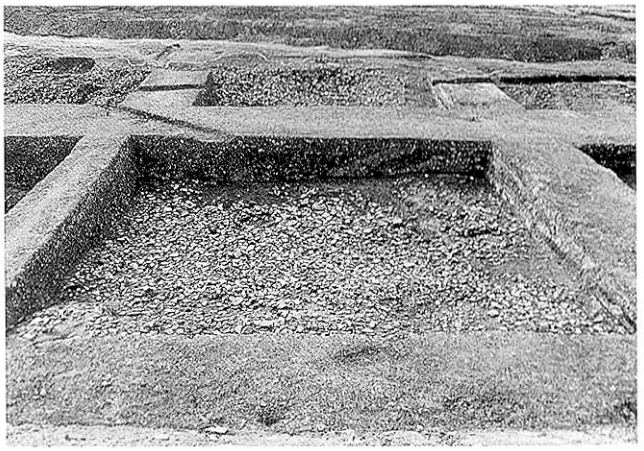


2．ＳＧ１０４６とＳＭ１０４７（福岡城埋土）（西から）

ＳＧ１０４６　瓦出土状況



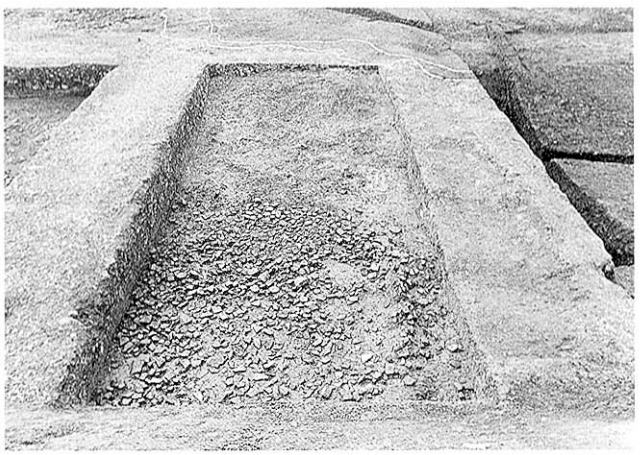
１．ｆ７９０区（東から）



２．ｆ８００区（北から）



３．ｆ８１０区（北から）



４．ｆ８２０区（北から）



５．ｆ８２０区　鬼瓦出土状況（南から）

ＳＧ１０４６　瓦出土状況



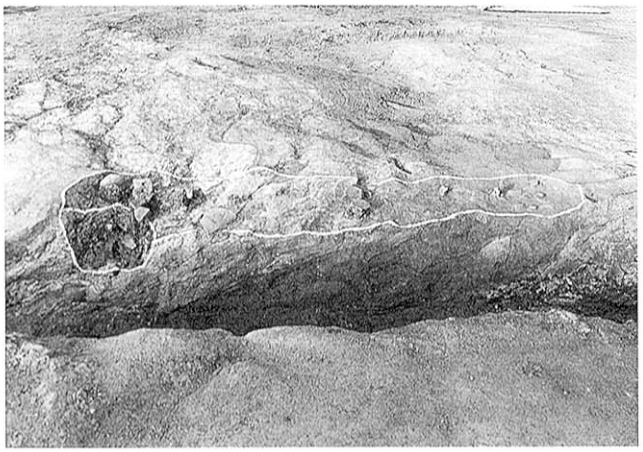
１．ｃ７９０区（北西から）



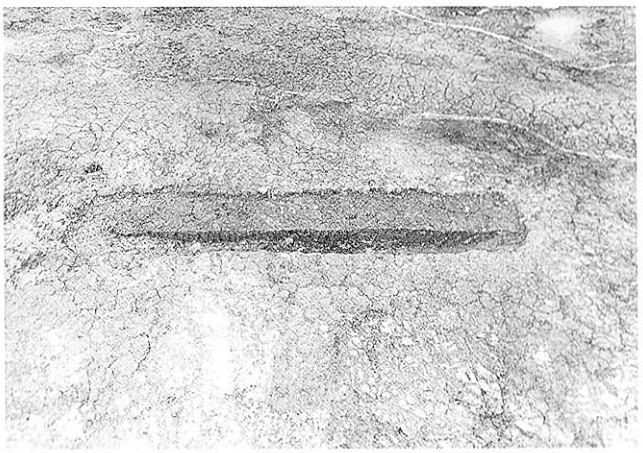
２．ｃ７９０区　調査風景（北西から）



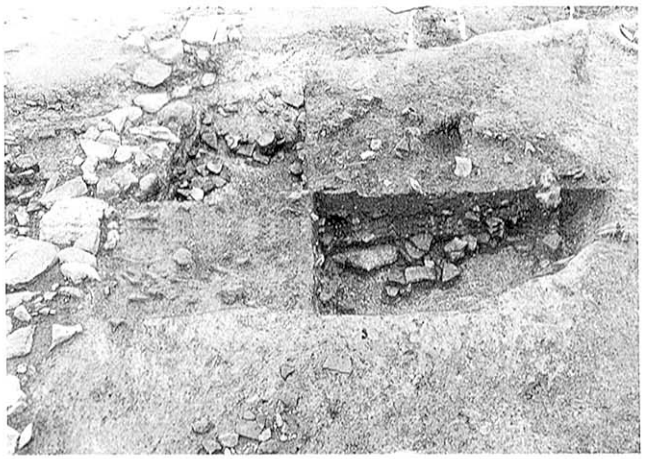
３．ｆ８１０区　明代青磁出土状況（南から）



1．ＳＫ１０１５全景（南から）



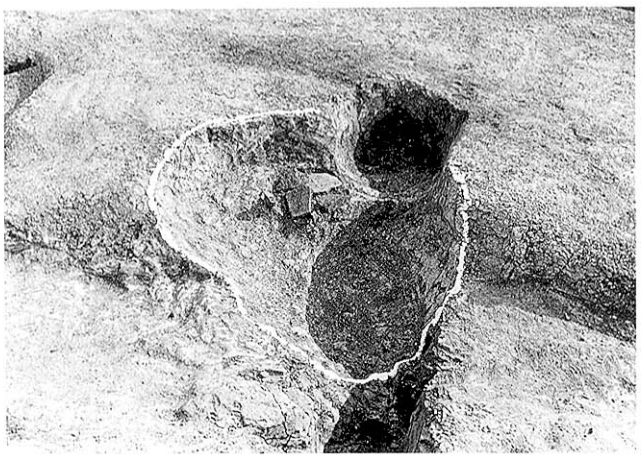
2．ＳＫ１０１６全景（南から）



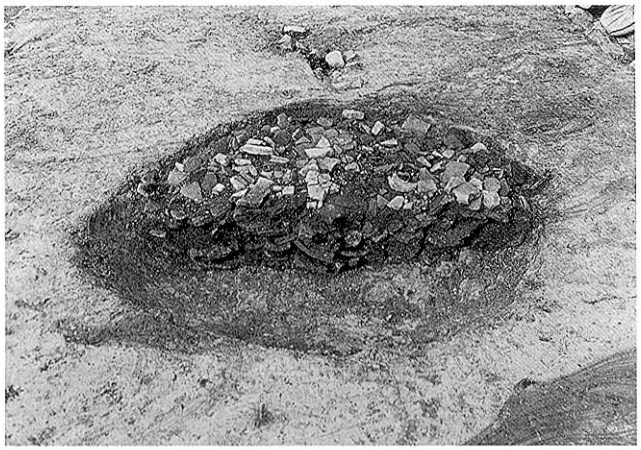
3．ＳＫ１０１４　遺物出土状況（西から）



4．ＳＫ１０４１全景（西から）



5．ＳＫ１０３４全景（北から）



1．ＳＫ１０４２全景（西から）



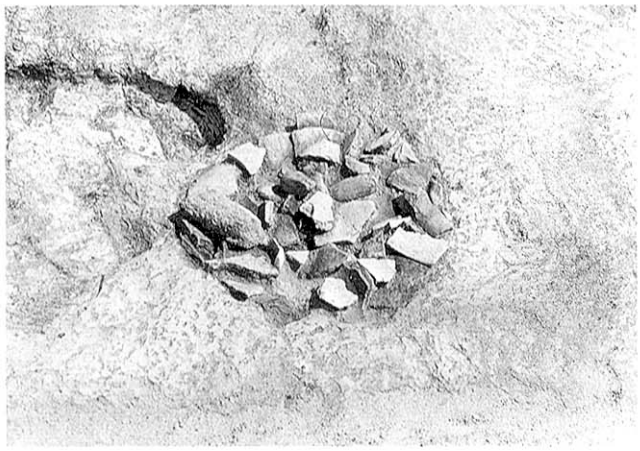
2．ＳＫ１０６９全景（南北から）



3．ＳＫ１０７１全景（東から）



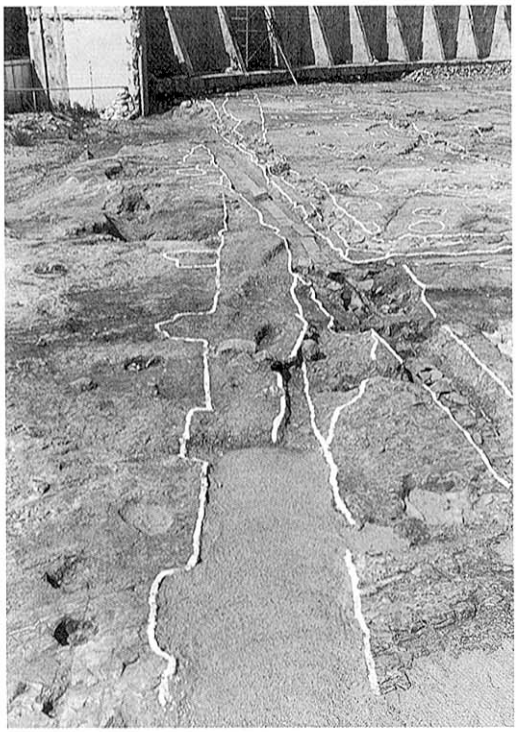
4．ＳＫ１０７５全景（北から）



5．ＳＫ１０７６全景（北から）



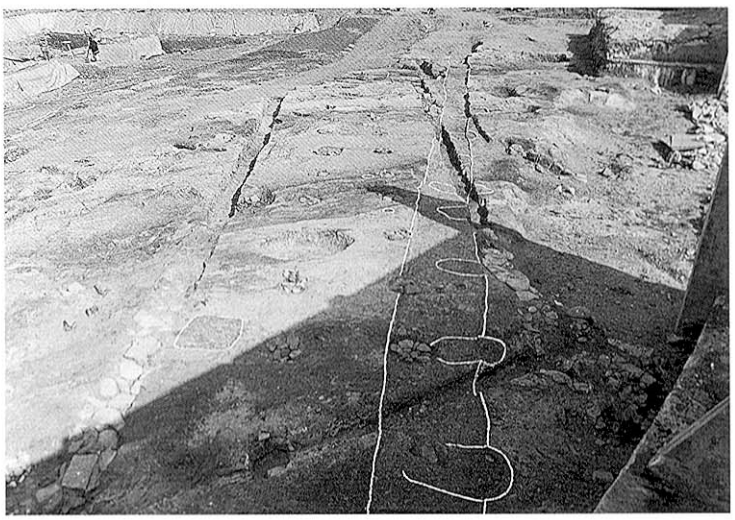
6．ＳＫ１０７９全景（北から）



1．ＳＡ１０５９　布掘検出状況（東から）



2．ＳＡ１０５９　柱抜穴検出状況（東から）



3．ＳＡ１０５９（西から）



2．ＳＢ１０７０（東から）

ＳＡ１０５９　柱抜穴断面（東から）



１．柱抜穴　０



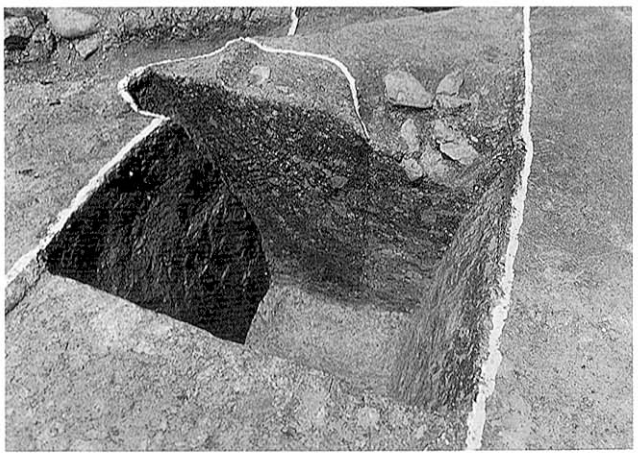
２．柱抜穴　５



３．柱抜穴　８



４．柱抜穴　６



５．柱抜穴　11



６．柱抜穴　12



1．下部遺構全景（西から）



2．ＳＭ１０４４　陸橋状築堤（南から）



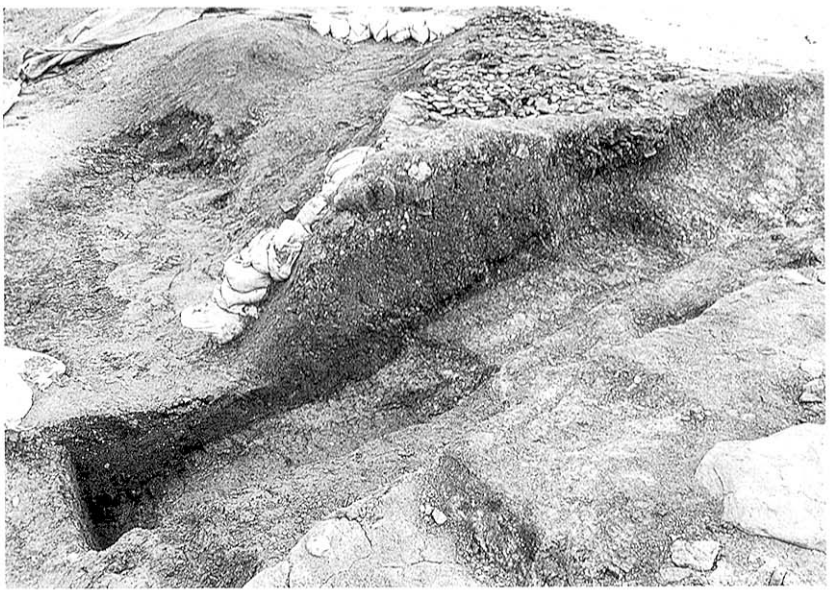
3．ＳＤ１０４５　堀西端部（南から）



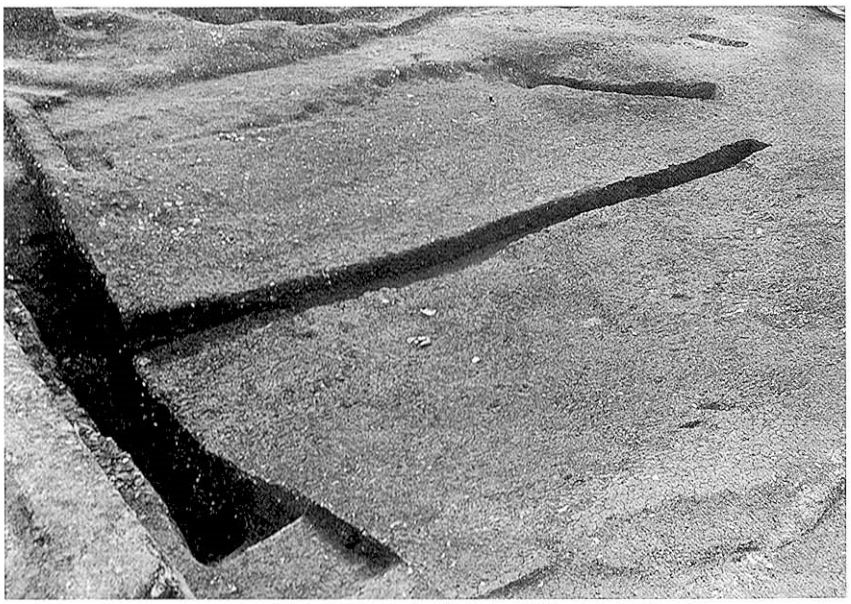
1．ＳＤ１０４５　南北土層断面（北西から）



2．ＳＤ１０４５　東西土層断面（北から）



3．ＳＭ１０４４　南北土層断面（西から）Ｙ＝－56,828ライン



1．ＳＤ１０４５　４層上部焼土白磁出土状況（北東から）



2．ＳＤ１０４５　４層上部焼土白磁出土状況（東から）



3．「綱」銘墨書白磁出土状況（南から）



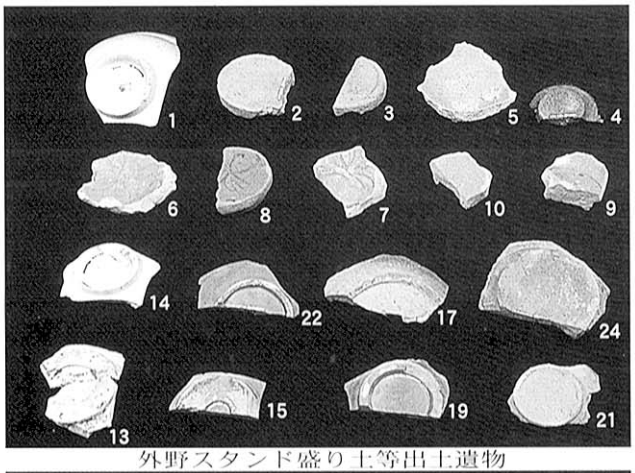
1．ＳＤ１０４５，ＳＸ１０７８（西から）



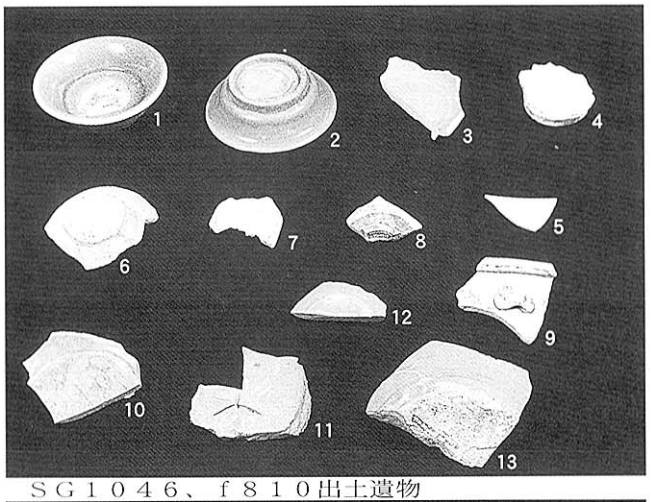
2．ＳＸ１０７８（北から）



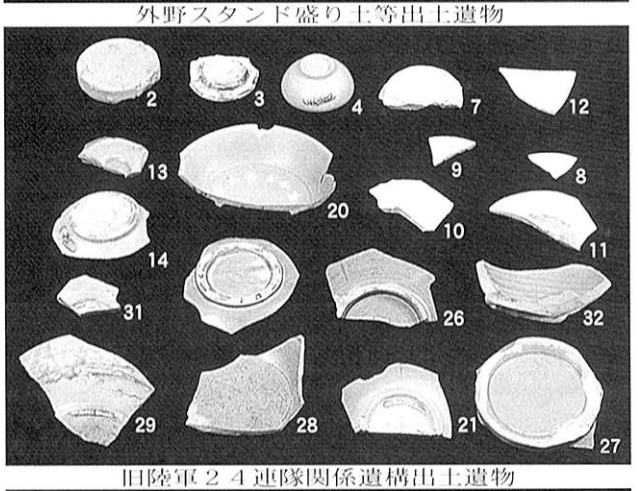
3．ＳＸ１０７８（西から）



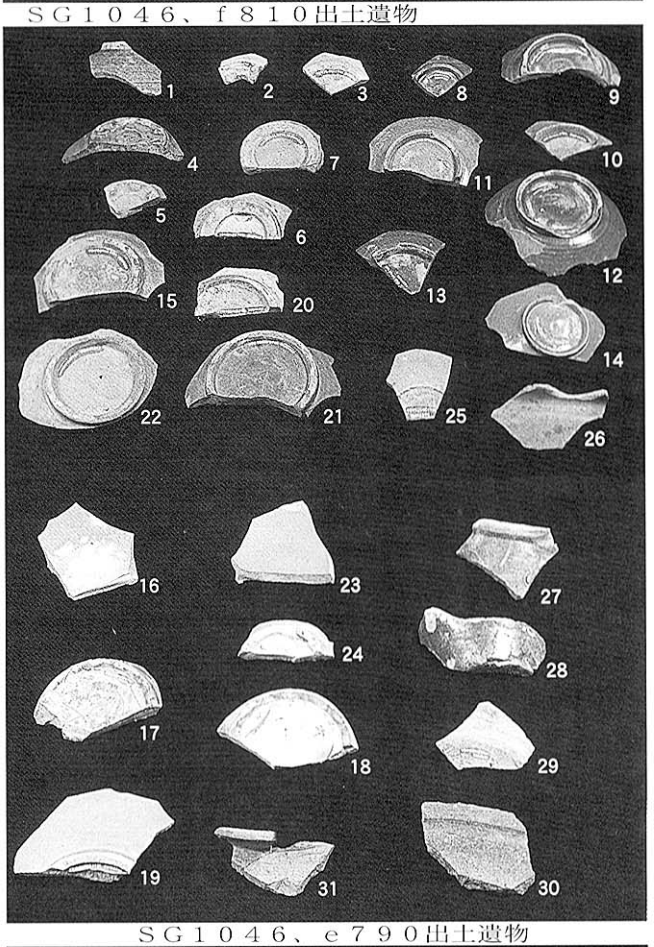
外野スタンド盛り土等出土遺物



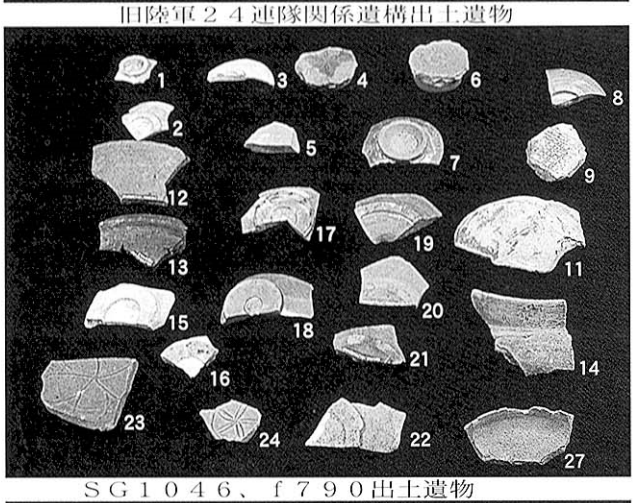
SG1046、f810出土遺物



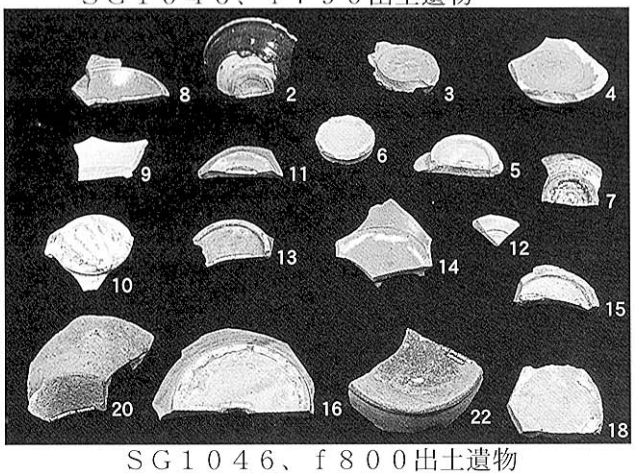
旧陸軍24連隊関係遺構出土遺物



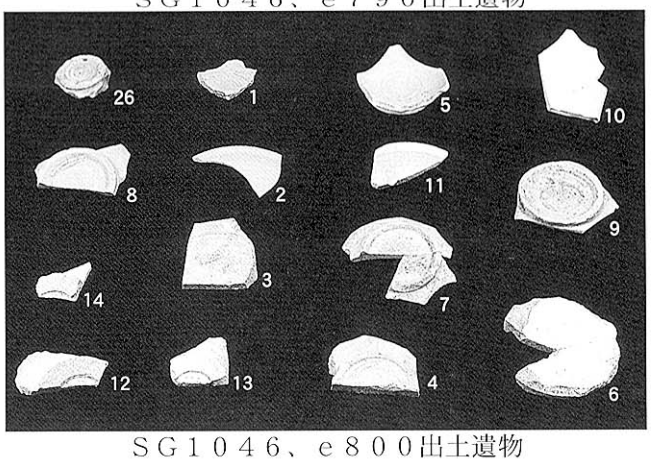
SG1046、e790出土遺物



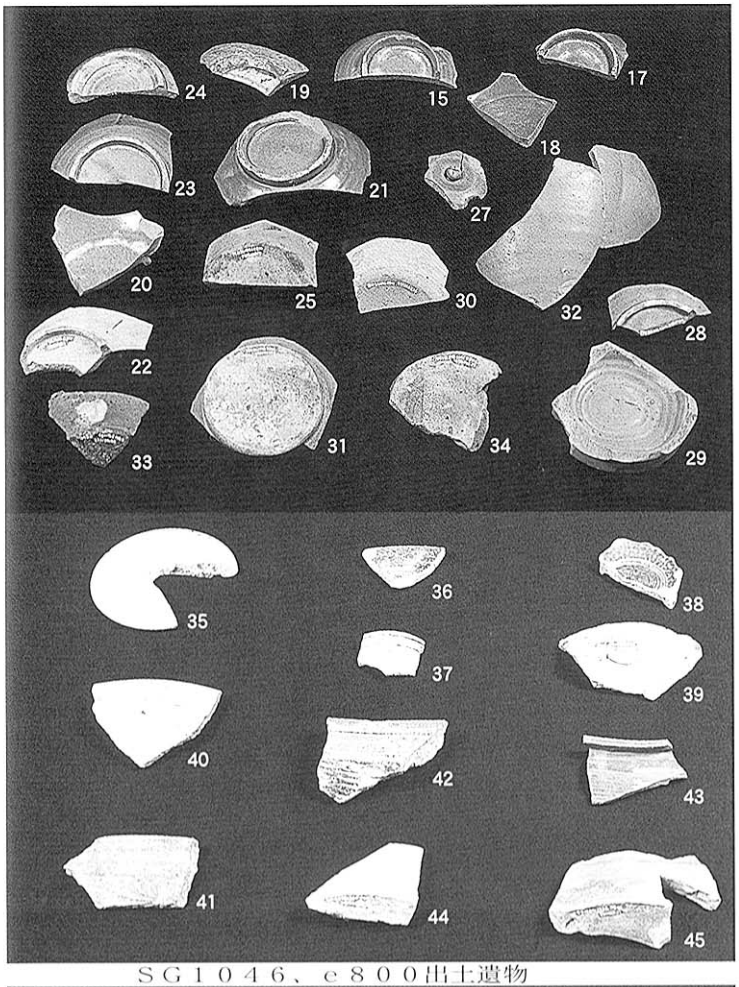
SG1046、f790出土遺物



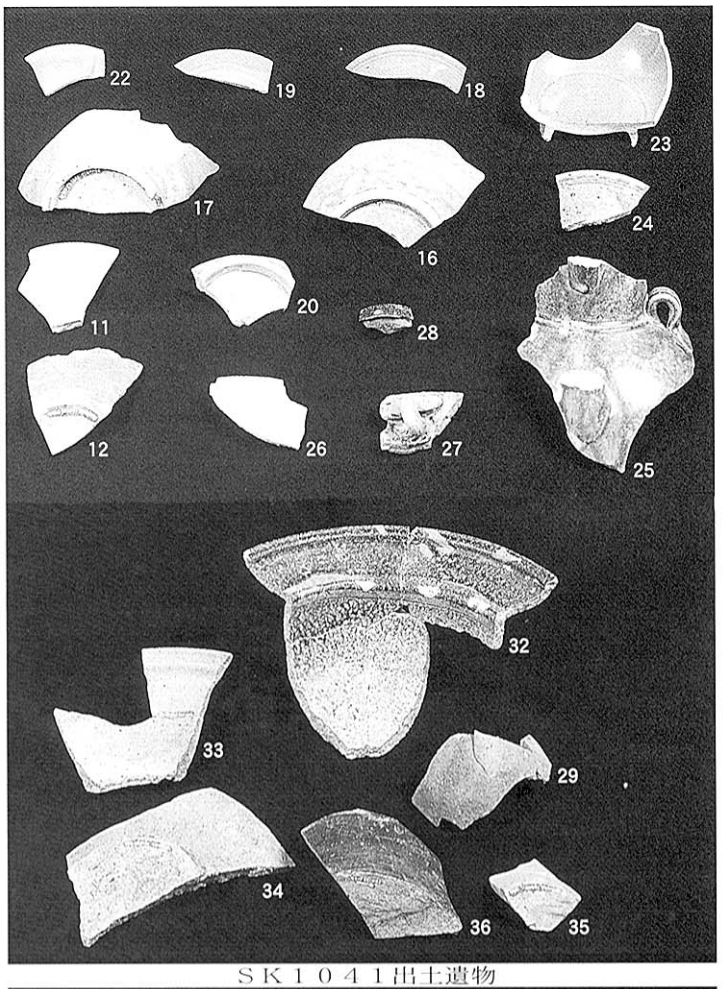
SG1046、f800出土遺物



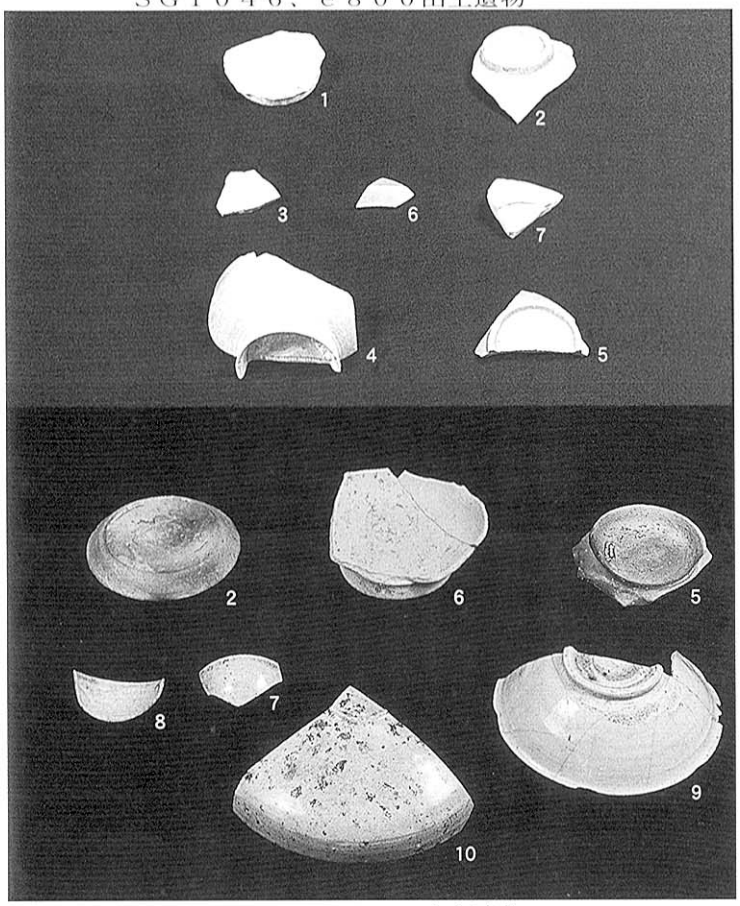
SG1046、e800出土遺物



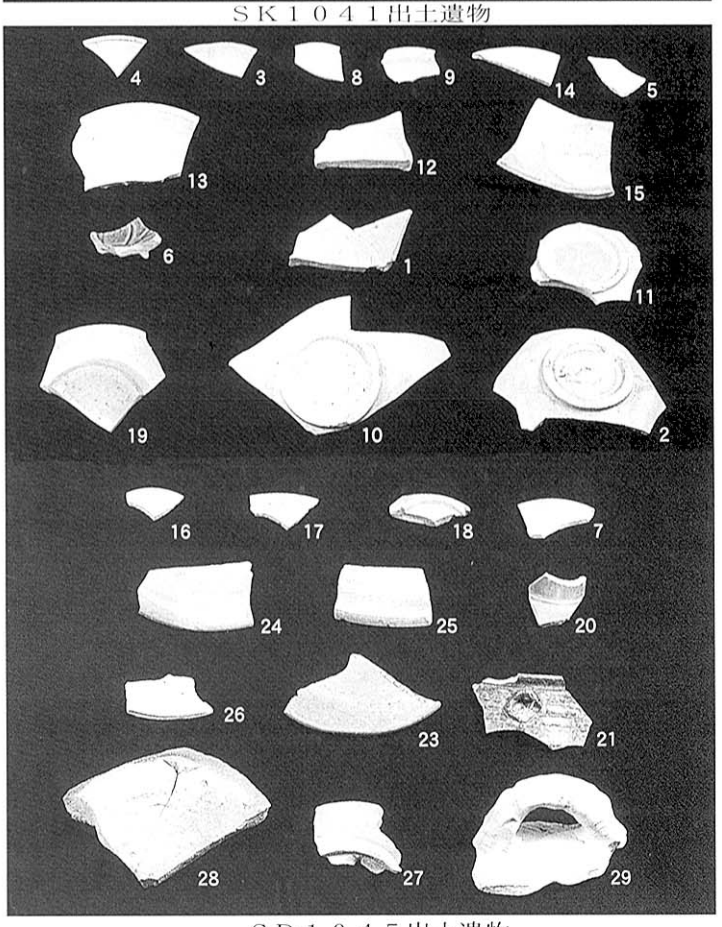
ＳＧ１０４６、ｅ８００出土遺物



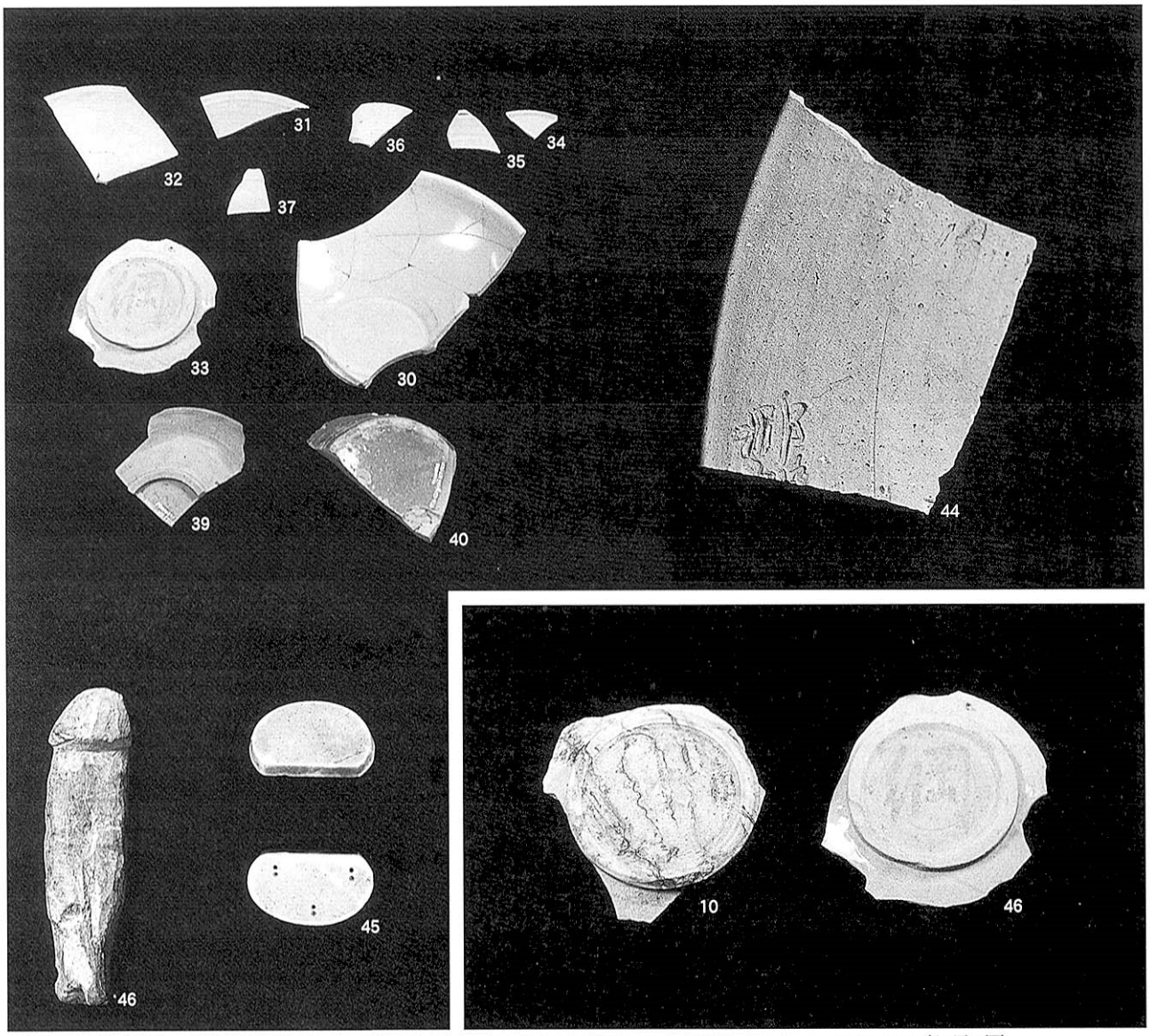
ＳＫ１０４１出土遺物



ＳＫ１０４１出土遺物



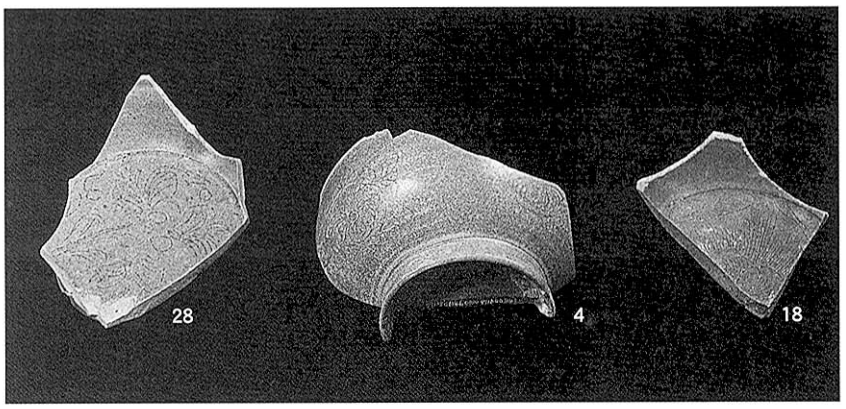
ＳＤ１０４５出土遺物



ＳＤ１０４５出土遺物

SG1046、f800　　SD1045谷頭4層

墨書陶磁



SB1028整　　SG1046、e 810　　SG1046、e 800

毛彫り越州窯青磁

鴻 臚 館 跡 11
— 平成11年度発掘調査報告書 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第695集

発　　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
平成13年3月31日
印　　刷　株式会社 玉 川 印 刷
福岡市中央区渡川三丁目18番11号